

有田・小田部

第 22 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第427集

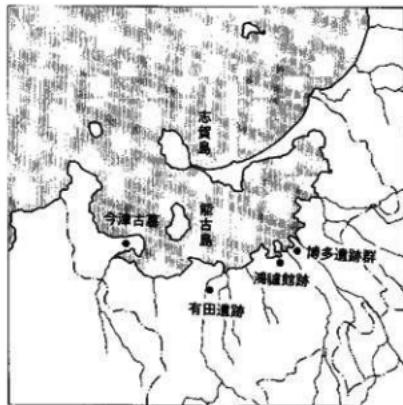
1995

福岡市教育委員会

有田・小田部

第22集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第427集



1995

福岡市教育委員会



第54次調査 II区東側全景（西から）



第54次調査 溝 SD 03・04（東から）

序 文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年の福岡市は著しい都市化によってその姿を変貌しつつあります。

早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、そのために遺跡も多く存在している地域ですが、都市の市街地の拡大と共にこの地域にも都市基盤の整備がすすめられ、これに伴い埋蔵文化財の発掘調査も増加しているところです。

福岡市教育委員会では、この地域における各種の開発事業に伴い、失なわれゆく埋蔵文化財の保存と保護措置に努めているところです。

本書は昭和56・57年度に発掘調査を行った有田遺跡第54・68・69・73次調査の成果について報告するものです。これらの調査地点は「有田・小田部」と呼ばれる台地上に立地しており、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも縄文時代晩期の環濠やその出土遺物は早良平野における稲作の始まりの時期を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

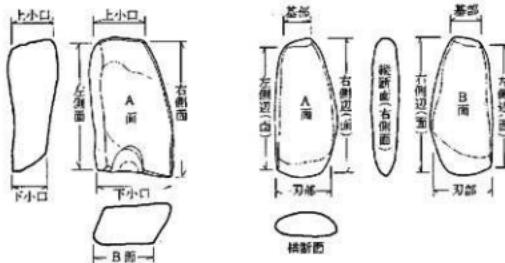
平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

- (1) 本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和56・57年度の2ヶ年において国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には昭和56年度の第54次・第68次調査、昭和57年度の第69次・第73次調査について収録する。
- (3) 本書では有出・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 発掘調査は第54次・第68次調査を井澤洋一、山崎龍雄、杉山富雄が、第69・73次調査を井澤洋一、松村道博が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺構実測は第54次・第68次調査を井澤、山崎、松尾正直、渡辺武子、清原ユリ子が、第69次・第73次調査は井澤、松村、山口勝己、池野尚昭、谷沢仁、辻哲也、清原が行った。
- (6) 本書に掲載した遺物実測は、牛房綾子、池田孝弘、田中昭子、吉永祐美子が行った。石器、陶磁器については器械実測を行い、吉田扶希子、廣嶋香が担当した。
- (7) 遺構・遺物の製図は主に吉永、牛房、廣嶋が行い、石器の製図は井澤が担当した。
- (8) 遺構の写真撮影は第54次・第68次調査については井澤、山崎が、第69次・第73次調査については井澤、松村が分担して行い、遺物の撮影は吉田、池田孝弘が行った。
- (9) 本書に掲載する遺構一覧表は池田、牛房が、遺物の一覧表は井澤、三浦明子が作成した。
- (10) 本書作成にあたっては福田小菊、多田映子、西口キミ子、小松原澄江、池田洋子の協力を得た。
- (11) 遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けて。遺構の略号として用いたのは SC (住居跡)、SE (井戸)、SK (土壙)、SX (構築物)、SB (掘立柱建物)、SP (小穴) である。
- (12) 本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。
- (13) 本書に用いた方位は磁北である。
- (14) 本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- (15) 本書の執筆は井澤が担当し、編集は牛房の協力のもと井澤が行った。



本文目次

	頁
第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査組織	1
(1) 昭和56年度の調査組織	1
(2) 昭和57年度の調査組織	1
(3) 平成6年度資料整理	2
第2章 有田・小田部の歴史	7
(1) 立地・歴史的環境	7
(2) 文献資料	7
第3章 第54次調査	9
1. 地形と概要	9
(1) 立地	9
(2) 概要	9
2. 遺構説明	12
(1) 溝 (SD)	12
(2) 小穴 (SP)	19
3. 遺物説明	19
(1) 溝 (SD) 出土遺物	19
(2) 表土出土遺物	36
4. まとめ	38
第4章 第68次調査	51
1. 地形と概要	51
(1) 立地	51
(2) 概要	51
2. 遺構説明	52
(1) 土壌 (SK)	52
(2) 溝 (SD)	55
3. 遺物説明	59
(1) 包含層・表土出土遺物	59
(2) 溝 (SD) 出土遺物	59
4. まとめ	59
第5章 第69次調査	62
1. 地形と概要	62
(1) 立地	62
(2) 概要	62
2. 遺構説明	66

(1) 土壌 (SK)	66
(2) 井戸 (SE)	66
(3) 掘立柱建物 (SB)	66
(4) 溝 (SD)	69
3. 遺物説明	74
(1) 井戸 (SE) 出土遺物	74
(2) 掘立柱建物 (SB) 出土遺物	74
(3) 溝 (SD) 出土遺物	74
(4) Pit (SP) 出土遺物	74
(5) 包含層出土遺物	74
(6) グリット出土遺物	78
(7) 遺構面出土遺物	78
(8) 試掘調査出土遺物	78
4.まとめ	85
第6章 第73次調査	93
1. 地形と概要	93
(1) 立地	93
(2) 概要	93
2. 遺構説明	97
(1) 井戸 (SE)	97
(2) 掘立柱建物 (SB)	98
(3) 溝 (SD)	98
(4) Pit (SP)	100
3. 遺物説明	100
(1) 井戸 (SE) 出土遺物	100
(2) 掘立柱建物 (SB) 出土遺物	100
(3) 溝 (SD) 出土遺物	100
(4) Pit (SP) 出土遺物	103
4.まとめ	103

挿 図 目 次

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)	3
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (縮尺1/7,500)	4
Fig. 3 調査地点位置図 (縮尺1/8,000)	8
Fig. 4 調査地点及び石組井戸・土壙配置図 (縮尺1/3,000)	10
Fig. 5 第54次調査地点位置図 (縮尺1/500)	10
Fig. 6 第54次調査遺構配置図 (縮尺1/200)	11
Fig. 7 溝 SD 01実測図 (縮尺1/40)	14

Fig. 8	溝 SD 02実測図（縮尺1/60）	15
Fig. 9	溝 SD 03実測図（縮尺1/40）	17
Fig. 10	溝 SD 04実測図（縮尺1/40）	18
Fig. 11	溝 SD 01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	20
Fig. 12	溝 SD 02出土遺物実測図①（縮尺1/3）	21
Fig. 13	溝 SD 02出土遺物実測図②（縮尺1/3）	22
Fig. 14	溝 SD 02出土遺物実測図③（縮尺1/3・1/4）	23
Fig. 15	溝 SD 02出土遺物実測図④（縮尺1/4）	25
Fig. 16	溝 SD 03出土遺物実測図（縮尺1/3）	27
Fig. 17	溝 SD 04出土遺物実測図①（縮尺1/3）	28
Fig. 18	溝 SD 04出土遺物実測図②（縮尺1/3）	29
Fig. 19	溝 SD 04出土遺物実測図③（縮尺1/3）	30
Fig. 20	溝 SD 04出土遺物実測図④（縮尺1/3）	33
Fig. 21	溝 SD 04出土石製品実測図①（縮尺1/3）	35
Fig. 22	溝 SD 04出土石製品実測図②（縮尺1/3）	36
Fig. 23	溝 SD 04出土石製品実測図③（縮尺1/1）	38
Fig. 24	表土・土中遺物実測図（縮尺1/3）	39
Fig. 25	環濠配置図（縮尺1/2,000）	41
Fig. 26	第68次調査地点位置図（縮尺1/300）	51
Fig. 27	第68次調査遺構配置図（縮尺1/100）	52
Fig. 28	第68次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）	55
Fig. 29	土壤 SK 01～05実測図（縮尺1/30）	56
Fig. 30	各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	57
Fig. 31	調査地点及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）	60
Fig. 32	第69次調査地点位置図（縮尺1/300）	62
Fig. 33	第69次調査第1面遺構配置図（縮尺1/100）	64
Fig. 34	第69次調査第2面遺構配置図（縮尺1/100）	65
Fig. 35	土壤 SK 01～04・井戸SE01・02実測図（縮尺1/40）	67
Fig. 36	掘立柱建物 SB 01・03・04実測図（縮尺1/80）	69
Fig. 37	掘立柱建物 SB 02実測図（縮尺1/80）	70
Fig. 38	各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）	75
Fig. 39	Pit 出土遺物実測図（縮尺1/3）	76
Fig. 40	包含層出土遺物実測図①（縮尺1/3）	77
Fig. 41	包含層出土遺物実測図②（縮尺1/3）	78
Fig. 42	No. 1 グリット出土遺物実測図（縮尺1/3）	81
Fig. 43	No. 1～3 グリット出土遺物実測図（縮尺1/3）	82
Fig. 44	遺構面出土遺物実測図（縮尺1/3）	83
Fig. 45	第 8・21・69・156次調査遺構配置図（縮尺1/400）	86
Fig. 46	第73次調査地点位置図（縮尺1/300）	93
Fig. 47	第73次調査遺構配置図（縮尺1/100）	95

Fig. 48	第73次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）	96
Fig. 49	井戸 SE 01実測図（縮尺1/40）	97
Fig. 50	掘立柱建物 SB 01～04実測図（縮尺1/80）	99
Fig. 51	各遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）	100
Fig. 52	第26・73・138・151次調査遺構配置図（縮尺1/400）	102

表 目 次

Tab. 1	第54次調査遺構一覧表	12
Tab. 2	第54次調査遺物一覧表	42
Tab. 3	第54次調査青銅製品及び鉄製品一覧表	48
Tab. 4	第54次調査石製品一覧表	48
Tab. 5	第68次調査遺構一覧表	54
Tab. 6	第68次調査遺物一覧表	61
Tab. 7	第68次調査丸瓦計測表	61
Tab. 8	第68次調査平瓦計測表	61
Tab. 9	第68次調査石製品一覧表	61
Tab. 10	掘立柱建物一覧表	69
Tab. 11	第69次調査遺構一覧表	87
Tab. 12	第69次調査遺物一覧表	88
Tab. 13	第69次調査平瓦計測表	92
Tab. 14	第69次調査石製品一覧表	92
Tab. 15	第73次調査遺構一覧表	97
Tab. 16	掘立柱建物一覧表	98
Tab. 17	第73次調査遺物一覧表	101
Tab. 18	第73次調査石製品一覧表	101

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市は、昭和50年までに1市30町村が合併した都市で、面積は約336.81haを測る。平野部は大きく分けると福岡平野と早良平野からなっている。有田・小田部地区は福岡市の西部に広がる早良平野のほぼ中央部に位置し、台地上の面積は約70万m²を測る。この地域はかつては福岡市近郊の農村地帯であった。昭和47年に福岡市が政令指定都市に指定された以降、九州経済の中核都市として日醒しく発展すると共に、人口の集中にしたがって福岡市の西部地域は道路網の整備や地下鉄の開通によって住宅化が著しく進められているところである。有田・小田部地区も同様に過日の田園・畑作地域の面影はなく、現在では高層アパートが林立している。

福岡市教育委員会では、昭和50年より有田・小田部地区のこれらの開発に対処して発掘調査を実施しており、平成5年度現在までに174件を数える。多くは個人専用住宅であったが、近年は学校建設、市営住宅建設などの公共事業や大型の民間の開発事業も含まれている。本書では個人専用住宅及び、店舗付住宅など国庫補助の対象事業として発掘調査を実施した昭和56年度の第54次・第68次調査、昭和57年度の第69次・第73次調査の成果を報告するものである。

2. 発掘調査組織

(1) 昭和56年度の調査組織（第54次・第68次調査）

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

庶務担当 埋蔵文化財第2係長 折尾 学（庶務）岡島洋一

発掘担当 井澤洋一、山崎龍雄、杉山富雄

調査協力者 松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、山口勝巳、安岡洋二、安達昌利、前田治郎、松井フユ子、坂口フミ子、佐藤テル子、金子山利子、清原ユリ子、渡辺武子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チカ、内尾トミ子、真子昌子、真鍋町代、佐谷静枝、尾園佳枝、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子

(2) 昭和57年度の調査組織（第69次・第73次調査）

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

庶務担当 埋蔵文化財第2係長 折尾学（庶務）岡島洋一

発掘担当 井澤洋一、松村道博

調査補助員 山口勝巳、池野尚昭、谷沢仁、辻哲也

調査協力者 松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、渡辺武子、松井フユ子、佐藤

テル子、金子由利子、清原ユリ子、真子昌子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、
土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、
中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子、平井和子、後藤ミサヲ、柴田勝子、柴田春代、
緒方マサヨ、山田悦子、安部宏、堺裕明、前田治郎、安岡洋二、明野隆、西島健一、
前田乱、松江宏文、萩原陽一郎、北川智恵美

(3) 平成6年度資料整理

整理主体 福岡市教育委員会

庶務担当 埋蔵文化財課第1係 内野保基

整理報告 福岡市博物館学芸課主査 井澤洋一（前職 埋蔵文化財課）

整理調査員 牛房綾子、吉田扶希子、廣寄香、池田孝弘

整理作業員 多田映子、福田小菊、西口キミ子、田中昭子、三浦明子、吉永祐美子、小松原澄江

(有田第54次調査)

遺跡調査番号	8 1 1 6		遺跡略号	ART-54	
地番	有田2丁目16-1		分布地図番号	原82	
開発面積	1,224m ²	調査対象面積	1,224m ²	調査面積	233m ²
調査期間	昭和56年7月22日～7月29日				

(有田第68次調査)

遺跡調査番号	8 2 0 9		遺跡略号	ART-68	
地番	有田2丁目17-42		分布地図番号	原82	
開発面積	146m ²	調査対象面積	146m ²	調査面積	76m ²
調査期間	昭和56年6月8日～6月15日				

(有田第69次調査)

遺跡調査番号	8 2 1 0		遺跡略号	ART-69	
地番	有田1丁目13-10		分布地図番号	原82	
開発面積	649m ²	調査対象面積	649m ²	調査面積	202m ²
調査期間	昭和57年6月16日～7月31日				

(有田第73次調査)

遺跡調査番号	8 2 1 4		遺跡略号	ART-73	
地番	小田部1丁目189		分布地図番号	室見81	
開発面積	144m ²	調査対象面積	144m ²	調査面積	62m ²
調査期間	昭和57年9月28日～10月8日				



1. 西新町遺跡 2. 藤崎遺跡 3. 原遺跡 4. 原詠傳遺跡 5. 鮎合遺跡
6. 鮎原遺跡 7. 千隈遺跡 8. 船町遺跡 9. 原染町遺跡 10. 有出七田前遺跡 11. 楠木櫻田遺跡

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

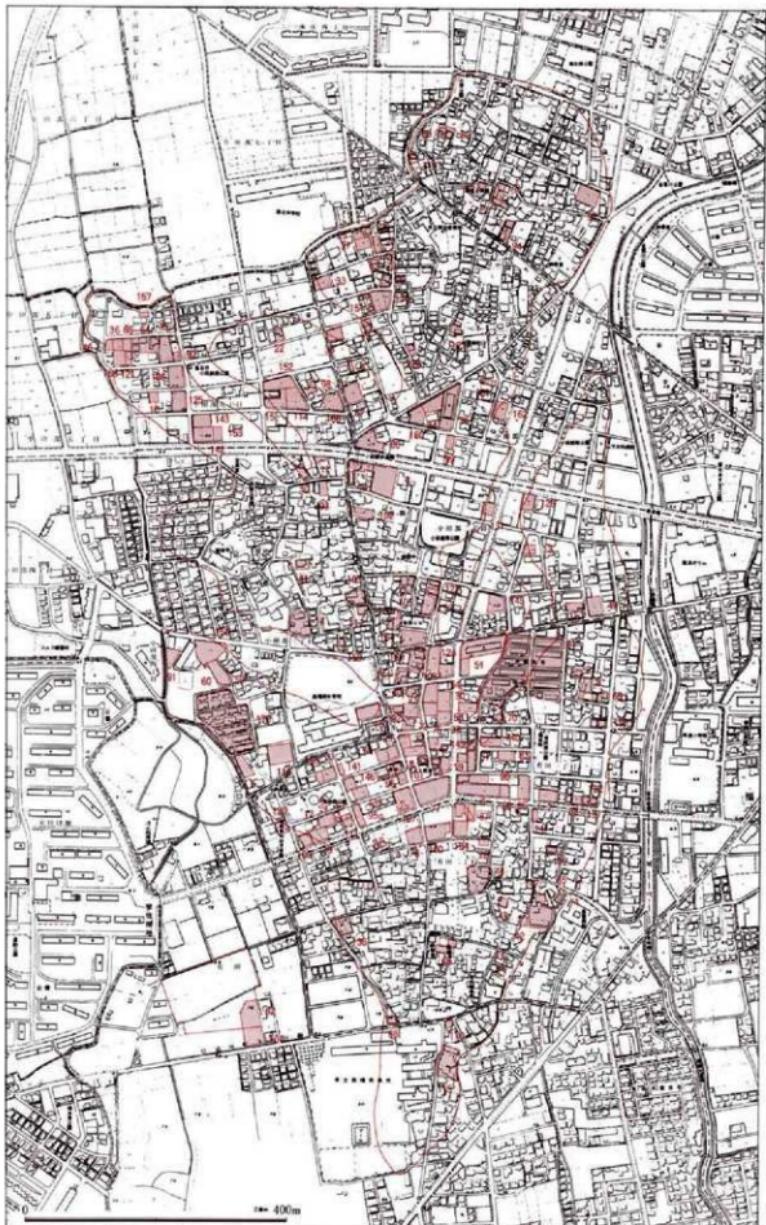


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (縮尺1/7,500) 参数字は調査次数を表わす。



有田・小田郡周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

第2章 有田・小田部の歴史

(1) 立地・歴史的環境

有田・小田部の立地環境及び、歴史的環境については、既刊の報告書の中で詳細に述べられているので、これらの報告書を参照されたい。ここでは、発掘調査に関する有田・小田部地区の歴史的事項を「筑前国續風土記拾遺」「早良郡志」の文献より転記した。

(2) 文献資料

「筑前國續風土記拾遺」

小田部村
和名村に此郷に田部郷あり。此村は其名をもへし。日本紀應和天

皇二十一年(西暦650年)田部を置れしよと見えたり。

古事記傳の記載によれば、大鶴道は鶴村の南より走

江原村に入り、左に往來を行ひ、北に通じて松浦の通なり。右の小路を

東に西に行はる。此村の松浦道下りて松川を渡り、櫛原の南を經

て山門村に至る。是が正比の往來也。奈良公後醍醐天皇の時

此道を經過し、故に今に大鶴道といふ。

由来未詳。

○天保宮御殿小田部氏の守護として祭りし社といふ。其祠にから細
社有。トに見えたる小田部氏の里城址なり。

西園寺

村内に在。境内といふ。櫛原燒れり。廢宅なりと見ゆ。小田部
氏が里城なるべし。其邊に小田部氏墓といふもあり。坂上に初石一
重を築り。緒子はない。緒を患ふる者祈願すれば必應ありと云ふ。

又村南に櫛原といふ所あり。櫛原要略に小田部城といふ見えたるは、
是らをさしていふか。

「早良郡志」

村内に在。真宗西母尊行寺不應元也。

教護寺

古事記傳 松浦神社

火火出見森野草甚不齊である。例祭は九月十九日にして、境内

五百二十坪社殿約十三坪餘明治五年十一月三日。村社に定められ

た。氏子六十戸、境内の吉原神社は、明治十一年一月二十日宇大

神廢教から遷したのであって、小田部氏の守護として祭った社と云

つて居る。森社の西方に一反歩許の官田と云ふ所がある。往々本

社の祭田であったと古び傳へ居る。

小田部氏の時、小田部守主不應元也。何處に云ふ者を封すて、舊所を起し切

入佐藤氏の時、小田部守主不應元也。其部少卿也。其子也。不應元也。見

えたり。しかばは此松浦神社と云は、かの隼人佐藤氏を云なるへ。

筑前縣は村の東北田原にあり。また大塚と云ふ。

周四十間計高二間計二尋に餘る。上の段に土手回り。古松一本立

木也。又木の西に山伏塚といふある。又松原の内

に立石三つ有。中の巖石高六尺厚一尺四五寸あり。左右の二

石はや、低共に踏手なし。是も古事記なるべし。其由来傳づ。

有田村

民居一所に在。東に金屑川有。北に流る。金屑川あらわす

小田部氏事 小田部守立石と謂ふ所に、小田部氏の事と云ふのが

ある。一段切石を重ねてあるも銘の見るべきものがない。黒人は甲

坂とも謂つて居る。緒を患ふる者祈願すれば必應ありとて參詣者が多

い。

村南に在。彦特也。所祭生依頼命。神功皇后。應神天皇也といへり。

寶鏡宮

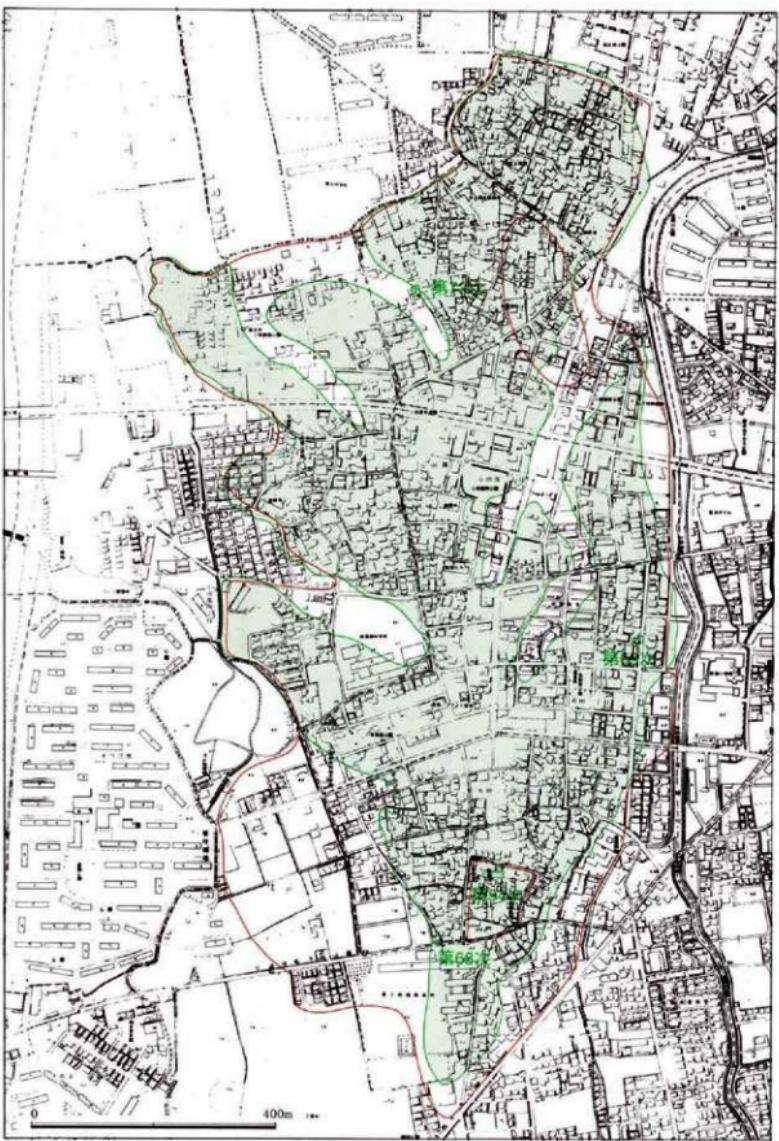


Fig. 3 調査地点位置図 (縮尺1/8,000)

第3章 第54次調査 (調査番号8116)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は福岡市早良区有田2丁目16-1に所在し、発掘調査面積は233m²である。調査期間は昭和56年7月22日～7月29日までである。

今回の発掘調査地点は旧有田村の中心地域に位置し、戦国時代において荒平城主として歴史上に登場する小田部氏に関係が深い西応寺の境内にあたる。この地域の有田・小田部の台地は南側に向かって尖った形状を示し、かつ台地の両側に北側から小さな開析谷が入り込むことで、幅160mのくびれ部を形成している。

西応寺は台地の南側の尖った地形の中心に位置し、標高13.4mを示す宝満宮の北側後背地にある。この地域は、戦国時代に存在したと云われる小田辺城の推定地でもある。この城は「早良郡志」によれば小田部氏の里城と云い伝えられている。有田地域には現在も「常丸」・「堀ノ内」・「馬場」などの旧地名が通称として残り、台地縁辺部には「ホカヤネ」・「鬼丸ホケ」などの濠跡があったと云われる。又、現在も数ヶ所の土壙の跡が確認できる。昭和16年の地図によれば当該地の東側には南北方向の長さ約55mの土壙が存在していることが示されている。現在は削平を受けている。

西応寺は荒平山と号し、浄土真宗西本願寺派であるが、開基の恵正は天正7年に落城した荒平城主小田部鎮元（俊之）紹叱の家臣小林氏の末裔と伝えられている。境内には丸石を用いた石組井戸が1基残っており、第44次調査で検出した中世末の井戸構造に合致している。

(2) 概要

発掘調査は車裏の建替えに伴うものである。残土処理の関係から、2区に分けて調査を行った。又、II区では排水管等の地下構造物が存在したため、調査は困難を極めた。I区では江戸時代の溝1条、II区では縄文・弥生時代の溝2条、中世末の溝1条及び、柱穴群を検出した。



西応寺境内の古井戸（北から）



井戸内の状態

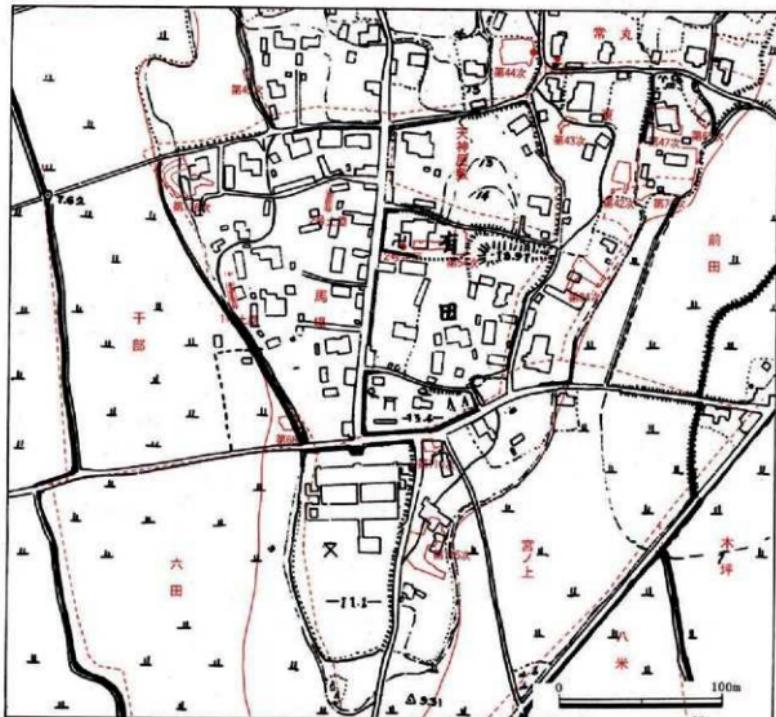


Fig. 4 調査地点及び石組井戸・土壌配置図（縮尺1/3,000）

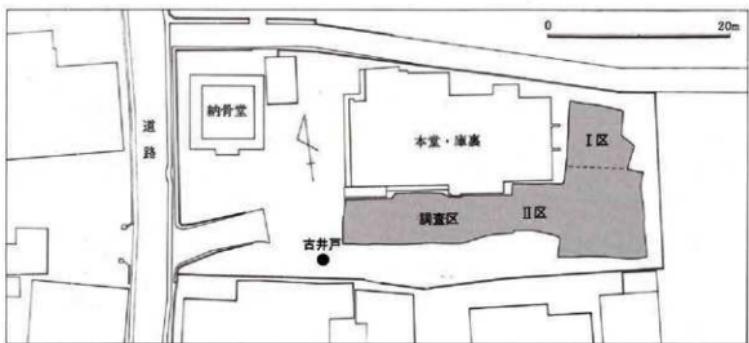


Fig. 5 第54次調査地点位置図（縮尺1/500）

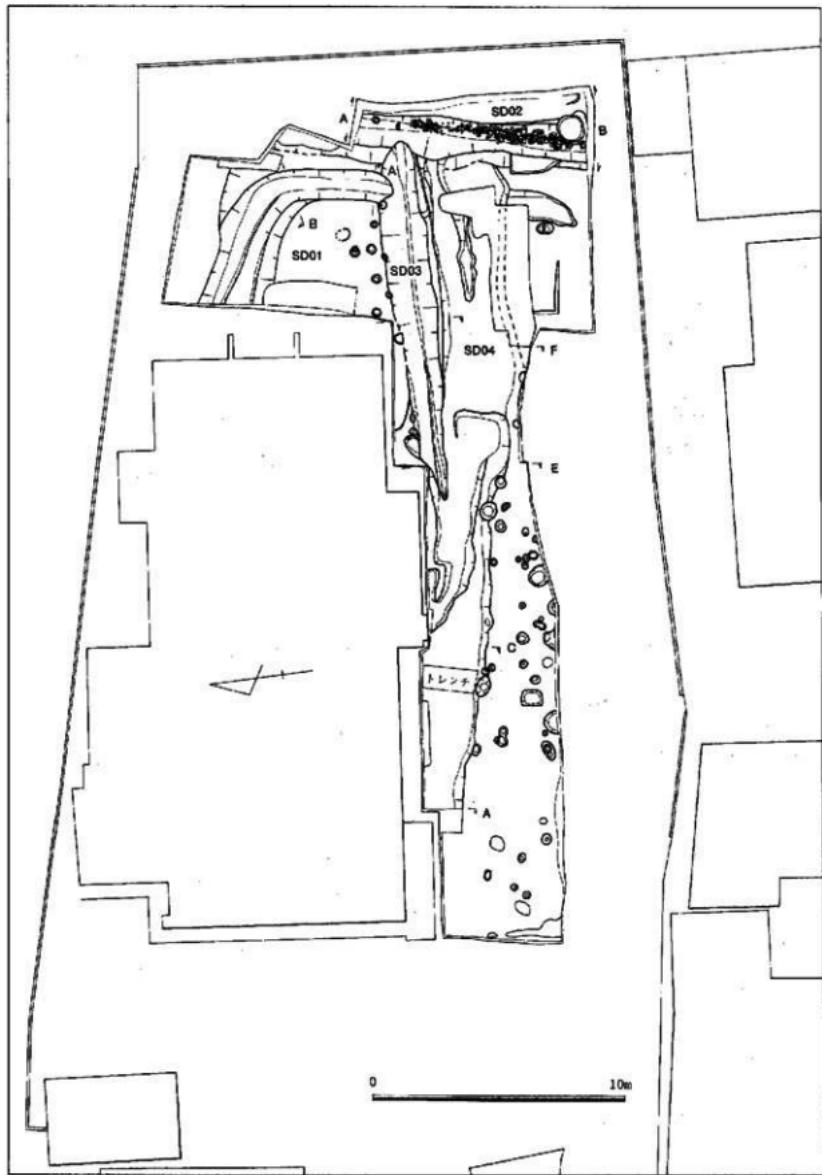


Fig. 6 第54次調査追得配置図 (縮尺1/200)

2. 遺構説明

(1) 溝 (SD)

調査区のI区・II区において南北方向の溝を2条、東北から東西方方向に曲がる溝1条、南北方向の溝1条を検出した。溝SD03・04は台地を横断する形で存在する。溝SD01・02は排水的な役目をもつたものと考えられる。

Tab. 1 第54次調査遺構一覧表

(単位: cm)

遺構名	印字 標名	遺構 種類	形 状	長 さ	幅 さ	厚 さ	出 土 遺 物	場 所	備 考
SD01	M 1	溝	複雑形 平底形	980 ⁺ *	104~194	最大43	灰白土器破片、瓦、赤土器破片、壺、甕、土器部、須恵器、瓦質土器部、 中腹部青釉陶、中腹部青瓷、中國陶器、粗底青磁瓶、帶び、中国白磁、伊 万里燒等瓦片等、骨角、小分け片、粗底陶器部、平瓦、瓦片 (瓦水道管)、 鐵鋤、鐵斧、石臼、黑曜石	近鉢16C	北西から東方角 (中 央部で屈曲)
SD02	M 2	溝	V字形	950 ⁺ *	180	166	灰白土器破片、瓦、甕、赤土器破片、壺、甕、土器部、須恵器、瓦質土器部、 中腹部青釉陶、中腹部青瓷、中國陶器、粗底青磁瓶、壺、大甕、粗底 陶器部等、鐵鋤、鐵斧、瓦、瓦片等瓦片等、丸瓦、铁錠、铁錠刀子、铁件、鐵石、石錐、 石斧、石錐、凹み付、鐵錠、石錐、石錐、石錐、黑曜石	中鉢16C	南北方向 上部を古代の難品で 埋められる
SD03	M 3	溝	V字形	1440 ⁺ *	北鉢200	最大100	灰白土器破片、丹化り鉢、竹籠型土器、灰白土器体、竹籠型土器、壺、土器部、 須恵器、瓦、瓦片等瓦片等、石錐、打製石錐、黑曜石、サヌカイト	同じ時代 中期第一期 後生代	東西方向 SD02・SD04に接 する
SD04	M 4	溝	複雑形	2550 ⁺ *	北鉢350	最大90	灰白土器破片、甕、壺、赤土器破片、瓦片、瓦、甕、瓦、瓦片、瓦、瓦片、 鐵錠、鐵錠片、石錐、石錐、石錐等、叩き石?、磨石、形器、円盤形石器品	鉢16C代 前用	東西方向 西側に行くに従い濃 くなる SD03を切る



I区 全景 (南から)



II区 東側調査区全景（西から）



II区 西側調査区全景（東から）

SD 01 (Fig. 7) 調査区の東側境界に位置しており、長さ9.8mまでを確認するにとどまった。大略南北方向から東西方向に流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は逆梯形、又はU字形を呈し、溝上面の幅は194cm、底面の幅は70cm、深さ43cmを測る。覆土は暗茶灰色粘質土、又は八女粘土を含んだ暗茶褐色粘質土を主体としている。覆土から伊万里焼の碗等が出土しており、18C前半代の遺構と考えられる。

SD 02 (Fig. 8) 上部は削平を受けている。調査区の東側境界地に位置しているため9.5mまでの長さを確認するにとどまった。大略南北方向の溝で、断面形はV字形を呈している。溝の上面の幅は180cm以上、深さは166cmを測る。覆土は暗い茶褐色粘質土、又は八女粘土を含んだ暗褐色粘質土を主体としている。溝の中位の高さ90cmのところに礫群が水平堆積して存在する。この礫群内の遺物は唐津焼等の近世の遺物を含んでいる。礫群より下層から出土した土師器は中世的様相をもっていることから、溝の廃絶と再利用にかかる状況を示すものと考えられる。中世後半期の遺構と考えられる。

SD 03 (Fig. 9) 調査II区の北側境界に位置しており、溝SD 04に切られる。削平が著しく、14.4mまでの長さを確認するにとどまった。大略東西方向の溝で、断面形はV字形を呈している。溝の上面の幅は200cm、深さは100cmを測る。覆土は黒色粘質土、又は褐色土を含んだ黒褐色粘質土を主体としている。覆土から突帝文土器等が出土しており、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

SD 04 (Fig. 10) 調査II区に位置しているが、他の溝との切り合いが著しいことや上部の削平により、約26mまでの長さを確認するにとどまった。溝SD 03を切っている。大略東西方向の溝で、断面形は逆梯形を呈している。溝の上面の幅は350cm、底面の幅は270cm、深さ60cmを測る。覆土は黒色粘質土、又は八女粘土を含んだ黒褐色粘質土を主体としている。覆土から縄文土器、弥生土器が出土しており、弥生時代前期の遺構と考えられる。

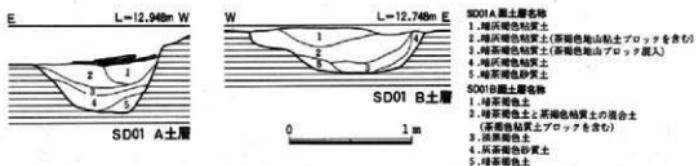
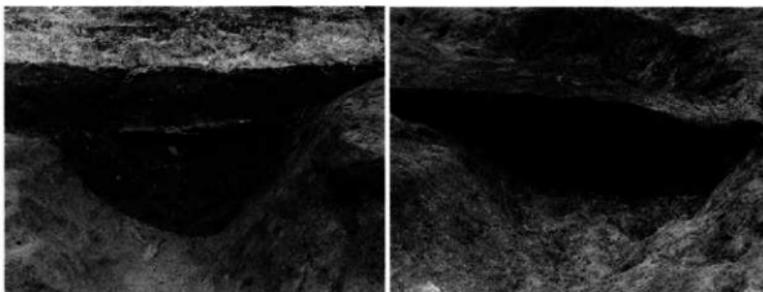


Fig. 7 溝 SD 01実測図 (縮尺1/40)



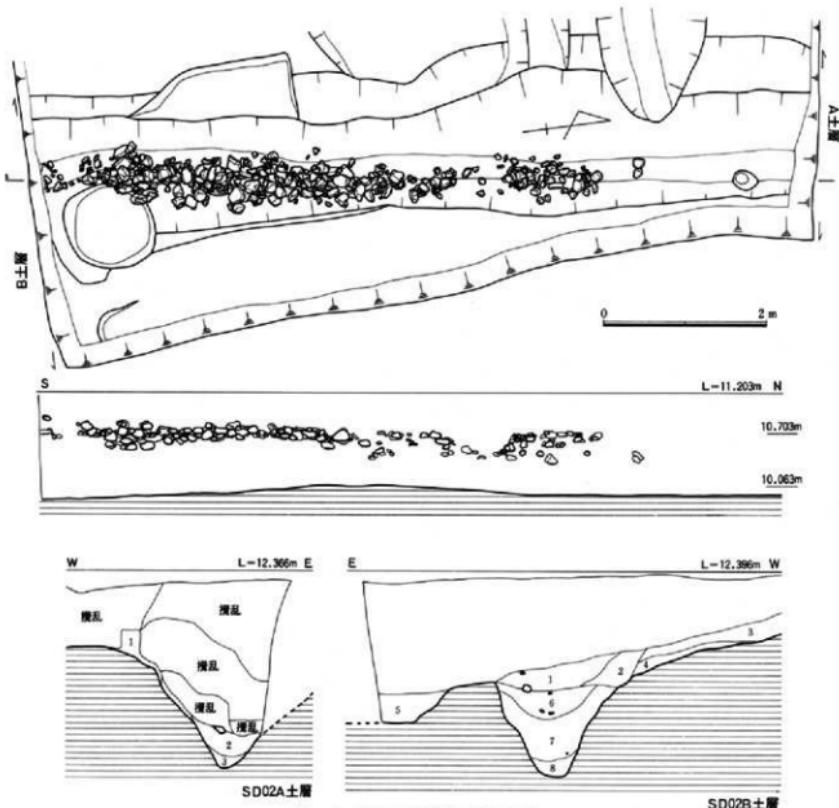


Fig. 8 溝 SD 02実測図 (縮尺1/60)

溝SD02A土層名稱

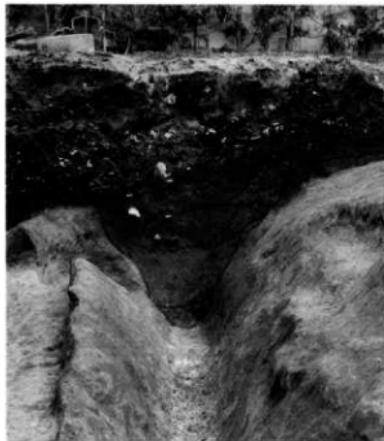
1. ぬみがかった兩褐色土(やや粘質、軟)
2. 両色土(繋まりなく、難い)
3. 2に両色粘質土を含む(固く繋まる)

溝SD02B土層名稱

1. 斑剥兩褐色土(斑剥色土ブロック混入。)
2. 両色土(斑剥色地山土の混合土)
3. 1と同七
4. 両褐色土(斑剥色地山土混入)
5. 両色土(両褐色地山土混入)
6. 増褐色土(粘質、繋まりなく、やわらかい)
7. 両色土(やや粘質、繋まりがない)
8. 灰褐色粘質土(両色土混入)

溝 SD 02 漏群内の板磚出土状態





溝 SD02南壁土層状態（北から）



溝 SD02北壁土層状態（南から）



溝 SD02遺群出土状態（北から）



溝 SD02完掘状態（北から）



溝 SD03・04 (東から)

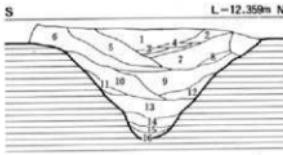


上 溝 SD03 (東から)



右 溝 SD03土層断面の状態 (東から)

- 溝SD03土層名称
1. 黒褐色粘質土にローム粒子多く混入
 2. 黒褐色粘質土とローム土の混合土
 3. 黒褐色粘質土にロームブロック少量化入
 4. 茶褐色粘質土にロームブロック少量化入
 5. 茶褐色粘質土にローム粒子少量化入
 6. 茶褐色粘質土にローム粒子多く混入
 7. 茶褐色粘質土にローム粒子多く混入
 8. 固色粘質土
 9. 茶褐色粘質土にローム粒子少し混入
 10. 固色粘質土に黒褐色粘質土混入
 11. 黑褐色粘質土
 12. 茶褐色粘質土に黒褐色粘質土混入
 13. 黑褐色ロームに黒褐色粘質土混入
 14. 茶褐色粘質土にローム粒子多く混入
 15. 12とは同じ
 16. 茶褐色粘質土



0 1 m

Fig. 9 溝 SD 03実測図 (縮尺1/40)

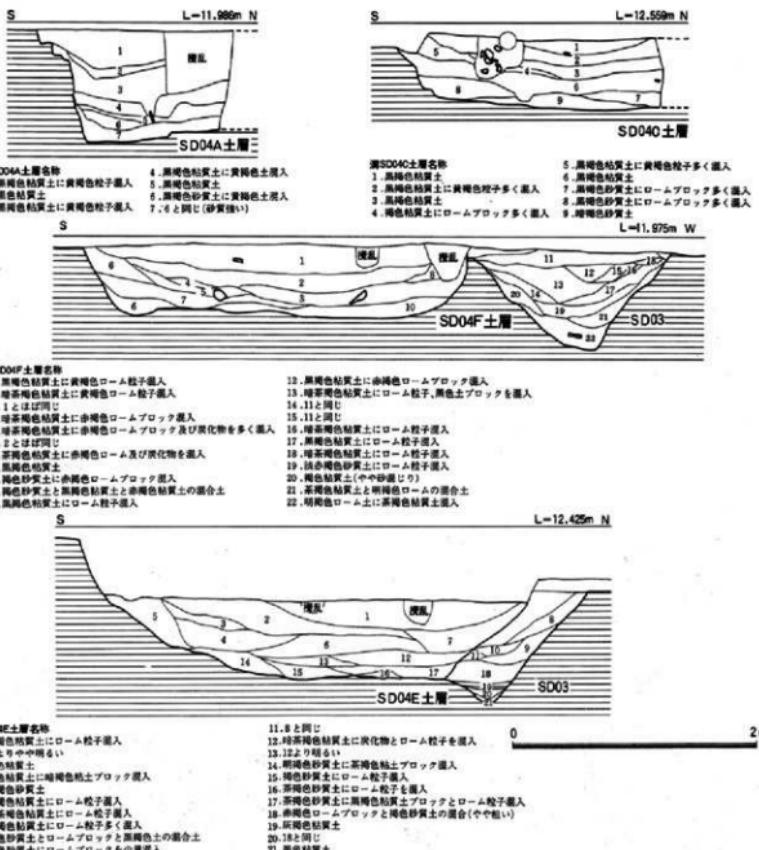


Fig. 10 溝 SD 04 実測図 (縮尺1/40)



(2) 小穴 (SP)

いずれも柱穴と考えられるが、建物を把握することはできなかった。柱穴の大きさは、径30~40cmの間である。遺構の覆土は黒褐色粘質土から茶褐色粘質土まである。

3. 遺物説明

(1) 溝出土遺物 (Fig. 11~23)

SD 01出土遺物 (1~14) 近世遺物を主体としている。1~3は突帯文土器、4・5は弥生土器、7は須恵器である。8・11は伊万里焼で、8の内底と外底にはコンニャク版がある。11は仮板器であろうか。10は香炉と考えられる。9は龍泉窯系の青磁碗で、内底に花文をヘラ彫りしている。6は瓦質土器の摺鉢、14は石臼の上臼であるが、破損が著しい。復原径17.6cmを測る。凝灰岩製である。側面孔の菱形飾りを欠いている。12は鉄製釘、13は「寛永通寶」である。

SD 02出土遺物 (16~60) 遺物は大きく2群に分けられる。すなわち、溝の中位に分布した疊群内出土遺物及び、疊群よりも上層から出土した遺物の一群と、疊群より下層から出土した遺物の一群である。後者は溝の掘削から廃絶までの段階に関わりをもち、前者の疊層出土遺物は溝廃絶後の切通し道として再利用していた時期を示している。

34~38は疊群中の出土である。他は疊群より下層から出土。疊群より下層から出土した遺物は中世後半期の遺物を主体にしている。24~33は糸切り底の土師器壺で、体部は大きく開き、体部と底部の口径比が大きい。皿の出土はない。これらは、溝中位に検出した疊群より下層から出土したものである。38~43・45~47は瓦質土器である。39・40は湯釜で、いずれも、肩部に家紋状のスタンプをもつ。39は釘抜文、40は梅花文である。41~43は脚付の鍋、45・46は摺鉢、47は鍋である。44・48・49は土師質土器で、44は摺鉢、48は鍋、49は捏鉢である。50・51は鉄製品で、50は口縁部内側に段をもつ鉄鍋、51は鉄製庖丁片であろう。34・36は唐津焼で、34は内面が灰緑色釉の碗、36は摺鉢である。37は中国製の陶器壺である。

その他には、16~21は縄文晚期土器で、16・18・19は鉢、17は浅鉢、20・21は蓋である。22・23は古墳時代の土師器で、22は脚付鉢、23は高杯の脚である。

石器では、52が磨製石斧、53が石錐である。これらは突帯文土器に伴うものと考えられる。54~56・58は砥石、57は凹み石、59は一石五輪塔の破片で、一部を砥石として利用している。60は板碑の頭部で、同様に一部を砥石として利用している。

SD 03出土遺物 (61~83) いずれも縄文晚期土器で、61~72・76~81は甕、73は浅鉢、74・82は壺形土器である。75は小型の鉢で、口縁部の外側をつまみ出し、端部を水平にナデ調整する。内外面はナデ調整で、黄褐色を呈する。77の外底には木の葉の圧痕があり、78・81の外底は削り調整を行っている。83は磨製石鎌片で、両刃である。

SD 04出土遺物 (85~208) 縄文晚期土器、弥生土器が混在して出土しているが、弥生土器は板付I式土器を主体としている。

第1層の出土遺物は、85~88・91~99が縄文晚期土器である。88は浅鉢、85~87、91~97は甕、98は鉢である。98の穿孔は焼成後に施す。89・90・100~108は弥生土器で、90・104~106・108は壺形土器である。90の外面は肥厚させ、段をもっている。他は甕形土器である。

第2層の出土遺物では109~112・117・119~126・128・130が縄文晚期土器、他は弥生土器である。

109・110は壺、111は浅鉢、117は壺で内外面はヘラミガキを施す。121・123・124は鉢、112は黒色研磨の壺である。119・120・122・125・126・128・130は壺の底部である。板付 I 式土器の内、116・118・127・129・137・138は壺形土器で、116・127は小型壺で、外面はナデ調整。底部は円盤貼付である。

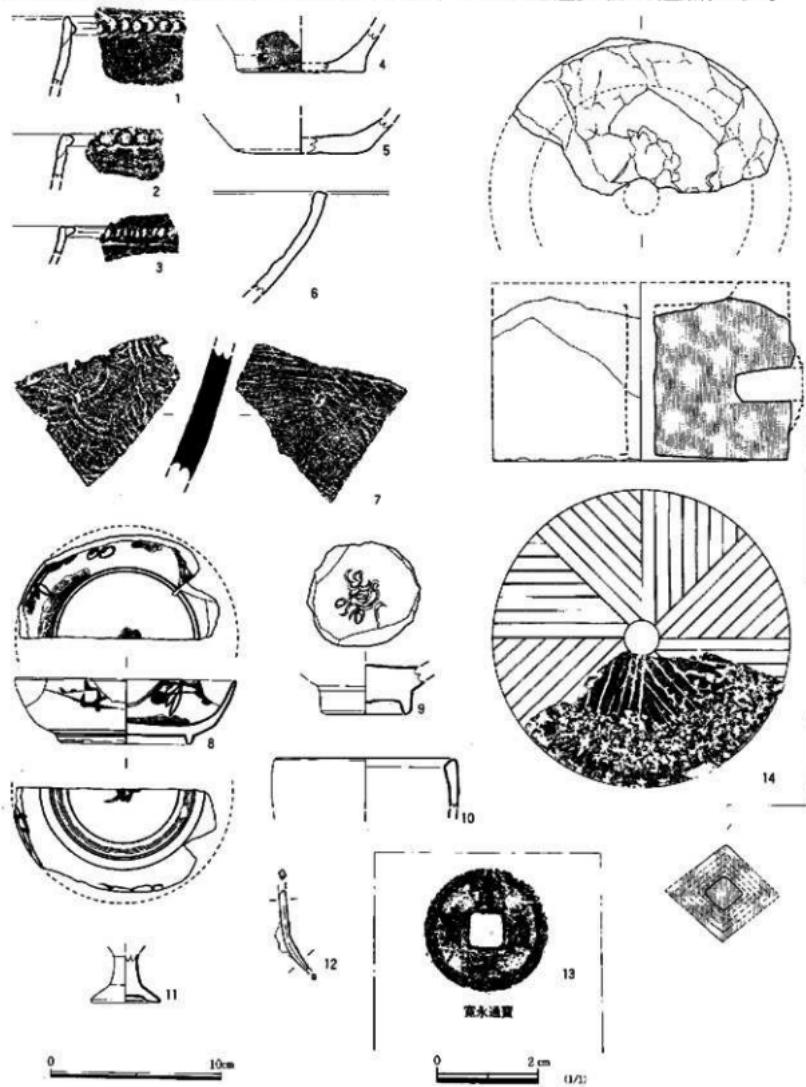


Fig. 11 濱 SD 01出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)

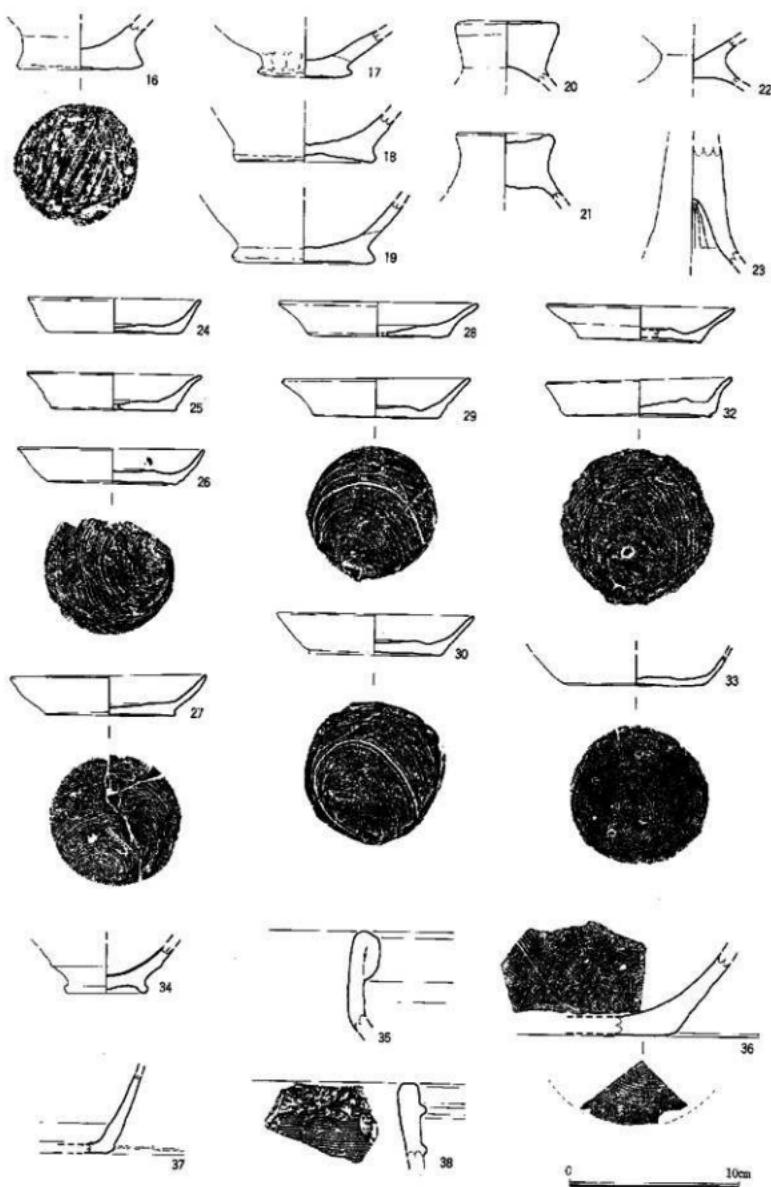


Fig. 12 洪 SD 02出土遺物実測図① (縮尺1/3)

113～115・131～136は壺形土器で、口縁部に刻目を有している。132の外底部に圧痕がある。139は蓋形土器、140・141は高环の胸片である。142は丸底の鉢で、わずかに小さな底部を形成している。形状より弥生時代終末の土器と考えられる。

第3層の出土遺物も第2層と同様に縄文晩期土器が混入している。又、わずかではあるが新しい時期の土器がある。143・144・148～152は縄文晩期土器で、いずれも壺である。145～147・153～172は弥生土器で、145～147、153～160は壺である。160は後期に属する壺である。147の口縁部には刻みがなく、頸部内面を肥厚させているところから、時期的に下るものである。161～168は壺で、166～168は外面にヘラ描きの山形文、重弧文を施す。171・172は蓋形土器である。

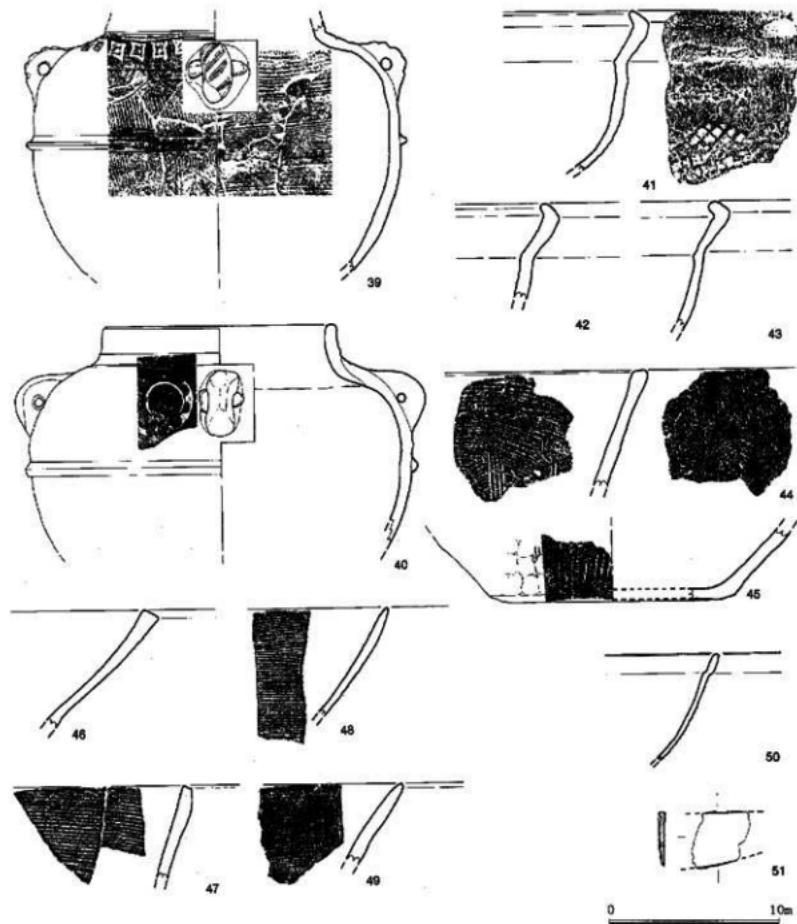


Fig. 13 溝 SD 02出土遺物実測図② (縮尺1/3)

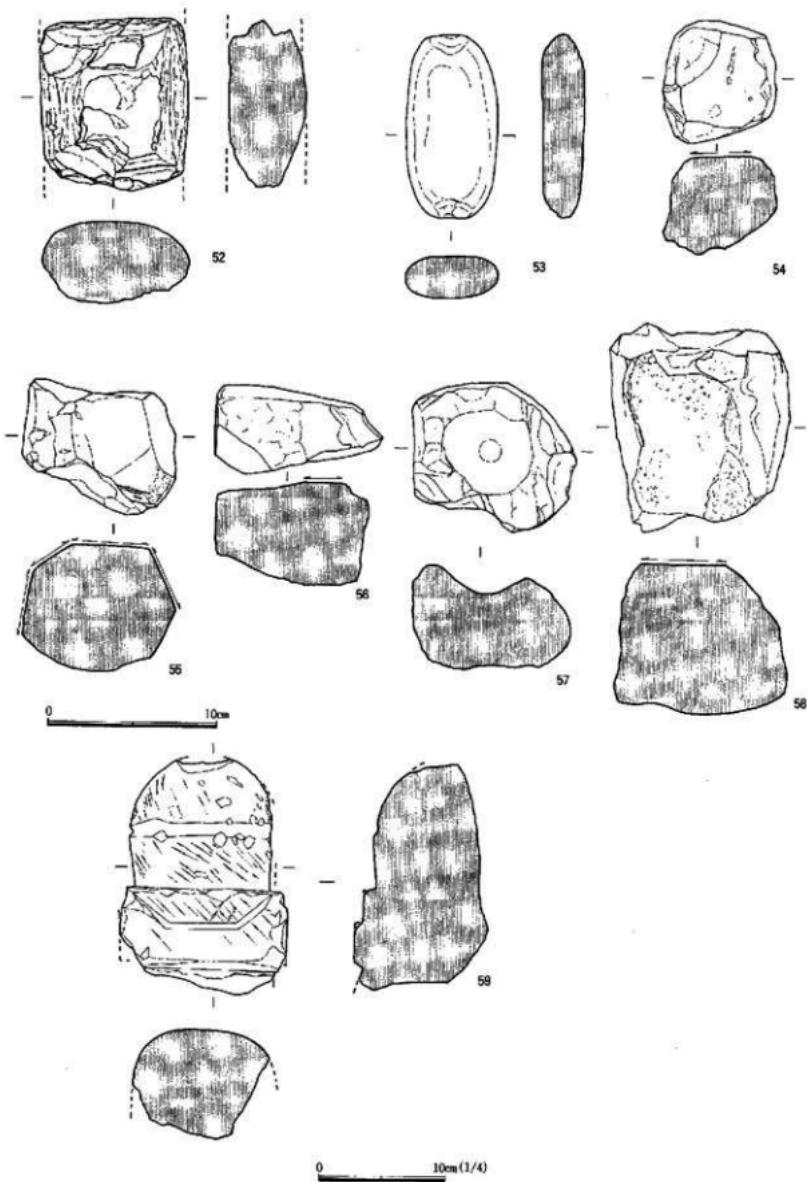
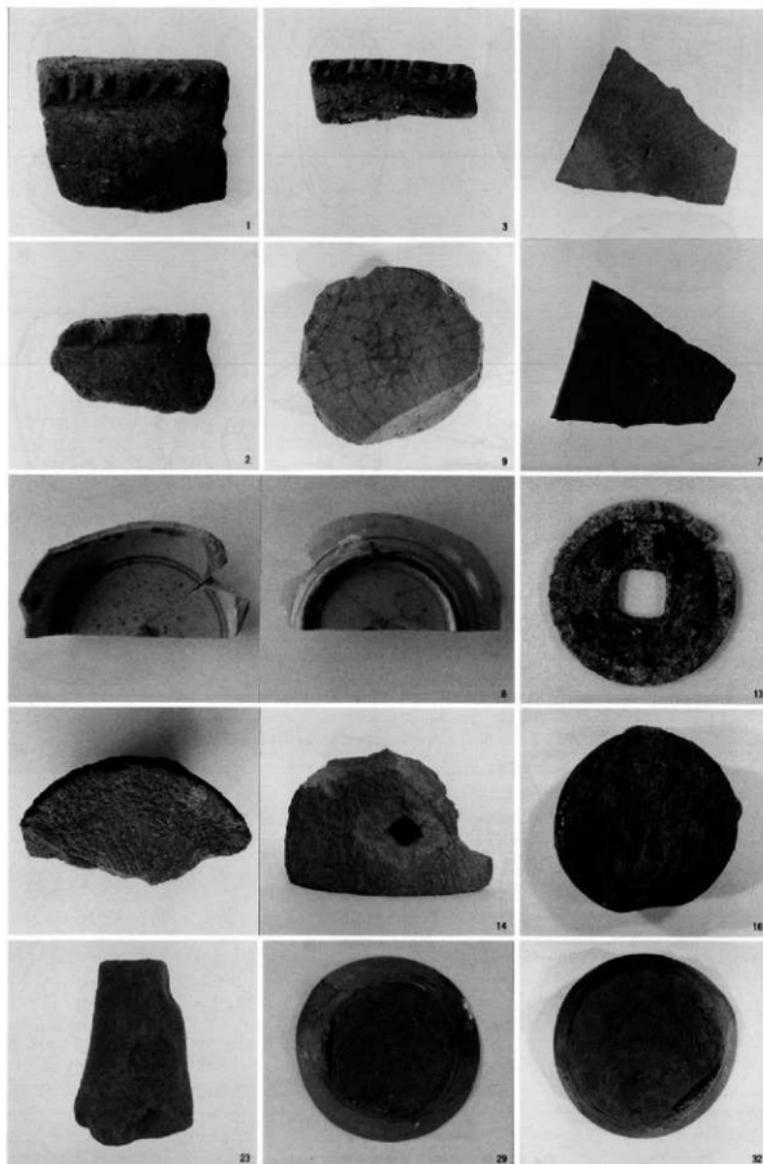
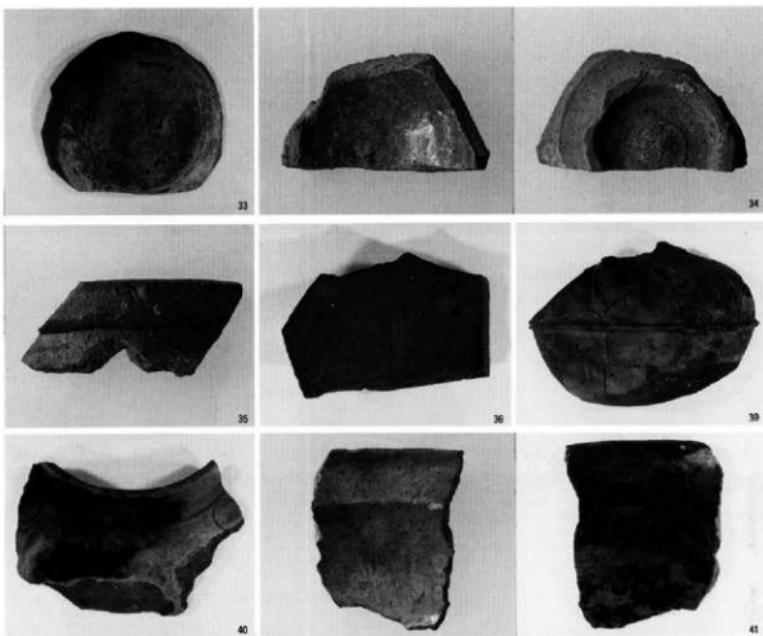


Fig. 14 淮 SD 02出土遺物実測図③ (縮尺1/3・1/4)



溝 SD01・02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する



溝 SD 02出土遺物 ①

※数字は実測図の番号に一致する

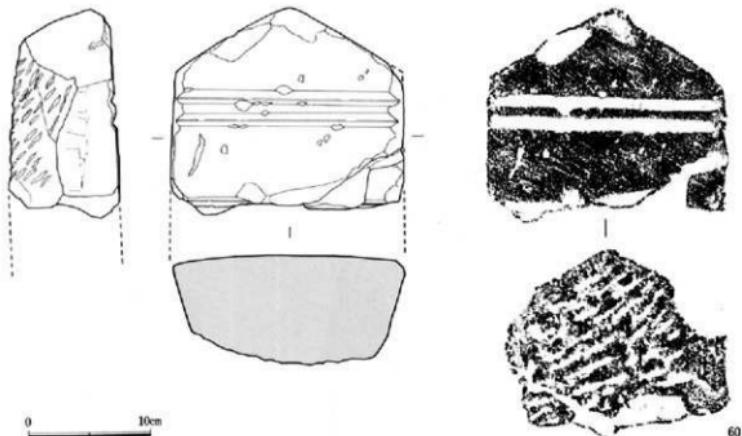
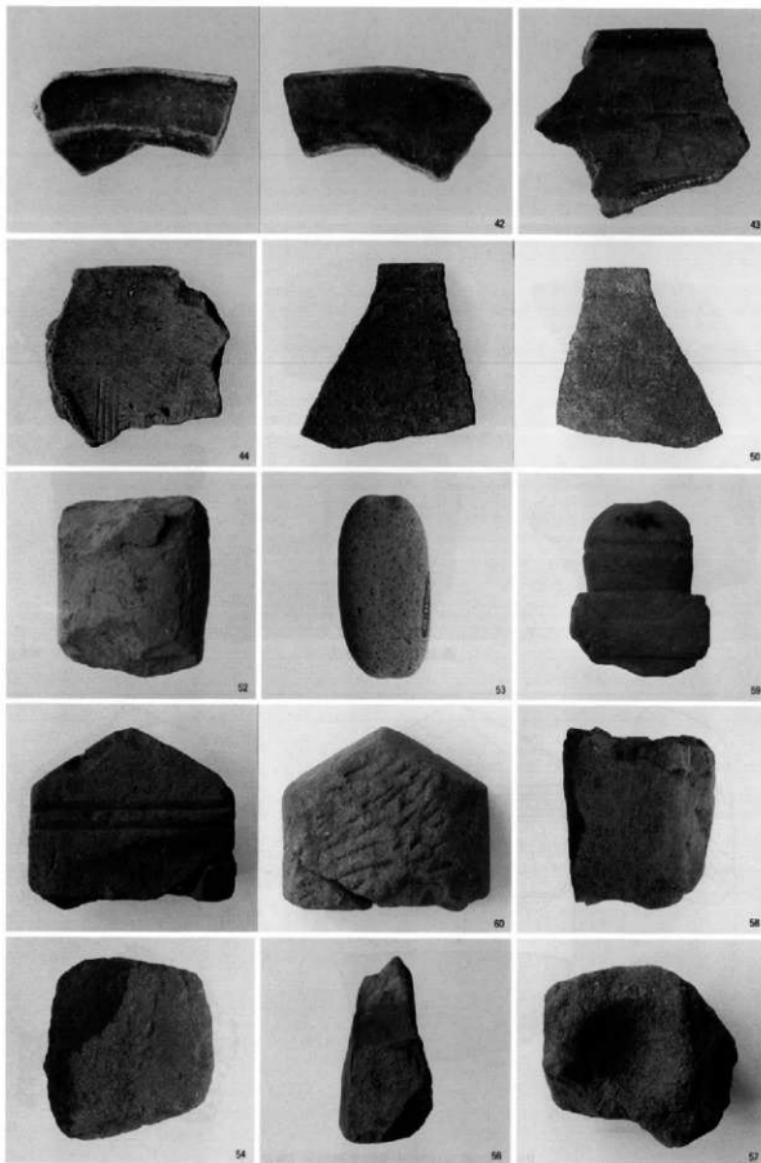


Fig. 15 溝 SD 02出土遺物実測図④ (縮尺1/4)



溝 SD02出土遺物②

*数字は実測図の番号に一致する

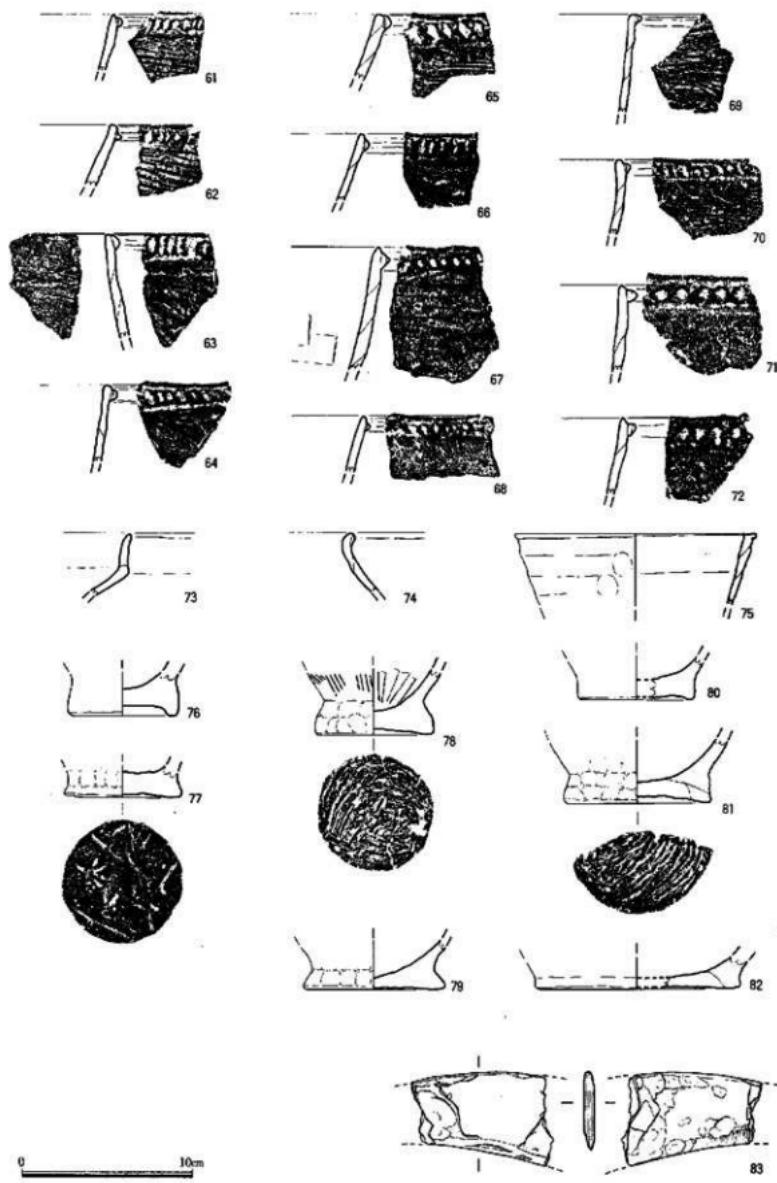


Fig. 16 溪 SD 03出土遗物实测图 (總尺1/3)

第1層

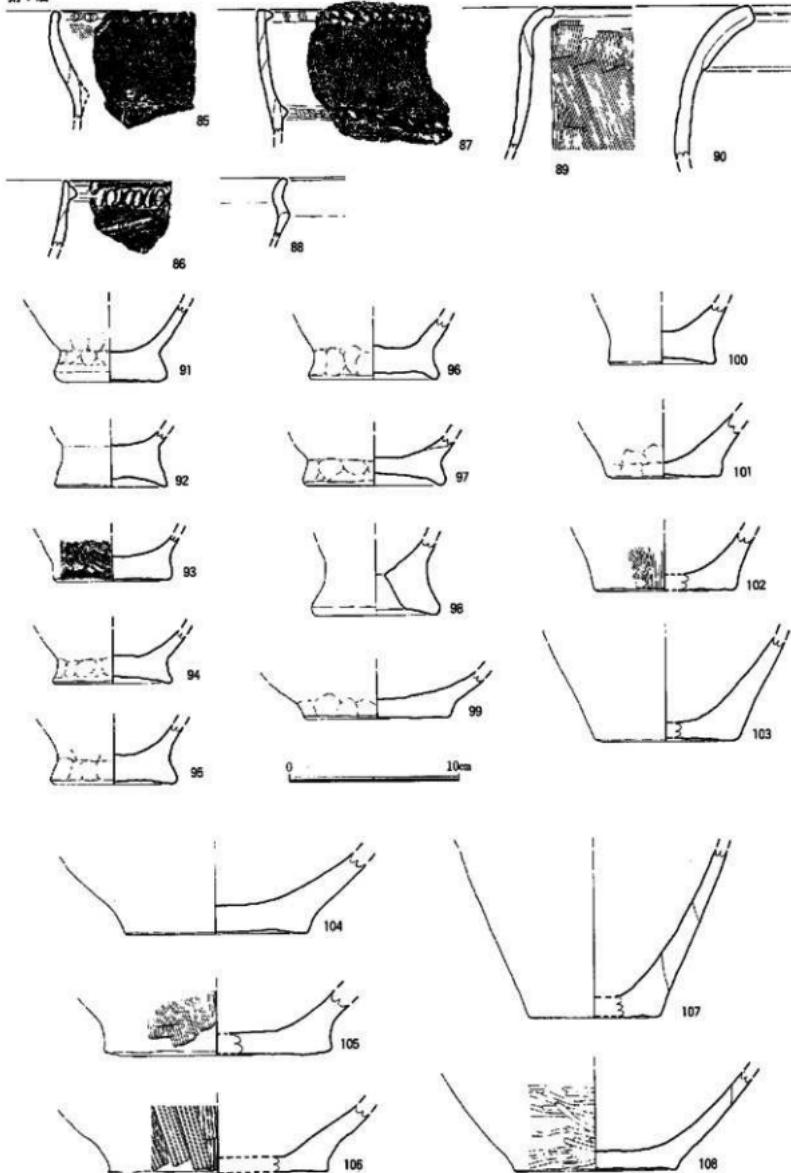


Fig. 17 漢 SD 04出土遺物実測図① (縮尺1/3)

第2層

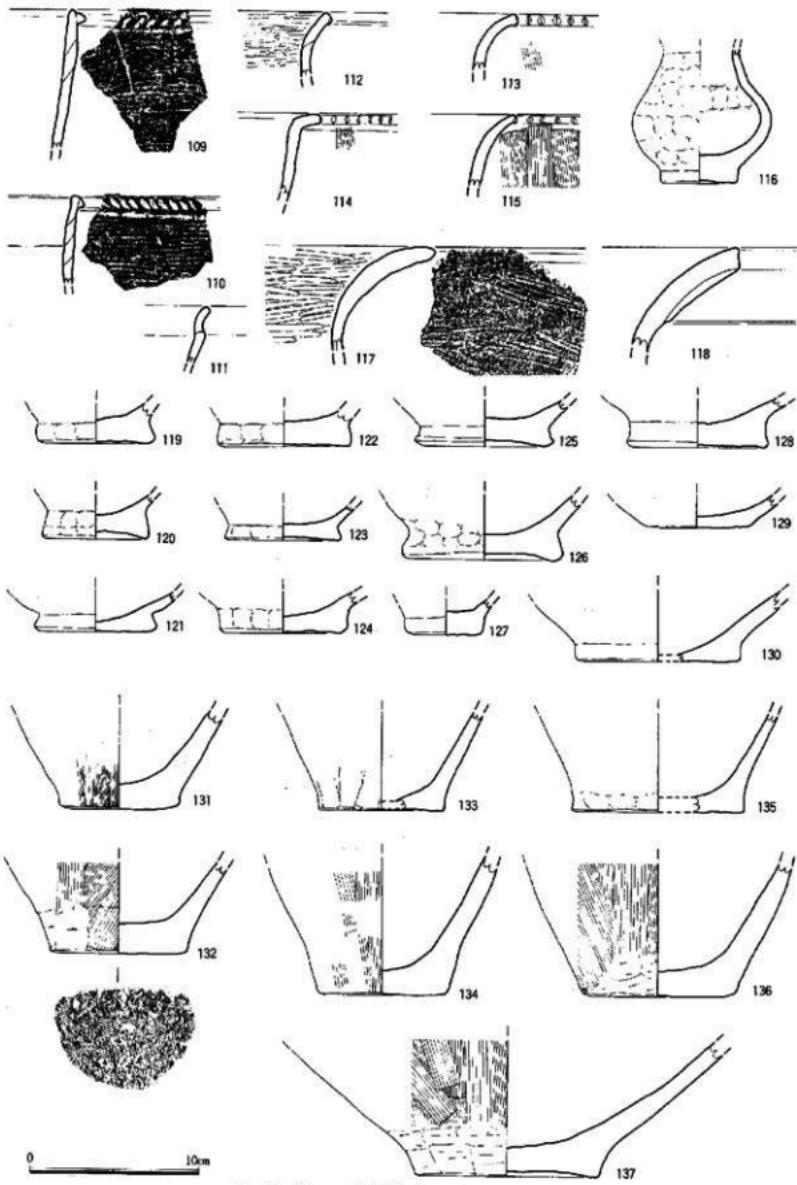
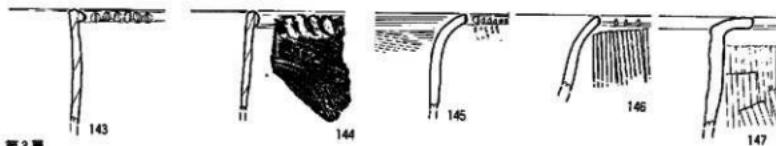
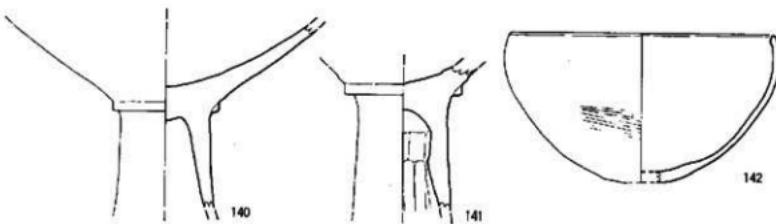
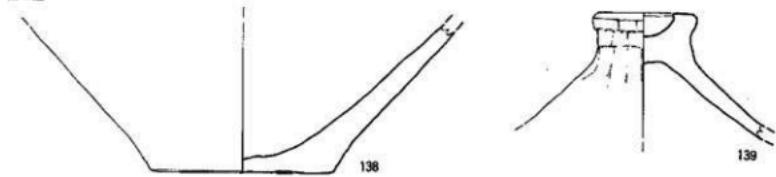
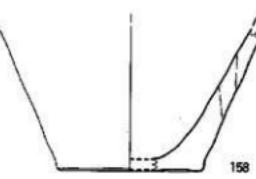
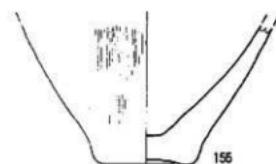
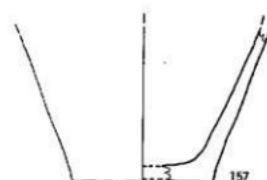
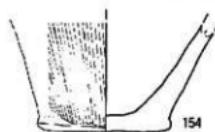
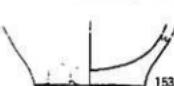
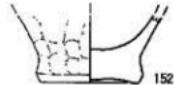
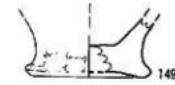
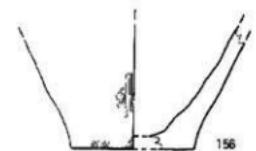
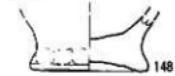


Fig. 18 洪 SD 04出土遺物実測図② (縮尺1/3)

第2層

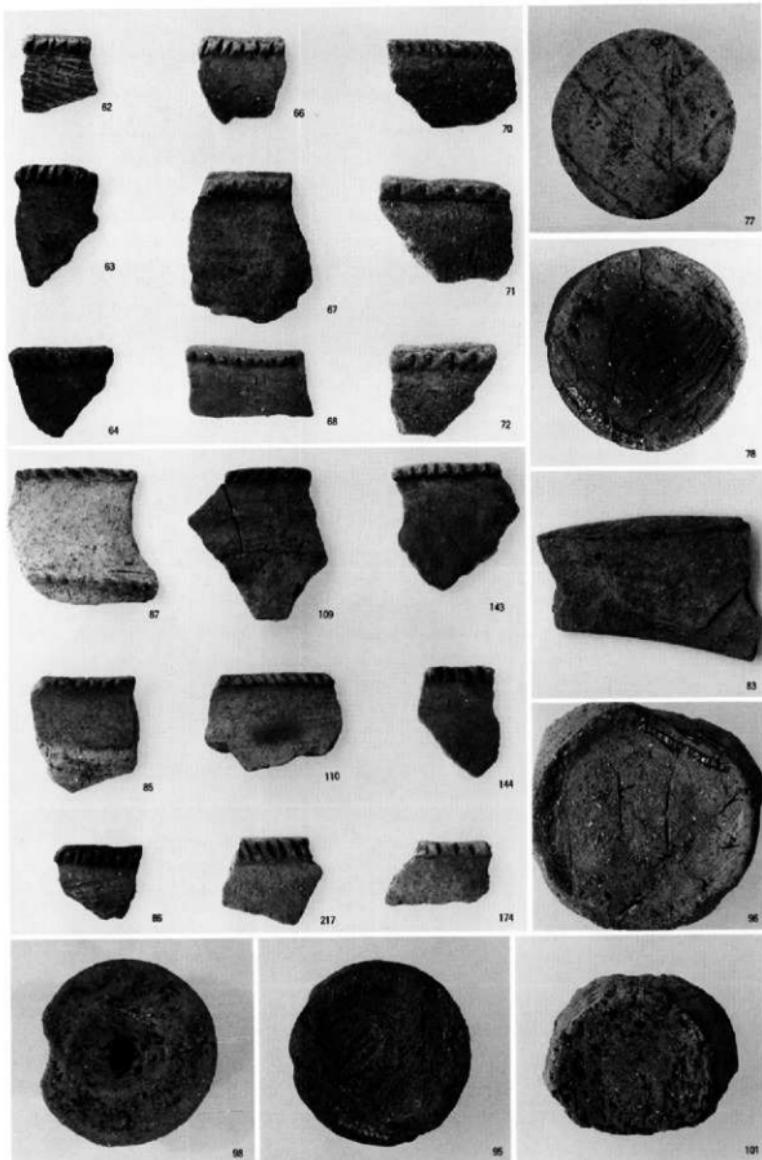


第3層



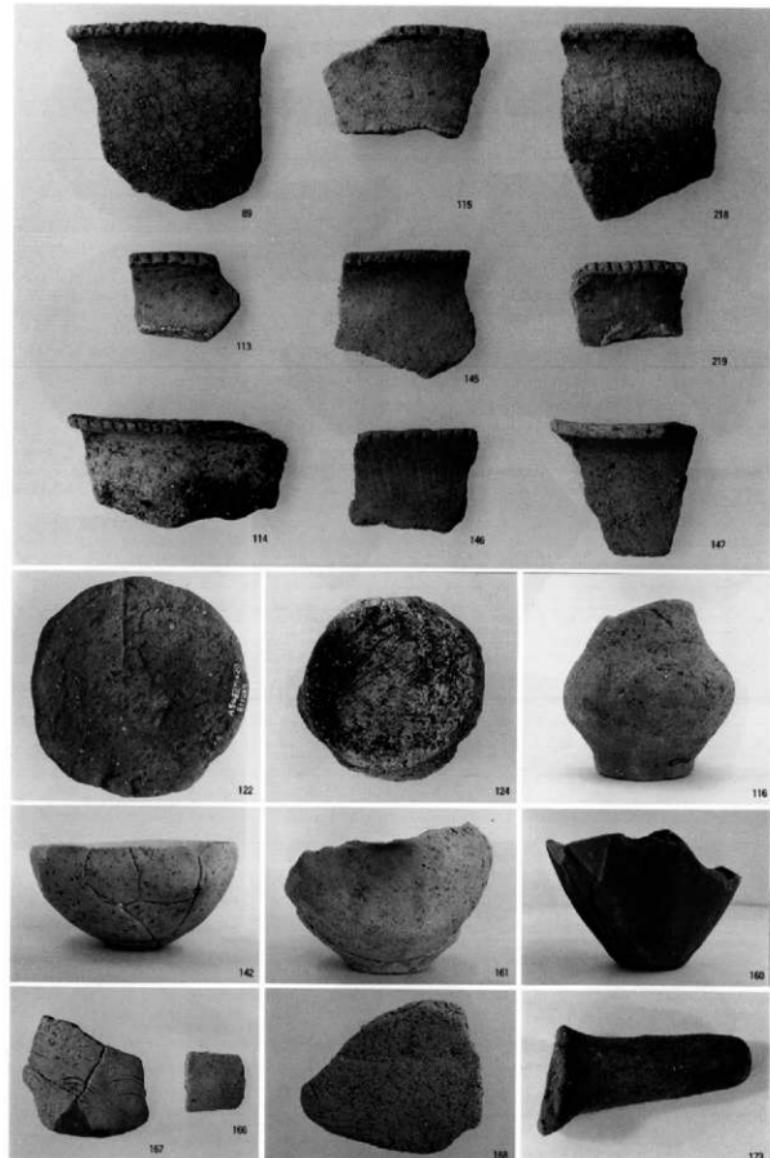
0 10cm

Fig. 19 溝 SD 04出土遺物実測図③ (縮尺1/3)



溝 SD03・04出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する 217はSD04出土



溝 SD04出土遺物①

※数字は実測図の番号に一致する 218・219はSD04出土

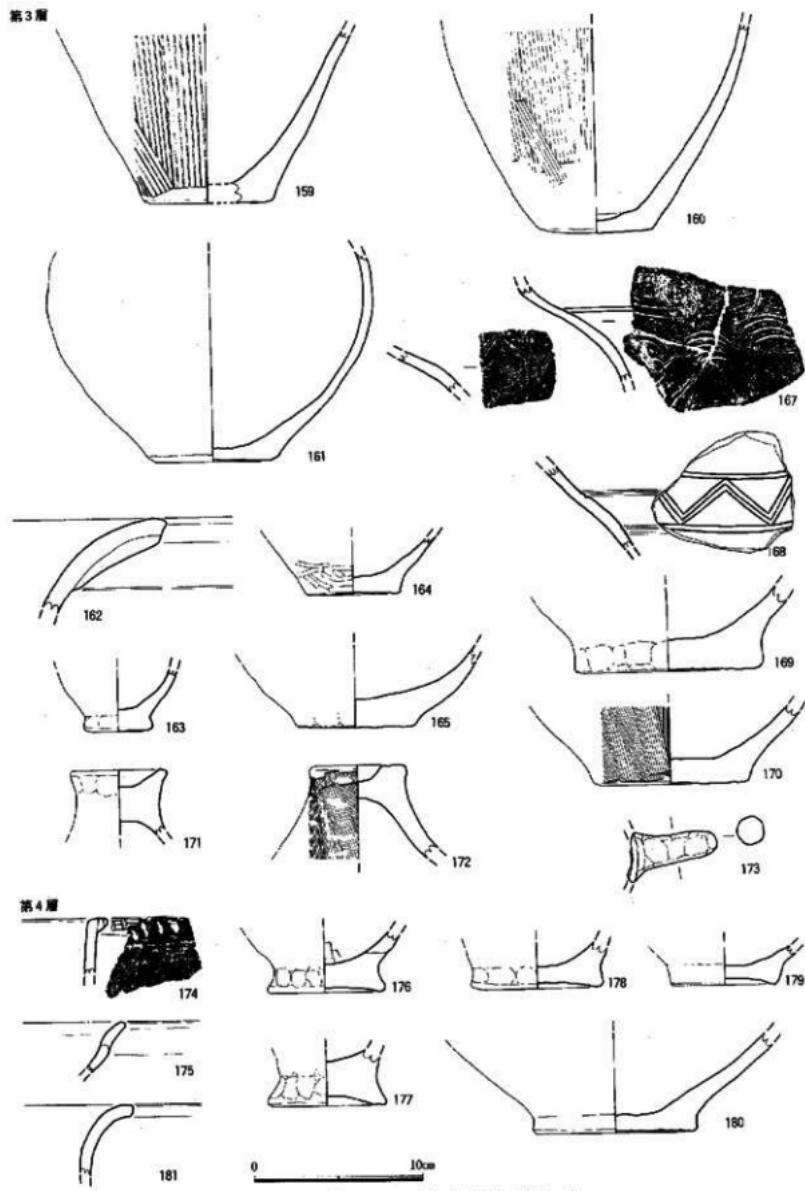
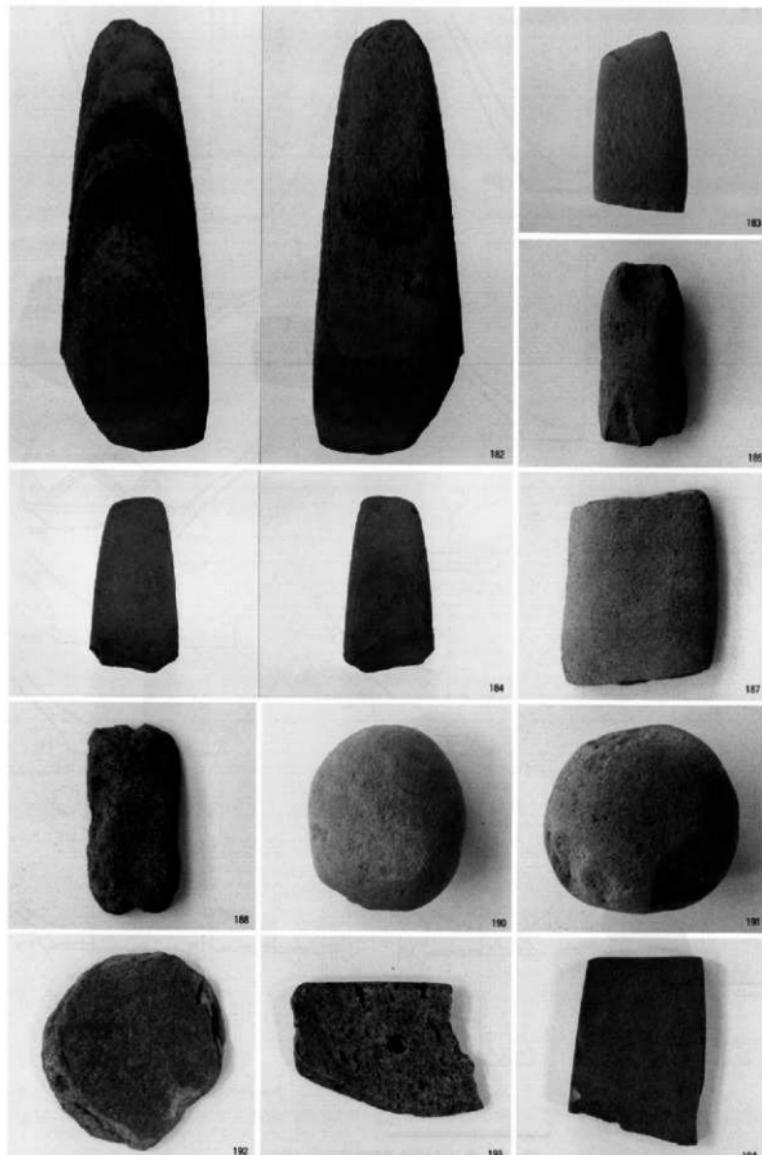


Fig. 20 津 SD 04出土遺物実測図④ (縮尺1/3)



溝 SD04出土遺物②

*数字は実測図の番号に一致する

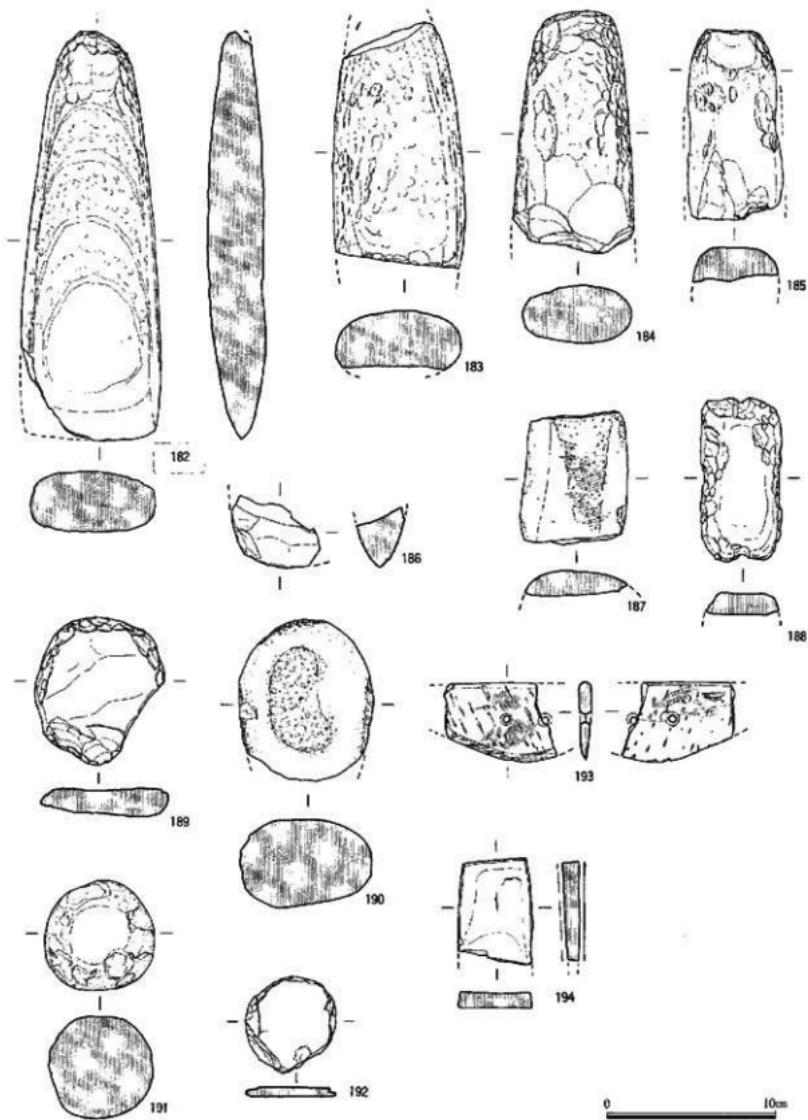


Fig. 21 淄 SD 04出土石製品実測図① (縮尺1/3)

第4層出土遺物は174～179が縄文晩期土器で、175は浅鉢、179は壺、他は甕である。180・181は弥生土器の甕である。

石器は、第1層出土石器が182・185・187・192・194・199・205・208、第2層出土は183・184・186・193・202・204、第3層出土は188・189・191・195・197・200・206・207、第4層出土は190・194・196である。182～187が磨製石斧で、182は大型扁平石斧である。183～187は蛤刃石斧であろう。188・189は石錐、190・191は叩石、或いは転用の磨石である。192は円盤状石製品、193は石庖丁、194～199は砥石、201～208は打製石器で、207・208は未製品である。200はスクレイバーである。

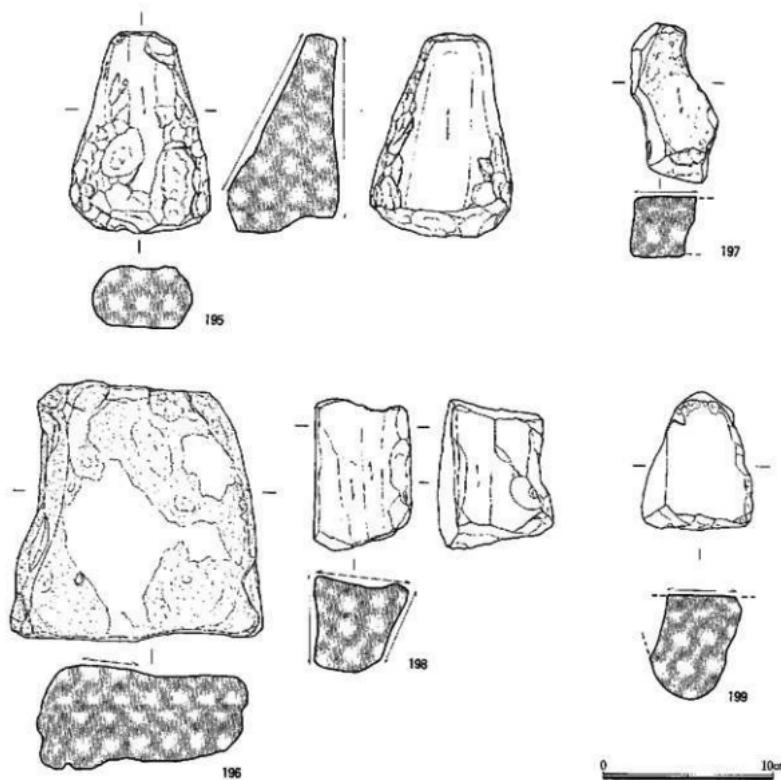
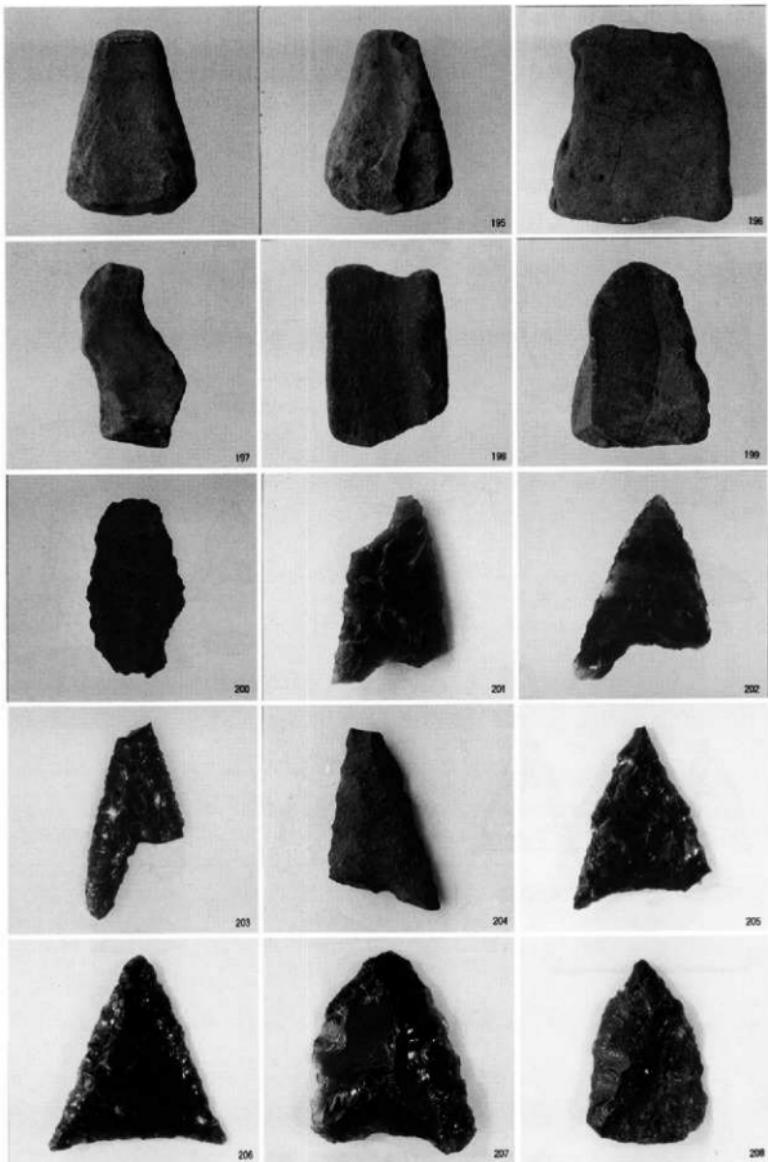


Fig. 22 溝 SD 04出土石製品実測図② (縮尺1/3)



溝 SD04出土遺物③

*数字は実測図の番号に一致する

(2) 表土出土遺物 (Fig. 24)

209~211は縄文晩期土器の底部片で、209は鉢、210は甕、211は蓋である。213は中国製白磁碗のIV類である。212・214は国産陶磁器で、214は伊万里焼である。212は唐津焼である。215は玄武岩製の敲石である。

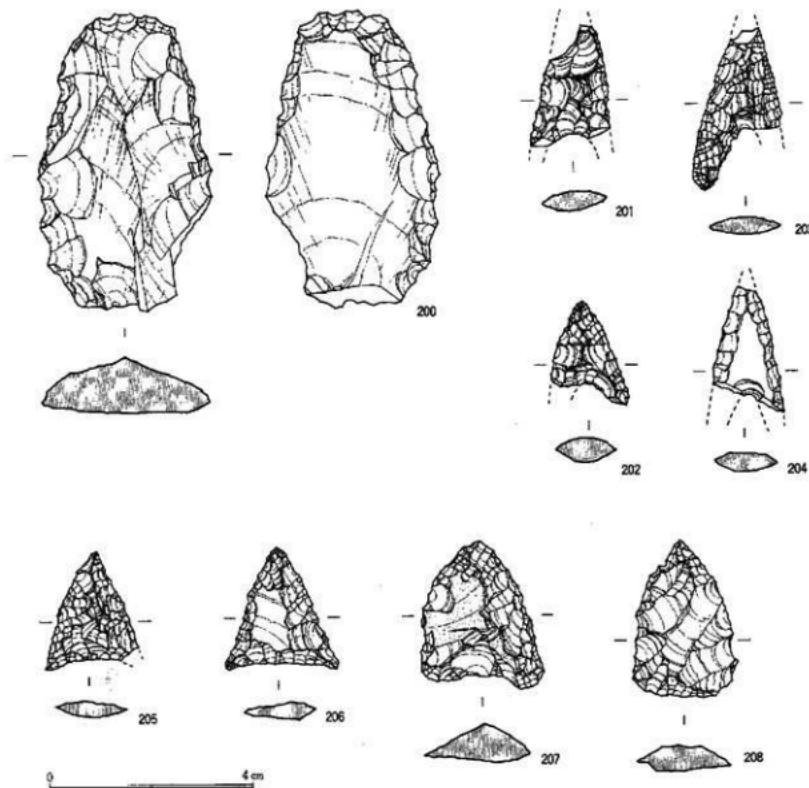


Fig. 23 溝 SD 04出土石製品実測図③ (縮尺1/1)

4. まとめ

調査では縄文時代晩期から江戸時代までの遺構・遺物を得た。しかし、遺構の主体を占めるものは溝のみであり、他にはわずかに柱穴が存在するだけで、主たる遺構は発見できなかった。溝は縄文時代の溝1条、弥生時代前期の溝1条、戦国時代の溝1条、江戸時代の溝1条である。弥生時代前期の溝SD 04からは溝まで削られていた部分において弥生後期の土器も出土しており、後世に大きな影響を受けていると思われる。

近世の溝SD 01は、南北方向から東西方向に矩形に曲がる溝で、南側は削られて消滅しているが、北側は、徐々に深くなる傾向をもち、東西方向に横長の庫裏建物の下に連続する。現在の本堂、庫裏は鉄筋コンクリート造りの一連の建物になっているが、創建以降の建物配置は今日とは充分違っていたと考えられる。出土遺物は、中世遺物を若干含むものの伊万里焼の陶磁器を主体としている。9の伊万里焼皿は、体部の内外面に草花文を具須で施し、内外底面にコンニャク版をスタンプしていることから、1700-1750年代の時期が比定される。又、「筑前国續風土記拾遺」によれば、荒平山西庵寺は博多方行寺の末寺で、浄土真宗西本願寺派に属しており、開基は惠正と云われる。「早良都志」によると、この惠正是天正7年に落城した荒平城主小田部鎮元の家臣小林の末裔で、創建は寛永年間(1624-1644)と云われる。時期的なズレはあるが、このSD 01の溝の配置からみて、当時の建物の外周に付設された雨落ち溝と考える方が妥当である。

中世溝のSD 02は南北方向の溝であるが、規模は不明である。恐らく、従来の例からみて溝幅は3-4m、深さ2mに達するものと思われる。この溝は2度に亘って埋立てられている。最初の埋立ては深さ50-60cmまでを行い、この上面に挙大の礫を投げ入れて、填圧している。礫中からは、唐津焼の碗・摺鉢を含んでおり、この埋戻しに際して填圧した礫群が17世紀以前の所産であることを示している。有田遺跡では第90次調査でも同様な例があり、切通し道の機能を推定したが、当該地のSD 02も濠の廃絶後は切通し道として利用されたものと考えられる。礫群下層から出土した土師器の坏は全て糸切り底で、底径と口径の比が大きく、16世紀代に比定できる。

旧地形図をみれば、調査区の東側に東西方向の長さ約55mをはかる規模の大きな土塁が存在しており、この濠(SD 02)と土塁の関係は強い。又、従来の調査で検出した有田1丁目付近を中心とする濠の一群、或いは、第74次調査の濠、第68次調査のホカヤネ跡、そして、現存する土塁は全て小田部城に関するものと考えられ、その復原の資料となり得る。又、伝承にある「堀ノ内城」と「小出辺城」

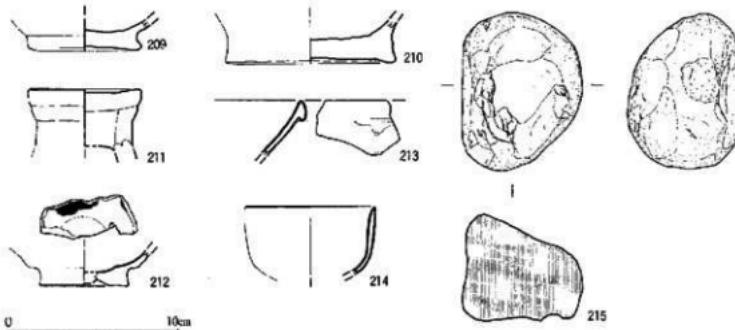


Fig. 24 表十出土遺物実測図 (縮尺1/3)

が同一城をさすものか、別の城なのか、文献においても明らかではないが、「早良郡志」では「堀ノ内城」を小田部氏の里城としている。Fig. 31によれば有田1丁目の第86次調査から、南側の有田宝満宮までの範囲において検出した濠の埋没時は、ほぼ近世初頭の時期を示しており、又、濠の構造も同一であることから現在の「小田辺城」の推定地も含めて、全て一連の構造物と考えたい。築城時期が明らかではないが、恐らくは城名については小田部氏が木上某を討って入城した時を境に城名の呼称が変わったものであろう。

溝 SD 03・04については、従来の調査によって、環濠を形成する溝として認識されている。関連する調査は九州大学第1・2次（第9街区）調査、福岡市第18次・第45次・第54次・第56次・第95次・第101次調査がある。九州大学の第29街区のトレンチ調査では、夜臼式土器と板付I式土器を共伴する弥生時代初頭のV字溝として報告されている。文章を引用すると「遺物の出土状態は、地表下40～50cmには、夜臼、板付I式土器を主体に、板付II式、弥生時代中期～後期の土器、古墳時代の土師器、須恵器を混入しているが、その下層より溝底までは、夜臼式と板付I式の共伴層である。」

今回の調査では、SD 03においては第1層に遺物が集中していたが、板付I式土器と共に出土している。又、第87次・第95次調査においても数の上では少ないものの、同様に上層から板付I式土器が出土している。第87次調査では古墳時代の住居跡とV字溝が切合うことで、V字溝上層から古墳時代の土器が出土していることが判明した。よって、29街区調査においてV字溝内の深さ40～50cmの間から弥生時代中期～古墳時代の遺物が混入していた状態をこうした住居跡との切合いで影響したものとみなした。しかし溝 SD 04は第3層までは弥生時代後期の土器が混入しており、第29街区の遺物出土状況に合っている。

第77次調査では未報告ではあるが、上層では従来の調査例の如く夜臼式、板付I式土器の共伴を見るが、下層・中層においては突帯文土器の甕の完形品が2個体出土しており、板付I式土器は伴っていない。溝については第95次調査で述べた通り、東西径約200m、南北径約300mを測る楕円形状の環濠を形成するものと推定した。今日の調査を含めて、時期的には一致しており、環濠形状はほぼ間違いないものと考えられる。溝の埋没時期は一律ではなく、上記の如く例により部分的には古墳時代まで完全に埋没せず遺存した区域があったことも考慮しなければならない。掘削時期は従来の調査において遺物の出土状況をきちんと把握できていない上、更に発掘調査も進んでいないので、従来の調査結果に頼らざるを得ないが、第77次調査の結果が大きく左右するであろう。

一方、V字溝の断面形状については、第87次調査において箱薬研堀形としたことに対して、一部の方から「掲載された土層断面図を見ると溝底には達していないもののV字溝状の掘り込みが認められる。」としてご批判いただいたが、溝底に達していたことは担当者2名が現認していることで、事実を確認しないまま作為的に資料操作をすることは考古学の方法論を無視することに等しい。箱薬研堀という中世から近世における濠について用いられる形状をあてたため誤解を招いたが、考古学上の概念であるV字溝を否定するものではなく、互いに九牛の一毛とならぬよう自責したい。但し、厳密に云えば溝底がV字形か、箱薬研堀状であるかは溝の機能や出入口の問題を含んでおり、溝底のレベル関係を再検討する必要がある。環濠が南北方向に開析した谷を用むことは述べたが、溝のレベルの状況は南西側に低くなっている、一面では排水溝の役目も負っていたのではないかと考える。

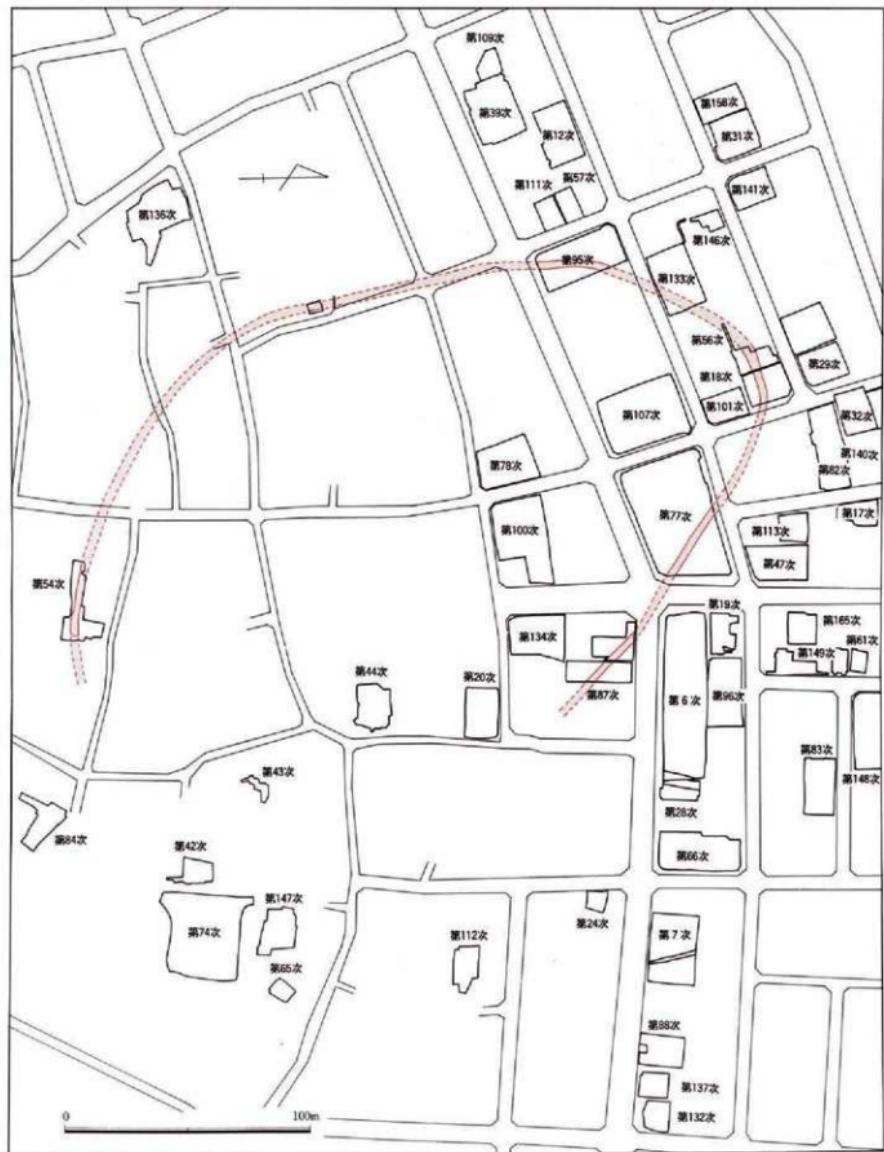


Fig. 25 環濠配置図 (縮尺1/2,000)

Tab. 2 第54次調査遺物一覧表

(単位: cm)

序号	遺物 番号	出土 場所	形態	寸法	底面 (裏面)	底面 (裏面)	表面の特徴・模様・文様	地盤・色調・質地等	備考
11 1	SD01	後臼土器	壺	-	-	(4.1)	刻目突起A。内外面はナゲ調整。	地上に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。暗褐色。	
11 2	SD01	後臼土器	壺	-	-	(2.7)	刻目突起A。大きな刻目を施す。内外面はナゲ調整。	地上に1~4mmの砂を含む。 焼成良好。外面は暗褐色。内面は淡褐色。	
11 3	SD01	後臼土器	壺	-	-	(1.9)	刻目突起A。大きな刻目を施す。内面はナゲ調整。外腹は赤系の後ナゲ調整。	地上に1~2mmの砂を含む。 焼成良好。暗褐色。	
11 4	SD01	張生土器	壺	-	7.6	(2.6)	小底。外面はタケハケ調整。内面はナゲ調整。	地上に1~2mmの砂を多く含む。 焼成良好。淡褐色。	
11 5	SD01	張生土器	壺	-	5.6	(2.2)	立上がりは丸みをもつ。内外面はナゲ調整。	地上に1~2mmの砂を多く含む。 焼成やや不良。外面は茶褐色。内面は黒褐色。	
11 6	SD01	瓦質土器	箱体	-	-	(6.2)	外観はヨコ方向のナゲ調整。	地上に1~3mmの砂を少し含む。 焼成良好。灰褐色。	内面磨滅
11 7	SD01	須恵器	壺	-	-	(3.0)	内面は青宿透印き。外観は平行叩き線。	地上に1mm前後の砂を少し含む。 焼成良好。青灰色。	
11 8	SD01	乗付	皿	13.0	(7.9)	(3.9)	高台は低い。内外面に凸縁文。見込みに2列の凹部。見込みにコンニャク。	素地は白色。焼成良好。透明釉。伊万里焼 淡灰褐色。	
11 9	SD01	食鉢	碗	-	(4.7)	(3.0)	底部厚。底面厚い。見込みに片切彫。	素地は淡白茶色。焼成良好。淡褐色の透明釉。青灰色。	中国製 青花磁器系
11 10	SD01	青磁	香炉	10.6	-	(3.0)	口縁部は内側。内面に接をもつ。	素地は淡灰茶色。焼成良好。乳白色の半透明釉。白灰色。	国産
11 11	SD01	白磁	足付壺	-	4.0	(2.85)	脚部片。脚部を欠く。上げ底。	素地は白色。焼成良好。透明釉。白色。	伊万里焼
12 16	SD02	後臼土器	壺	-	7.2	(2.8)	平底。内外面はナゲ調整。底部は削り。	地上に1~5mmの砂を多く含む。 焼成良好。淡褐色。	
12 17	SD02 蓋下層	後臼土器	壺	-	5.6	(2.3)	平底。底部漆を外に引き出す。内外面はナゲ調整。	地上に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。外腹は淡茶色。内面は黒褐色。	
12 18	SD02 蓋下層	後臼土器	壺	-	2.2	(3.0)	上げ底。底部は薄い。内外面はナゲ調整。	地上に1~5mmの砂を多く含む。 焼成良好。茶褐色。	
12 19	SD02 蓋下層	後臼土器	鉢	-	7.8	(3.8)	平底。底部漆を外に引き出す。内外面はナゲ調整。	地上に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。淡褐色。	
12 20	SD02 蓋下層	後臼土器	蓋	-	-	(3.6)	つまみ部。内外面にナゲ調整。	地上に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。茶褐色。	外腹磨滅
12 21	SD02 蓋下層	後臼土器	壺		5.4	(4.0)	つまみ部。内面は粗いナゲ調整。外腹はナゲ調整。上部は左回りのタケズリ彫刻。	地上に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。堅い。淡茶褐色。	
12 22	SD02 上層	土師器	高杯	-	-	(2.8)	手彫。脚部を欠く。脚部は大きく聞く。内腹はナゲ調整。内面に吹き出し。	地上に1~2mmの砂を多く含む。 焼成良好。明茶褐色。	外腹磨滅
12 23	SD02	土師器	高杯	-	-	(7.0)	脚部片。外腹・底部を欠く。外腹はナゲ調整。内面に吹き出し。	地土は褐色。焼成良好。明茶褐色。	外腹磨滅
12 24	SD02	土師器	坪	10.3	7.7	(2.1)	余切り底。脚部は大きく聞く。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	地上に織かい砂を少し含む。焼成やや軟。明茶褐色。	
12 25	SD02	土師器	坪	10.4	7.0	2.2	余切り底。脚部は大きめに聞く。口縁部尖る。見込みに吹き出しがある。	地土は褐色。焼成良好。明茶褐色。	
12 26	SD02	土師器	坪	11.1	7.5	2.1	余切り底。脚部は内側寄りで聞く。口縁部は尖る。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	地土は褐色。焼成良好。明茶褐色。	
12 27	SD02	土師器	坪	11.5	7.7	2.4	余切り底。脚部は大きく聞く。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	地土は褐色。焼成良好。淡茶褐色。	
12 28	SD02	土師器	坪	11.8	8.0	2.1	余切り底。脚部は大きく聞く。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	地土は褐色。焼成良好。明茶褐色。	
12 29	SD02 蓋下層	土師器	木	11.1	7.2	2.2~2.5	余切り底。脚部は内側寄りで聞く。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	地上に1~3mmの砂を少し含む。 焼成やや軟。外腹は淡茶褐色。内面は褐色。	
12 30	SD02 蓋下層	土師器	木	11.5	7.8	2.4	余切り底。脚部は大きく聞く。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	地上に1~3mmの砂を少し含む。 焼成良好。明茶褐色。	
12 31	SD02	土師器	坪	11.1	7.0	2.3	余切り底。脚部は大きく聞く。見込みに同心円状の凸部をもつ。	地土は褐色。焼成良好。淡茶褐色。	
12 32	SD02 蓋下層	土師器	坪	11.2	8.8	2.6~2.4	余切り底。脚部は大きく聞く。内底見込みに同心円状の凸部をもつ。	1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	

序号	唐物 番号	出土 遺物	種類	基準	口径	底径 (高台付)	標高 (現存高)	形態の特徴・調査・文様	地質・色調・背景等	備考
12	33 SD 02 壇上層	瓦器	壺	—	8.3	(1.5)	身切り底。体部は大きく聞くが、丸底をもつ。	土は細緻。焼成良好。明茶褐色～淡灰色。		
12	34 SD 02 壇上層	瓦器	壺	—	(4.8)	(2.9)	身切り高台。高台に外に張り、底部はねはね上がる。	高地は淡赤褐色。波痕良好。灰綠色。施無端は淡茶褐色。	高津便	
12	35 SD 02 壇中層	陶器	壺	—	—	(6.0)	口縁片。直立する口縁部を外に斜めに下げる。丸い帯状突起部に上縁を作る。	素面は1~5mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色～淡茶褐色。	僧霊焼 15C	
12	36 SD 02 壇上層	陶器	壺	—	—	(6.1)	口縁片。直立する口縁部を外に斜めに下げる。丸い帯状突起部に上縁を作る。	素面は大粒の砂を少し含む。焼成良好。豆沙。明茶褐色。	僧霊焼	
12	37 SD 02 壇上層	陶器	壺	—	—	(6.9)	口縁片。体部はやや内凹気味に立ち上がる。内面に6本竿位の下し目がある。底部に円孔。	高地は深かい凹を含む。焼成良好。灰綠色。底部に茶褐色。	中國製	
12	38 SD 02 壇中層	瓦質土器	火鉢	—	—	(4.5)	口縁片。内面はヨコハケ調査。外縁に2条の突起部を貼り付ける。	船上に移設を含まない。焼成良好。		
13	39 SD 02 壇下層	瓦質土器	湯釜	—	—	(15.0)	低視中位に三曲突堤。周辺に2条の突起部がある。周辺には斜めのスリップとヨコハケの跡を貼り付ける。内面はヨコハケ調査。	船上は細緻。焼成良好。外縁は暗褐色～茶褐色。内面は淡色。	二次的に火を受ける。	
13	40 SD 02 壇下層	瓦質土器	湯釜	16.0	—	(15.5)	低視中位に三曲突堤。周辺に1条の突起部。周辺に花紋のスタンプを施す。3ヶ所に耳を貼り付ける。	船上に砂を少し含むない。焼成良好。茶褐色～褐色。	二次的に火を受ける。	
13	41 SD 02 壇下層	瓦質土器	瓶	—	—	(9.5)	体部は丸みをもつ。口縁部は外反し。底部を貼り付ける。内面はヨコハケ調査。	船上に砂を少し含む。焼成良好。豆沙。	外海御城	
13	42 SD 02 壇下層	瓦質土器	瓶	—	—	(5.8)	口縁部は外反し。底部を内側へつまみ出す。内面に火が付せる。	船上に火粒の砂を含む。焼成軟。淡茶色。	内外御城	
13	43 SD 02 壇下層	瓦質土器	瓶	—	—	(7.8)	口縁部は外反し。底部を内側へつまみ出す。内面に火が付せる。	船上に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶色。		
13	44 SD 02 壇上層	土質土器	壺	—	—	(7.0)	口縁部を肥らせる。内面の下し目は4本竿位。内面はヨコハケ調査。外縁にタラシケ調査。	船上に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶色。		
13	45 SD 02 壇中層	瓦質土器	壺	—	14.4	(4.1)	体部は丸みをもつ。大きさで覆く。外縁はタラシケ調査。	船上に1~4mmの砂を多く含む。内面暗褐色。		
13	46 SD 02 壇下層	瓦質土器	壺	—	—	(7.1)	口縁部はやや内凹気味で、底部を肥らせて平坦にする。内面に火が付せる。	船上に砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。		
13	47 SD 02 壇下層	瓦質土器	瓶	—	—	(5.6)	口縁部は若干内寄し、輪郭を平坦にする。内面はヨコハケ調査。外縁にナテ調整。	船上に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶色～褐色。		
13	48 SD 02 壇中層	土質土器	土鍋	—	—	(6.4)	体部は内凹気味で、底部は頗る尖り気味。	船上に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。		
13	49 SD 02 壇下層	二重質土器	瓶	—	—	(4.8)	口縁部はやや外反する。輪郭は頗るくくなっている。内面はココハク調査。	船上に1~3mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色～褐色。		
16	61 SD 03 第2層	青白式土器	壺	—	—	(3.5)	肩口安審A。外縁は貝殻条状。内面はナテ調査。	船上に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外縁は暗褐色。内面は茶褐色。		
16	62 SD 03 第2層	青白式土器	壺	—	—	(3.7)	肩口安審A。空吹断面は三角形。肩口は澤v。外縁は貝殻条状。外縁はナテ調査。	船上に1~2mmの砂を含む。焼成良好。		
16	63 SD 03 第2層	青白式土器	壺	—	—	(6.2)	肩口安審A。内面は深く、内面は貝殻条状の外、削り出たナテ調査。内面は余程の後、ナテ調査。	船上に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。外縁は暗褐色。内面は淡茶褐色。		
16	64 SD 03 第2層	青白式土器	壺	—	—	(4.5)	肩口安審A。外縁は板状のものによるナテ調査。内面はナテ調査。	船上に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外縁は暗褐色。内面は茶褐色。		
16	65 SD 03 第2層	青白式土器	壺	—	—	(4.0)	肩口安審A。外縁は貝殻条状。内面はナテ調査。	船上に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。		
16	66 SD 03 第1層	青白式土器	壺	—	—	(4.0)	肩口安審A。外縁は貝殻条状。内面はナテ調査。	船上に1~3mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。		
16	67 SD 03 第1層	青白式土器	壺	—	—	(7.3)	肩口安審A。外縁はヨコ方向の粗いナテ調査。内面はナテ調査。	船上に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。褐色。		
16	68 SD 03 第2層	青白式土器	壺	—	—	(3.4)	肩口安審A。外縁はナテ調査。小さな突起。	船上に1~2mmの砂を含む。焼成良好。外縁は褐色。内面は淡茶褐色。		
16	69 SD 03 第1層	青白式土器	壺	—	—	(5.5)	肩口安審A。外縁は貝殻条状。内面はナテ調査。	船上に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。外縁は褐色。内面は淡茶褐色。		
16	70 SD 03 第1層	青白式土器	壺	—	—	(4.4)	肩口安審A。外縁は貝殻条状。内面はナテ調査。	船上に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外縁は褐色。内面は淡茶褐色。		
16	71 SD 03 第2層下	青白式土器	壺	—	—	(5.2)	肩口安審A。外縁は細いナテ調査。内面はナテ調査。	船上に1~3mmの砂を多く含む。焼成不良。褐色。		

序号	植物名	出土位置	種類	根幅	口径	高さ (高さ)	基面 (現存度)	形態の特徴・調査・文様	地盤・土質・実地等	備考
16	72	SD 03 第1層	麦白式土器	甕	-	-	(4.6)	割目突帯C。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成不良。淡茶褐色。	
16	73	SD 03 第2層	麦白式土器	浅杯	-	-	(3.7)	口縁部はやや外反する。内外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成やや不良。外面は淡茶色、内面は黒色。	
16	74	SD 03 第1層	麦白式土器	甕	-	-	(3.6)	口縁部は外反する。外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。暗褐色。	
16	75	SD 03 第1層	陶文土器	钵	14.6	-	(3.3)	体部は直線的で延び、端部は外につまみ出す。内外面ナゲ調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。灰褐色。	
16	76	SD 03 第2層	麦白式土器	甕	-	5.2	(2.5)	上げ底。内外面はナゲ調整。外底部は割り調整の後ナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。褐色~茶褐色。	
16	77	SD 03 第2層	麦白式土器	甕	-	7.0	(1.9)	やや上げ底。底部に木の痕跡。内面はヘラ状のものによるナゲ調整。外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。淡茶褐色。	
16	78	SD 03 第2層	麦白式土器	甕	-	5.8	(3.9)	上げ底。内面はヘラ状のものによるナゲ調整。外面は直線的で延び、外底部は削り調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。外面は茶褐色~褐色、内面は褐色。	
16	79	SD 03 第1層	麦白式土器	甕	-	8.0	(2.95)	平底。内面はナゲ調整。底部の器壁は薄い。底部端部を外に引き出す。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成やや不良。淡褐色。	
16	80	SD 03 第1層	麦白式土器	甕	-	6.5	(2.6)	やや上げ底。内外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成不良。外面は暗褐色、内面は淡褐色。	
15	81	SD 03 第1層	麦白式土器	甕	-	8.6	(3.6)	上げ底。内外面はナゲ調整。外底部は削り調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。褐色。	
16	82	SD 03 第3層	麦白式土器	甕	-	12.4	(1.9)	平底。外底は木底の後ナゲ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。外面は褐色、内面は黑色。	
17	85	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	-	(5.4)	口縁部の割目突帯は小さい。底部屈曲部の 突起を少く。外側ハケ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。外面は褐色、内面は淡茶褐色。	
17	86	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	-	(4.0)	割目突帯A。深い割目を施す。外面は貝殻 直底。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成良好。外面は暗褐色、内面は黑色。	
17	87	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	-	(7.4)	口縫部と器底の屈曲部に割目突帯をもつ。 割目突帯A。外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成やや不良。淡褐色。	
17	88	SD 04 第1層	麦白式土器	浅杯	-	-	(3.5)	口縫部はくち字形に外反する。内外面は細 かい研磨を施す。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成良好。外面は茶褐色、内面は灰 茶褐色。	
17	89	SD 04 第1層	陶生土器	甕	-	-	(3.4)	如意形口縫部。口縫部に割目を施す。外 面はカステハケ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。外面は褐色、内面は淡 茶褐色。	吸付式
17	90	SD 04 第1層	陶生土器	甕	-	-	(3.2)	口縫部は外反し、外面上に粘土を貼り付け 厚くさせる。外縫に段をもつ。外縫はナゲ 調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。外縫は褐色、羽茶褐色。	
17	91	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	5.9	(4.6)	やや上げ底。体部は内窓気泡に立上がる。 内窓気泡はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成やや不良。外縫は褐色、羽茶褐色。	
17	92	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	6.4	(3.3)	上げ底。底部に削り。外底部は削り調整。 内外面はナゲ調整。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。 焼成良好。淡茶褐色。	
17	93	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	5.8	(2.7)	やや上げ底。外縫に貝殻直底。内面はナ ゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成良好。茶褐色。	
17	94	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	7.0	(3.2)	上げ底。通縫を外へ引き出す。内面はナ ゲ調整。外縫は直底。	粘土に1~2mmの砂を含む。 焼成良好。淡褐色。	
17	95	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	7.0	(3.5)	やや上げ底。内面はナゲ調整。外縫に貝殻 直底。外底部は削り調整。	粘土に1~2mmの砂を含む。 焼成良好。茶褐色。	
17	96	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	7.4	(3.6)	上げ底。端部を外へ引き出す。外底部に木 の痕跡が残る。内面はナゲ調整。	粘土に1~4mmの砂を非常に多く 含む。焼成良好。茶褐色。	
17	97	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	8.0	(3.0)	上げ底。通縫を外へ引き出す。外底部は削 り調整。底部は薄い。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成やや不良。茶褐色。	
17	98	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	7.6	(4.5)	上げ底。底部に径1cmの孔を焼成後に外 底からあらす。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成やや不良。外縫は淡茶褐色、内面は褐色。	
17	99	SD 04 第1層	麦白式土器	甕	-	5.4	(3.5)	やや上げ底。外縫は板状のものによるナ ゲ調整。底部は薄い。外縫部は削り調整の後 ナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成やや不良。淡茶褐色。	
17	100	SD 04 第1層	陶生土器	甕	-	6.0	(3.5)	上げ底。内外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。 焼成やや不良。淡茶褐色。	
17	101	SD 04 第1層	陶生土器	甕	-	6.5	(3.9)	やや上げ底。外縫は板状のものによるナ ゲ調整。底部は薄い。外縫部は削り調整の後 ナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。 焼成良好。淡茶褐色。	

出 番 号	通 番 号	底上 性情	種類	器種	口径	直径 (高径比)	標高 (現谷高)	用途の特徴・調査・文様	施物・色調・質地等	備考
17 102	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	8.6	(3.5)	平底。外側はナテ調整。底部は削り調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成やや不良。赤茶褐色。	内面磨滅	
17 103	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	8.6	(5.3)	やや上げ底。外反する底盤は直線的に立上がる。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外側は淡茶褐色。内面は淡褐色。	内面磨滅	
17 104	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	11.0	(4.8)	やや上げ底。内外底はナテ調整。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成やや不良。淡茶褐色。		
17 105	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	13.6	(3.8)	平底。外側はタテハケ調査。内側はナテ調査。	胎土に1~5mmの砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。		
17 106	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	13.9	(4.0)	平底。外側はタテハケ調査。内側はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。		
17 107	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	7.8	(10.0)	平底。内側はナテ調整。体部は直線的に立上がる。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。赤褐色。	外面磨滅	
17 108	SD 04 第1層	弥生土器	甕	-	9.5	(5.8)	平底。体部は内方突出して立上がる。外側はヨコ方向のヘラ研磨。内面はナテ調整。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。		
18 109	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	-	(3.3)	対目突唇A。外側は焼成赤茶。内側はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外側は暗褐色。内面は褐色。		
18 110	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	-	(3.1)	対目突唇A。外側は真殿赤茶。内側はナテ調査。	胎土に1~4mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色~褐色。		
18 111	SD 04 第2層	青白式土器	浅钵	-	-	(3.4)	口縁部は外反する。外底は削り調査。内底はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成やや秋。外側は淡褐色。内面は黑色。		
18 112	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	-	(3.9)	口縁部は外反する。内面はヨコ方向のヘラ研磨。外側はヨコ方向のヘラ研磨。	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。外側は黒色。内面は紺褐色。		
18 113	SD 04 第2層	弥生土器	甕	-	-	(3.4)	如意形口縁。口縁部に刻目を施す。外側はタテハケ調査。内底はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成やや秋。淡褐色。	板付1式	
18 114	SD 04 第2層	弥生土器	甕	-	-	(3.3)	如意形口縁。口縁部に刻目。外側はナテハケ調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	内面磨滅	
18 115	SD 04 第2層	弥生土器	甕	-	-	(4.2)	如意形口縁。口縁部に刻目。外側はナテハケ調査。内底はナテ調査。	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	板付1式	
18 116	SD 04 第2層	弥生土器	小甕	-	4.4	(3.2)	口縁部が大きく、最大横幅部は下位にある。底盤は厚く、上立ぎ。内面はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。外面磨滅。焼成やや不良。茶褐色。		
18 117	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	-	(5.2)	口縁部は外反する。内外面はヘラミカキ。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。		
18 118	SD 04 第2層	弥生土器	甕	-	-	(3.3)	口縁部は外反し、外周に削り付けて縫隙を形成する。内外底はナテ調査。底盤部を外に引き出す。	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	弥生時代後期	
18 119	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	6.5	(3.4)	上げ底。外側はナテ調査。底盤部は削り調査の後ナテ調査。底盤部を外に引き出す。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	内面磨滅	
18 120	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	6.0	(2.7)	上げ底。内外面はナテ調査。底盤部は削り調査の後ナテ調査。底盤部を外に引き出す。	胎土に1~3mmの砂を少しあむ。焼成良好。茶褐色。		
18 121	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	6.8	(2.4)	平底。立ち上がりは低く。内外面はナテ調査。底盤部は厚い。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外側は黑色~褐色。内面は黑色。		
18 122	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	8.6	(3.1)	やや上げ底。外底部に木の薪痕。内外面はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成やや不良。外側は淡茶褐色。内面は黑色。		
18 123	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	6.5	(2.1)	上げ底。内外底はナテ調査。底盤部を外に引き出す。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。		
18 124	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	7.0	(2.5)	平底。内外底はナテ調査。外底部は削り調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。		
18 125	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	7.2	(2.8)	上げ底。内外底はナテ調査。外底部は削り調査の後、ナテ調査。底盤部を外に引き出す。	胎土に1~3mmの砂を少しあむ。焼成良好。淡茶褐色。		
18 126	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	8.8	(4.0)	上げ底。内外底はナテ調査。底盤部を外に引き出す。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色~淡灰色。		
18 127	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	4.5	(2.2)	小底部の半底で、外外面はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。		
18 128	SD 04 第2層	青白式土器	甕	-	8.0	(3.0)	やや上げ底。外側はナテ調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色~褐色。	内面磨滅	
18 129	SD 04 第2層	弥生土器	甕	-	6.0	(2.0)	平底。体部はゆるやかに立ち上がる。	胎土に1~2mmの砂を少しあむ。内外面磨滅		

種類 番号	產地 番号	出土 地點	性状	基盤	U柱	底径 (高台田)	基盤 (根台高)	形態の特徴・調査・文様	施物・色調・変化等	備考
18	130 SD 04 第2号	海生土器	變	-	10.0	(4.3)		平底。底部は薄い。外側はナガ調査。	施土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外側は淡赤褐色、内側は淡茶色。	内面磨滅
18	131 SD 04 第2号	海生土器	變	-	7.0	(5.0)		平底。体部は内寄気味に立上がる。内面はナガ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成やや不良。外側は茶褐色、内側は褐色。	外側磨滅
18	132 SD 04 第2号	海生土器	變	-	8.2	(5.5)		平底。外底部に斜床。体部は外反する。外側にはタケハケ調査。下位はヘラグリで横がつく。内面はナガ調査。	施土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
18	133 SD 04 第2号	海生土器	變	-	7.4	(5.0)		平底。外底部は斜床。外側には板状の平底。内側にはナガアーチ調査。外側にはタケハケ調査。横がつく。内面はナガ調査。	施土に1~4mmの砂を含む。焼成良好。外側は明茶褐色、内側は淡茶色。	
18	134 SD 04 第2号	海生土器	變	-	7.6	(5.3)		平底。体部はやや寄気味に外反する。外側にはタケハケ調査。内面はナガ調査。	施土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外側は淡茶褐色、内側は淡褐色。	
18	135 SD 04 第2号	海生土器	變	-	10.4	(5.0)		平底。傾度は薄く、体部は内寄気味。内面はナガ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。外側は淡褐色、内側は茶褐色。	外側磨滅
18	136 SD 04 第2号	海生土器	變	-	8.0	(8.0)*		平底。体部は内寄気味。外側はタケハケ調査。下位はヘラグリで横がつく。内面はナガアーチ調査。	施土に1~5mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
18	137 SD 04 第2号	海生土器	變	-	11.2	(8.3)		上げ底。体部は外反し、大きくなっている。外側にはタケハケ調査。外側下部は板状のものによる強ナガアーチ調査。	施土に1~4mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
19	138 SD 04 第2号	海生土器	變	-	11.0	(9.0)		平底。体部は直線的に延びる。内面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	
19	139 SD 04 第2号	海生土器	變	-	-	(7.4)		天井部は上げ底。外側はタケ方面の強いナガアーチ調査。後がつく。内面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を多く含む。焼成やや不良。外側は淡茶褐色、内側は茶褐色。	
19	140 SD 04 第2号	海生土器	坏	-	-	(11.0)		山根端、面部を欠く。坏部と脚部の境に二角突起を貼り付ける。	施土に1~5mmの砂を多く含む。外側磨滅やや不良。淡茶褐色。	
19	141 SD 04 第2号	海生土器	坏	-	-	(9.5)		坏部・面部を欠く。坏部と脚部の境に二角突起を貼り付ける。	施土に1~4mmの砂を多く含む。外側磨滅やや不良。淡茶褐色。	
19	142 SD 04 第2号	海生土器	坏	-	15.6	-	8.9	体部は丸味をもつ。口縁部は尖る。外側中位にヨコハケ調査。内面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を多く含む。焼成不良。外側は暗褐色、内側は茶褐色。	弥生時代終末
19	143 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	-	(6.9)		前日突帯A。内外面はナガアーチ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。外側は暗褐色、内側は茶褐色。	
19	144 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	-	(6.0)		前日突帯A。突帯は低くない。外側に貞岐条带。内面はナガアーチ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
19	145 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	-	(5.7)		如意突帯B。口縁部に削は。内面はヨコハケ調査。外側はタケハケ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	板付I式
19	146 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	-	(4.6)		如意突帯Cのく外。底部に削は。内面はヨコハケ調査。外側はタケハケ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成やや軟。外側は茶褐色、内側は褐色。	板付II式
19	147 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	-	(5.6)		如意突帯C。逆L字形を呈する。外側はタケハケ調査。	施土に1~4mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期 内面→口縁部 は堅厚。
19	148 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	7.2	(3.3)		上げ底。底部縫を外に引き出す。内外面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を多く含む。焼成やや軟。外側は淡茶褐色、内面は淡褐色。	
19	149 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	7.6	(3.6)		上げ底。底部縫を外に引き出す。	施土に1~3mmの砂を含む。焼成不良。外側は淡茶褐色、内面は淡褐色。	
19	150 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	7.0	(3.5)		やや上げ底。内外面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
19	151 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	6.8	(2.3)		上げ底。外側はナガアーチ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。黒色。	
19	152 SD 04 第3号	夜白土器	變	-	5.8	(4.1)		やや上げ底。器蓋は厚い。内外面はナガアーチ調査。	施土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。外側は淡茶褐色、内面は淡褐色。	
19	153 SD 04 第3号	海生土器	變	-	6.6	(3.2)		平底。体部は内寄気味に立上がる。内外面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外側は黑色→褐色、内面は淡褐色。	
19	154 SD 04 第3号	海生土器	變	-	8.0	(6.5)		平底。底端部に凹がある。体部は直線的に立上がる。外側はタケハケ調査。内面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外側は茶褐色、内面は褐色。	
19	155 SD 04 第3号	海生土器	變	-	5.4	(3.4)		上7底。体部はやや内寄気味に外反する。外側はタケハケ調査。内面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外側は茶褐色、内面は褐色。	
19	156 SD 04 第3号	海生土器	變	-	7.4	(7.5)		平底。外側はタケハケ調査。内面はナガアーチ調査。	施土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	内面磨滅
19	157 SD 04 第3号	海生土器	變	-	8.2	(9.4)		平底。体部は直線的に立上がる。内外面はナガアーチ調査。	施土に1~3mmの砂を少し含む。内外面磨滅。焼成良好。茶褐色。	内外面磨滅

編號	地質 番号	出土 場所	性質	層級	口径	底径 (高台径)	厚さ (底面高)	形態の特徴・調整・文様	地質・色調・产地等	備考
19	158	SD 04 第3層	非生土器	更	-	8.8	(8.8)	平底。体部は直線的に立上がる。内外面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は灰褐色。	内面磨滅
20	159	SD 04 第3層	非生土器	更	-	6.8	(10.3)	平底。外側はタテハケ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~5mmの砂を少し含む。焼成良好。素面。	
21	160	SD 04 第3層	非生土器	更	-	6.8	(12.3)	平底。体部の立上がりは丸底をもつ。内面は気泡である。外側はタテハケ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~4mmの砂を多く含む。焼成不良。茶褐色。	生土時代後期
22	161	SD 04 第3層	非生土器	更	-	6.8	(12.4)	平底。体部は球形を示す。内面はナゲ調整。	粘土に1~4mmの砂を含む。焼成不良。外面は淡茶褐色、内面は灰褐色。	外面磨滅
23	162	SD 01 第3層	非生土器	更	-	-	(5.6)	口縁部は外反し。外側に粘土を貼り付けて底を固めさせ、段を作成する。外側はヘラ研磨調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	付木式
24	163	SD 01 第3層	更白土器 or先生土器	小壺	-	4.6	(3.7)	平底。体部が丸底をもつ。外底部は削り削った後の後。ナゲ調整。外側はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は灰褐色。	
25	164	SD 04 第3層	非生土器	更	-	5.4	(3.3)	平底。体部はや外反する。外更是ヨコ方向の切跡を施す。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は灰褐色。	内面磨滅
26	165	SD 04 第3層	非生土器	更	-	7.0	(4.9)	平底。体部は丸底をもつ。外底部は削り削った後の後。ナゲ調整。外側はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外面は暗褐色、内面は灰褐色。	
27	166	SD 04 第3層	非生土器	更	-	-	(2.5)	両部に各2条の沈縫を施し、その間に複数山形文を施す。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
28	167	SD 04 第3層	非生土器	更	-	-	(5.9)	両部に2条の沈縫を施し、下部に底張文を施す。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は灰褐色。	
29	168	SD 04 第3層	非生土器	更	-	-	-	両部に各2条の沈縫を施し、その間に複数山形文を施す。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成や小良。明茶褐色。	
30	169	SD 04 第3層	非生土器	更	-	11.6	(5.0)	やや上げ底。体部は内寄気味に聞く。	粘土に1~4mmの砂を多く含む。焼成や不良。外面は茶褐色、内面は灰色。	
31	170	SD 04 第3層	非生土器	更	-	9.4	(4.6)	平底。外側はタテハケ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
32	171	SD 04 第3層	非生土器	更	-	-	(3.9)	つまみ底。天上面は上げ底。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	外面磨滅
33	172	SD 04 第3層	非生土器	更	-	-	(5.6)	天上面はくぼみ。外側はタテハケ調整。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。褐色。	
34	173	SD 04 第3層	網目承土器	把手	-	-	-	丁寧なナゲ調整。	粘土に1mm前後の砂を少し含み。焼成良好。褐色。	網目系
35	174	SD 04 第4層	更白土器	更	-	-	(3.3)	更白土器A。内外面はナゲ調整。	粘土に1~4mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
36	175	SD 04 第4層	更白土器	浅鉢	-	-	(3.0)	口縁部は外反する。内外面はナゲ調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
37	176	SD 04 第4層	更白土器	更	-	6.6	(3.0)	上げ底。底部縁を外に引き出す。内面は板状の工具によるナゲ調整。外側はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
38	177	SD 04 第4層	更白土器	更	-	7.8	(3.6)	上げ底。底部は深い。内外面はナゲ調整。外底部は削り削調。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
39	178	SD 04 第4層	更白土器	更	-	8.0	(2.7)	上げ底。内面はヘラ状の工具によるナゲ調整。外側はナゲ調整。外底部は削り削調の後。ナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は灰褐色。	
40	179	SD 04 第4層	更白土器	鉢	-	6.2	(2.0)	上げ底。底部は深い。内外面はナゲ調整。	粘土に1~1~4mmの砂を多く含む。焼成や小良。茶褐色。	
41	180	SD 04 第4層	非生土器	更	-	9.4	(5.8)	平底。体部はや内寄気味に立上がる。	粘土に1~4mmの砂を多く含む。焼成や不良。淡茶褐色。	内外面磨滅
42	181	SD 04 第4層	非生土器	盒	-	-	(4.2)	印彫形口縁。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	外面磨滅
43	209	表土	更白土器	鉢	-	6.0	(1.9)	やや上げ底。底部縁を外に引き出す。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
44	210	表土	更白土器	更	-	9.9	(2.6)	やや上げ底。外底部は削り削調の後。ナゲ調整。外側はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
45	211	表土	更白土器	更	-	9.9	(3.4)	つまみ底。天上面は凹盤状で、上げ底。内面はナゲ調整。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
46	212	表土	陶 器	鍋	-	(5.2)	(2.2)	底と目高台。鉄物陶器で、内面見込みに鉄栓を指す。	表土は灰色。焼成良好。造形美、外光色。	着作説

辨認番号	遺物番号	出土遺構	種類	口径	底径(実存径)	最高(実存高)	断面の特徴・調査・文様	施釉・色調・素地等	備考
24	213	表土	白 磁	器	—	(3.3)	玉縁口縁。胎は厚い。	素地は白灰色でやや粗い。施成良好。透明釉、白磁色。	中間層 大手町ガラス
24	214	表土	白 磁	器	—	7.6	(4.2)	底部は直線的に延び、口縁端部は尖る。	素地は白色で精緻。施成良好。透明釉、白色。

Tab. 3 第54次調査青銅製品及び鉄製品一覧表

(単位: cm)

辨認番号	遺物番号	出土遺構	馬鹿	器種	底(実存底)	幅(実存幅)	厚(実存厚)	備考
11	12	SD 01	鉄製品	釘	(4.8)	(0.4)	(0.4)	
11	13	SD 02	貨幣	寛永通寶	外径2.4	—	外径厚0.1	寛永年1636年(寛永13年)。江戸時代
13	50	SD 03下層	鉄製品	葉	(5.4)	—	—	外刃に条線が施される。鉄造業である。
13	51	SD 02上層	鉄製品	刀子	(3.5)	(3.4)	(0.3)	工具と考えられる。闇は背・刃部に段をもつ。

Tab. 4 第54次調査石製品一覧表

(単位: cm)

辨認番号	遺物番号	出土遺構	断面	高(実存高)	幅(実存幅)	厚(実存厚)	重量(g)	石材	色 調	特 殊
11	14	SD 01 底	石臼 (上臼)	(7) 17.5	—	9.6	—	凝灰岩	暗赤褐色	芯棒孔径1.8cm、側面孔径1.5~1.7cmの方形で、深さ3.2cm。側面孔の断面形状が小さく、側面に難波孔を残す。合掌形は8分割(基部)で、主座7本、軸承2本を逆時計回りに配す。
14	52	SD 02 腰帯	石斧	(10.4)	8.8	4.9	705	玄武岩	灰褐色	刃部・基部を欠き、基部と裏面を再加工途中。全体的に風化によるため表面が剥離している。
14	53	SD 02 腰帯	石鎌	11.0	5.5	2.5	—	玄武岩	灰褐色	柳円形の自然石の両端を打ち欠いて快りを入れる。
14	54	SD 02 腰帯	石斧	(7.3)	(6.9)	(5.8)	—	砂岩	褐色	不整形に分離した角礫のA面を平面として利用。
14	55	SD 02 腰帯	石斧	(0.5)	12.0	10.0	—	砂岩	灰褐色	海岸における漫食をうけた自然石を利用。多面体の4面を平面として利用。二次火を受ける。
14	56	SD 02 腰帯	石斧	(6.9)	(13.2)	8.0	—	砂岩	灰褐色	不整形の長方形容体を呈し、上面に幅5.0cmの窪みを設ける。側面は面取りするが、2辺は風化・破損している。二次火を受ける。
14	57	SD 02 腰帯	圓み石	11.8	12.9	8.2	—	砂岩	暗赤褐色	不整形の長方形容体を呈し、上面に幅5.0cmの窪みを設ける。側面は面取りするが、2辺は風化・破損している。二次火を受ける。
14	58	SD 02 腰帯	石斧	16.5	10.2	9.0	—	砂岩	灰褐色	長方形容体の立方体であるが、1面と2面は自然面を残し、3面は面取りしている。A面を主に底面として利用。
14	59	SD 02 腰帯	一石五輪塔 (底心)	18.5	13.3	—	—	凝灰岩	淡褐色	二次火を受ける。水・地盤を欠き、さらに縦半分を欠損する。盒身に難波がある。
15	60	SD 02 腰帯	石碑 (底石)	(16.9)	19.4	9.2	—	砂岩	褐色	底部三角形の腰部のみ残存。2条の素縞彫りの沈線。背面に墨の反模様。二次火を受ける。
16	83	SD 03 腰帯	石碑	(8.5)	5.2	0.7	—	砂岩	暗灰色	磨制石碑で、基部と先端部を欠く。両刃で、背部は丸みをもつ。風化害しい。

件名	機械番号	工具番号	加工機械	各 寸 法 (参考値)	幅 (参考値)	厚 (参考値)	重量(g)	石材	色 調	特 徴
21	182	SD04 第1層下	磨削石斧	24.5	8.4	3.6	1135	玄武岩	暗灰色	馬頭大感石斧。全体を砂磨。表面は風化が著しい。刃部は両刃で、部を火く。
21	183	SD04 第2層	磨削石斧	24.7	7.9	3.55	700	玄武岩	暗灰色	刃部・基部及び研削部分を火く。全体を研磨。表面は風化している。
21	184	SD04 第2層	磨削石斧	24.5	7.3	3.6	580	玄武岩	暗灰色	刃部を火く。表面に敲打痕を残す。全体の研磨は丁寧ではない。風化している。
21	185	SD04 第1層	磨削石斧	21.4	5.7	4.0	212	玄武岩	灰色	刃部と研削部分を火く。基部の一端を欠損。表面に敲打痕と剝離痕を残す。
21	186	SD04 第2層	磨削石斧	3.6	5.6	2.7	52	玄武岩	暗灰色	小型石斧の刃部斧。研磨。
21	187	SD04 第1層	磨削石斧	(7.8)	6.5	1.5	-	玄武岩	灰色	石斧の削片を利用。一側面に調整板がみられる。
21	188	SD04 第3層	石鎚	9.8	4.9	1.5	-	砂岩	淡灰色	半分に分離している。自然石の側面を加工。両小刃と側面に抜きを入れる。
21	189	SD04 第3層	石鎚	8.7	7.6	1.7	-	玄武岩	灰青色	扁平な自然石の側面を加工。種掛けの抜きを2ヶ所に入れる。
21	190	SD04 第4層	敲石 (敲石)	(9.7)	8.2	5.3	-	玄武岩	暗灰色	A面と側面3ヶ所に敲打部分がある。全体は研磨されている。
21	191	SD04 第3層	磨石 (磨石)	6.6	6.6	6.1	-	玄武岩	灰色	引き石を利用した。やや角をもった不整円錐形。部分的に剝離痕がある。
21	192	SD04 第1層	円盤	5.5	5.7	0.6	-	砂岩	灰色	不整円形に直取りしている。風化して無い。
21	193	SD04 第2層	石臼丁	(6.5)	4.8	0.9	-	砂岩	暗灰色	気泡が多い石材。約1/2を火く。片刃で、細穴は両方から穿孔。
21	194	SD04 第1層	敲石	(6.4)	4.5	1.0	-	砂粒砂岩	暗灰色	下小口は欠損。A・B両面2面を研磨として利用。側面は研磨面取りしている。
22	195	SD04 第3層	砥石	12.1	9.5	(6.6)	-	砂岩	淡灰色	側面の菱形断続状に敲打成形している。A・B両面、左右両側面を研磨として利用。
22	196	SD04 第4層	砥石	15.6	15.1	6.2	-	砂岩	淡灰色	海産自然貝殻を利用。両小口を直取り。A面の一部を研磨として利用しているが、使い込んでいない。
22	197	SD04 第3層	砥石	9.5	(5.2)	3.7	-	砂粒砂岩	淡灰色	方柱状に直取り。A・B面を研磨として利用。
22	198	SD04 第3層	砥石	6.9	7.0	5.5	-	砂岩	淡灰色	長方形状に直取り。側面の一部を火く。A・B両面、左右両側面を研磨して利用。主として左側面を使用。
22	199	SD04 第1層	砥石	8.3	6.4	5.7	-	砂岩	淡灰色	多面体に直取り。4面を研磨として利用。
23	200	SD04 第3層	研磨器	5.9	3.4	1.4	-	頁岩	黑色	継長の斜方を利用。側面に刃部をつける。
23	201	SD04 第2層	石鎚	2.4	1.6	0.6	5	黑曜石	黑色	先端と一方のかえりを火く。抜きは深い。
23	202	SD04 第2層	石鎚	2.1	1.6	0.6	2.5	黑曜石	黑色	基部の抜きは浅く、剥離調整は丁寧である。

辨別番号遺物番号	出土遺構	材質	高 (既存高)	幅 (既存幅)	厚 (既存厚)	重量(g)	石材	色調	特徴
23 203	SD04 第2層	石鐵	3.2	1.7	0.35	4	黒曜石	黒色	先端と一方のかえりを欠く。縁辺の調整は細かい。
23 204	SD04 第2層下	石鐵	2.5	1.4	0.35	3	サメカイト?	灰黑色	表面は風化。先端と一方のかえりを欠く。B面は一部研磨か。
23 205	SD04 第1層	石鐵	2.4	1.6	0.35	5	黒曜石	黒色	いわゆる三角鉗で、かえりの一方を欠く。
23 206	SD04 第3層	石鐵	2.4	2.2	0.35	2.5	黒曜石	黒色	縦長の削片を利用。三角鉗で、両面共に剥離痕を残している。
23 207	SD04 第3層	石鐵	3.0	2.4	0.7	6	黒曜石	黒色	縦長の削片を利用。一方の側辺と抉り部の加工途中。
23 208	SD04 第1層	石鐵 (木製品)	3.15	2.0	0.55	7.5	黒曜石	淡黑色	細かい気泡が多い。縁辺の加工で形を整えている。抉りはまだない。
24 215	表土 (既存)	熱石 (巻石)	9.3	6.5	-	-	玄武岩	灰色	角理を利用。高さ7.9cm。A面を叩き面として使用。全体に剥離痕が残る。窓打井として利用後、巻石として利用。

第4章 第68次調査 (調査番号8209)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は福岡市早良区有田2丁目17-42に所在し、発掘調査面積76m²である。発掘調査は昭和56年6月8日～6月15日の期間中実施した。

調査地点は、有田・小田部台地の南側にあって、尖頭状に突き出た台地の西側縁辺に位置する。当該地周辺は、中世後半期に存在したと伝えられる「小田辺城」の伝承地域で、旧有田村の西側に在った濠と考えられるホカヤネの存在や、馬場等の地名が通称として遺存している。周辺の聞き取りでは当該地が濠の埋立地であることが判明していたので、今回の発掘調査では、このホカヤネの規模を確認することに重点をおいた。「早良郡志」によれば、このホカヤネの規模は濠幅1間(2m)、長さ90間(160m)を測ると云われていた。

(2) 概要

試掘調査によって、遺構面までの深さが1.8mに達することが予想されていたため、先ず厚さ1.4mの客土を重機で取り除き、更に人力で深さ40cmまで掘り下げた。残土処理は調査地内では処理ができないため、地区外へ搬出した。遺構面は暗灰青色の粘質土である。この面において土壌5基を検出した。又、濠は調査区の北隅で一部を検出したにすぎない。

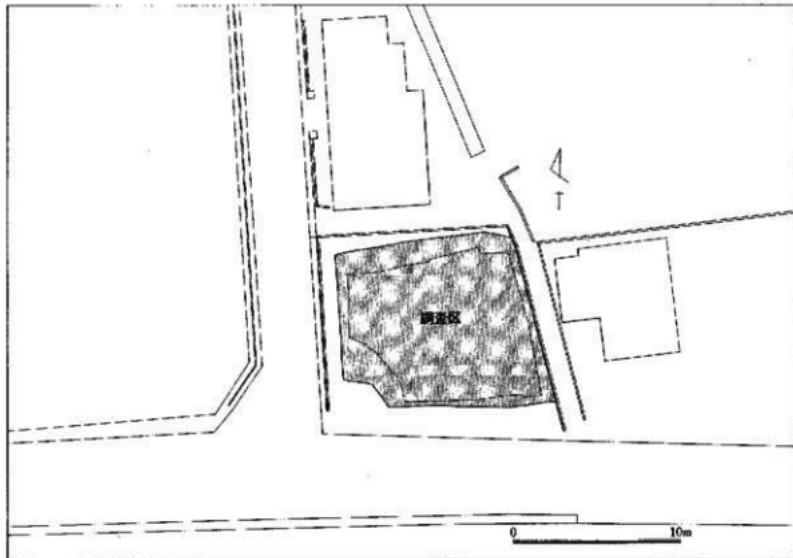


Fig. 26 第68次調査地点位置図 (縮尺1/300)

旧地目は水田であり、水田の耕作土・床土を除去した後に部分的に残土処理として瓦礫等を埋め込んで客土としている。客土の深さは140cmまである。土層は第1・2層が客土のマサ土で、瓦礫等を含んでいる。耕作土を取り除いた後に充填している。第3層以下はほぼ水平堆積しており、第3層は礫混じりの暗褐色粘質土層、第4層は茶褐色～黒色粘質土層、第5層は灰白色～青灰色細砂層、第7層は青灰色砂層、第9層は暗茶褐色砂質土層、第10層は暗褐色粘質土、第11層は淡黄褐色粘質土である。その下の第13層の暗灰青色粘質土が基盤となるので、遺構はいずれもこの面で検出できる。但し、遺構の遺存状態や湧水の浸み出し状況から、この基盤面自体は当時の生活面とは考え難い。

2. 遺構説明

(1) 土 壤 (SK)

土壤5基を検出した。遺物が出土していないため、いずれの土壤も時期が不明であるが、いずれも暗灰青色粘質土層上面から掘り込んでいる。遺存状態は悪い。

SK 01 (Fig. 29) 上面は削平と搅乱を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存高80cm、底面の長さ72cm、幅52cm、深さ11cmを測る。覆土は黒色粘質土と灰色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

SK 02 (Fig. 29) 上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形であるが、底は浅いレンズ状を呈する。長さ85cm、底面の長さ73cm、幅60cm、深さ16cmを測る。覆土は黒色粘質土と灰青色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

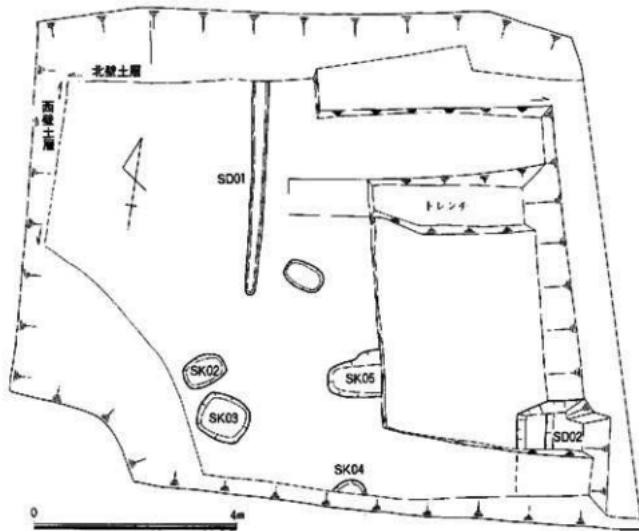


Fig. 27 第68次調査遺構配置図 (縮尺1/100)



第68次調査全景（西から）



調査区全景（北から）

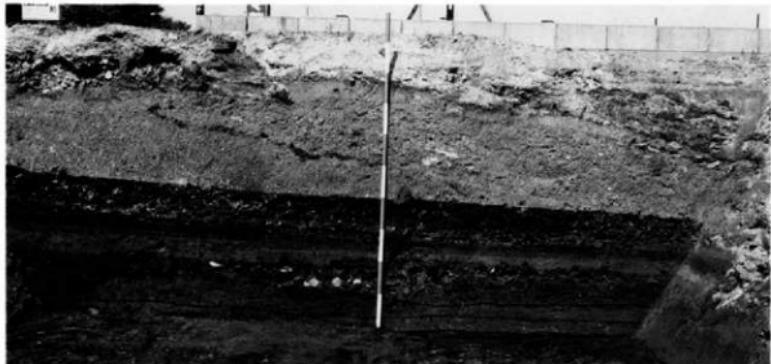
Tab. 5 第68次調査遺構一覧表

(単位: cm)

遺構名	位置 標名	形 態	規 則		長	幅	深	出 土 遺 物	時 期	層 序
			平面形	断面形						
SK01	D 1	土壤	隅丸長方形	逆梯形	80	52	11	なし	不明	
SK02	D 2	土壤	隅丸長方形	逆梯形	85	60	16	なし	不明	
SK03	D 3	土壤	隅丸長方形	逆梯形	104	89	18	なし	不明	
SK04	D 4	土壤	不整円形	逆梯形	63 ⁺ *	26 ⁺ *	18	なし	不明	
SK05		土壤	隅丸長方形	逆梯形	110 ⁺ *	91 ⁺ *	34	なし	不明	
SD01	溝状遺構	-	-	逆梯形	440 ⁺ *	32	5	漆生土器、土師器、磨石	不明	
SD02	溝	-	-	逆梯形	240 ⁺ *	-	110 ⁺ *	漆生土器、土師器、瓦、須恵器、土師質土器、瓦質土器?、中臣陶器、白磁碗、平瓦、丸瓦、石鍋、石鏡	中世	ホカヤ本



調査区北壁の土層状態（南から）



調査区西壁の土層状態（南から）

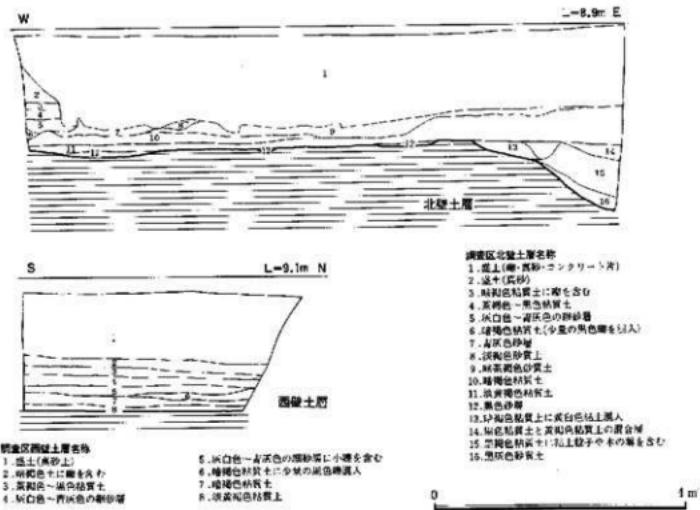


Fig. 28 第68次調査区底壁土層実測図(縮尺1/80)

SK 03 (Fig. 29) 上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状であるが、底は浅いレンズ状を呈する。長さ104cm、底面の長さ90cm、幅89cm、深さ18cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物の出土はない。

SK 04 (Fig. 29) 南側境界地に位置し、全体形は不明である。上面は削平を受けており、平面形は不整円形を呈し、断面形は逆梯形である。現存長63cm、底面の長さ55cm、最大幅26cm、深さ18cmを測る。覆土は黒色粘質土と黒灰色粘質土を主体としている。遺物の出土はない。

SK 05 (Fig. 29) 上面は削平を受けており、且つ、トレンチにより土壤の東側を削られている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。現存長110cm、底面の現存長104cm、最大幅91cm、深さ52cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

(2) 溝 (SD)

調査区の東側において、南北方向の濠の一部を検出した。又、調査区の中央では南北方向の浅い溝状造構を1条検出した。いずれも谷の主軸に沿っており、SD 01は排水的役目を、SD 02は排水及び、中世城の濠としての機能をもったものと考えられる。

SD 01 (Fig. 27) 調査区の中央で、北側の境界に位置しているため4.4mまでの長さを確認するにとどまった。大略南北方向の溝で、断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は32cm、底面の幅は20cmを測る。覆土は暗灰黄色粘質土を主体としている。中世後半以降の造構と考えられる。

SD 02 (Fig. 27) 調査区の東側境界に位置しているため、濠の全体規模を確認できなかった。昭和40年代まではホカヤネとして濠が遺存していたと云われており、SD 02が相当するものと考えられる。現状では長さ7mを確認するにとどまった。大略南北方向の溝で、断面形はV字形を呈するものと考えられる。溝上面の幅は現状で52cm以上を測り、深さは不明である。覆土はヘドロ状の黒色粘質土を

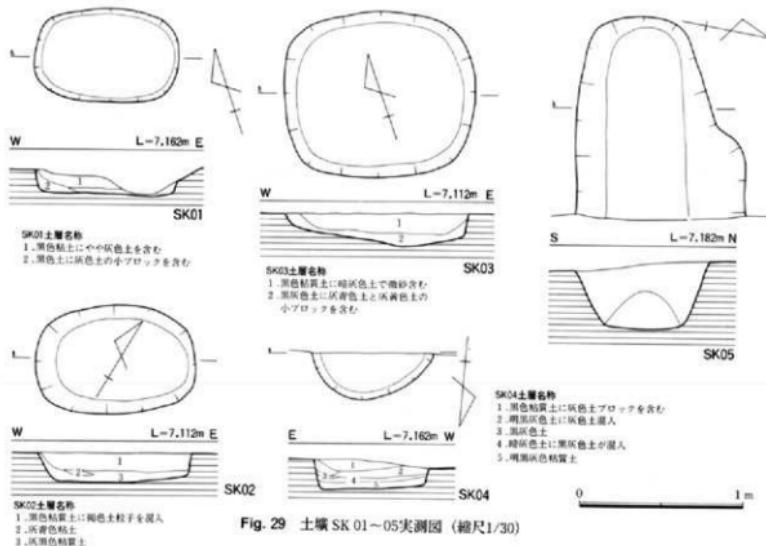
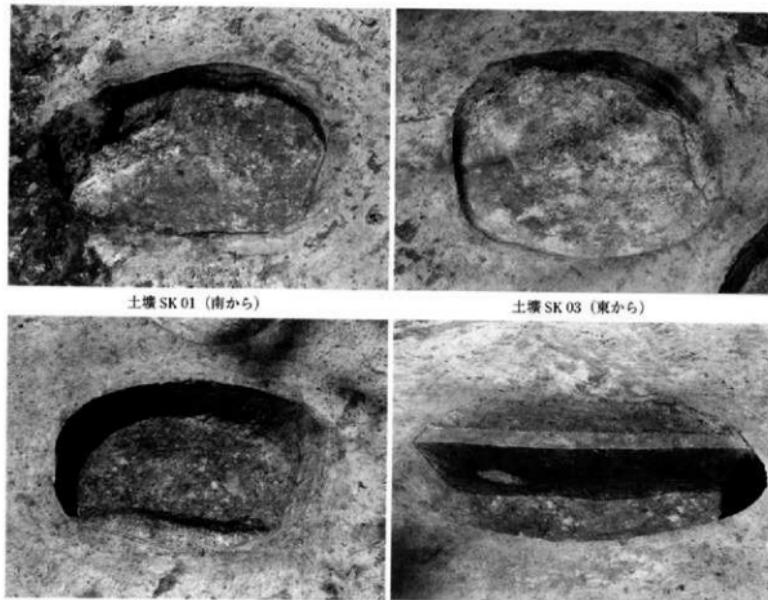


Fig. 29 土壌 SK 01~05 実測図 (縮尺1/30)



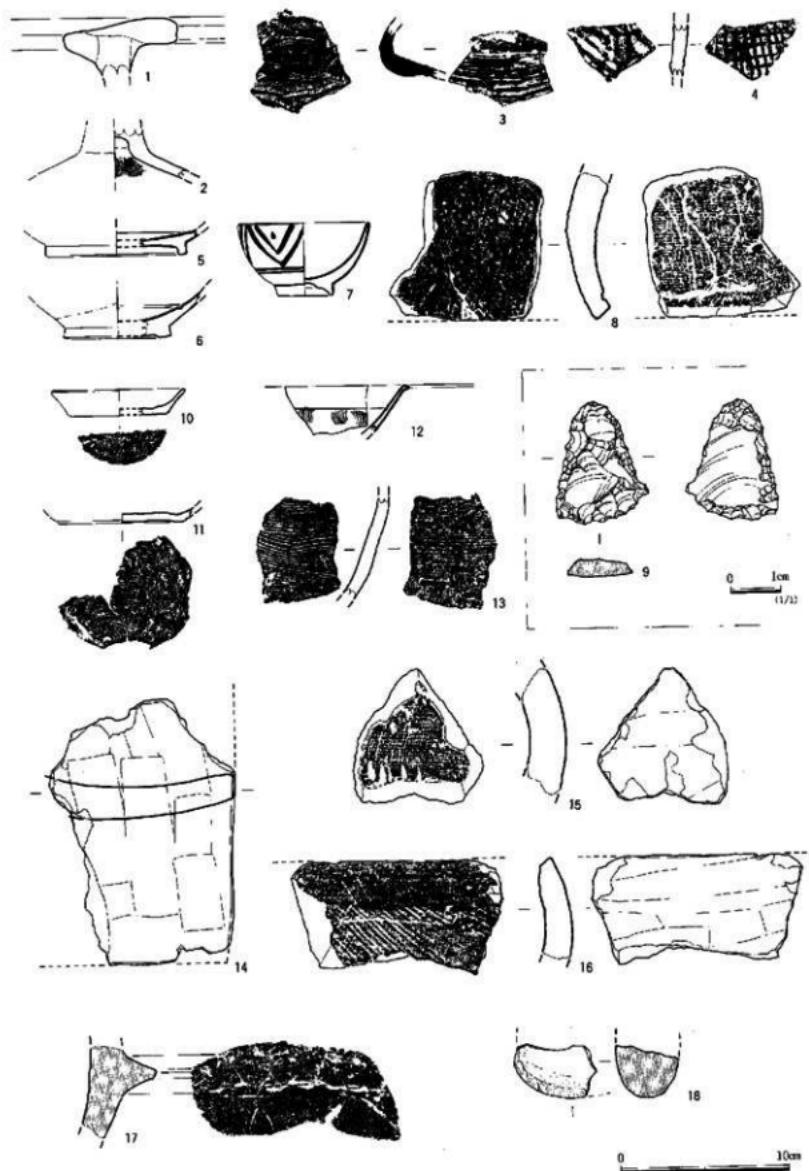
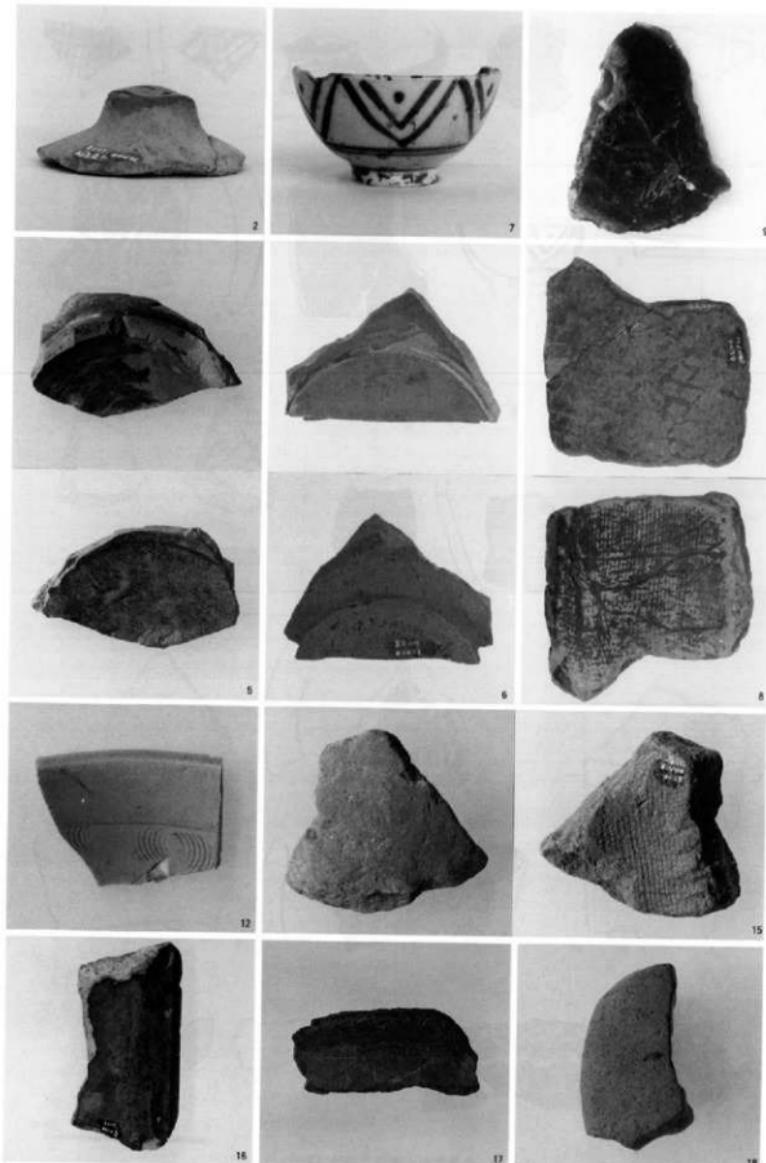


Fig. 30 各遺構出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)



第68次調査出土遺物

※数字は実図の番号に一致する

主体にしており、下層は墨灰色砂質土が堆積している。糸切り底の土師器・瓦質土器・平瓦・丸瓦等が出土した。中世後半期の遺構と考えられる。

3. 遺物説明

(1) 包含層・表土出土遺物 (Fig. 30)

1・5・8は包含層出土、他は表土内より採集した。1は弥生土器で壺の口縁部片、2は土師器高坏の脚部である。5は綠釉陶器の碗片で、畿内又は近江産であろう。6は中国製白磁碗IV類、3・4は須恵器で、4の外面は格子目叩き、内面は青海波の當て具痕がある。赤焼けしている。3は外面に平行叩きを施す。8は丸瓦片で、谷部は布目痕、背部は斜格子目の叩きがある。7は国産の染付碗である。

(2) 溝出土遺物 (Fig. 30)

SD 01出土遺物 (Fig. 18) 18は玄武岩質の円碟であるが、表面が丸くなっている、一部に打撃痕があることから、磨石とした。

SD 02出土遺物 (Fig. 10~17) 10・11は糸切り底の土師器で、10は皿、11は坏である。12は中国製白磁碗のVI-1類、13は瓦質土器の湯釜片である。14~16は瓦片で、14は平瓦、15・16は丸瓦である。15の谷部には布目痕が、16の谷部には糸切り痕がある。背部はヘラナデがみられる。14の谷部も同様にヘラナデがあり、周縁はヘラによる面取り調整される。17は滑石製石鍋片で、突帯は三角状を呈している。外面のケズリはタテ方向のノミ痕が残るが粗い。

4.まとめ

今回の調査地点は戦国時代に存在したと云われる「小田部城」の濠、通称ホカヤネの所在地に位置している。「筑前国續風土記拾遺」によれば、小田部氏の里城とされているが、詳細は不明である。又、一方では有田に「堀ノ内城」があって、これも「鎮西要録」によれば小田部氏の里城とされているが、これらの「小田辺城」と「堀ノ内城」が同一の城を示すのかは不明である。

有田地区では、第77次調査を中心とする27ヶ所の発掘調査によって、薬研掘りの濠跡を多数検出しており、これらの濠跡がどのように構成されるか検討することによって城の規模をはかることができる。第54次調査においても16C~17C初頭の濠を検出している。この濠は「小田部城」の中心と思われる地域に所在し、且つ、有田1丁目の父差点を中心とする周辺の調査において検出した濠とは規模・構造も一致することから第54次調査 SD02はこれらの濠に関連の深い濠と見做せる。「小田部城」の中心は現在の西福岡高校敷地とも云われているところから、台地内部にV字形の濠と土塁を巡らし、且つ、台地の西側にホカヤネを、東側に鬼丸ホゲ等の濠を設けていたものと考えられる。

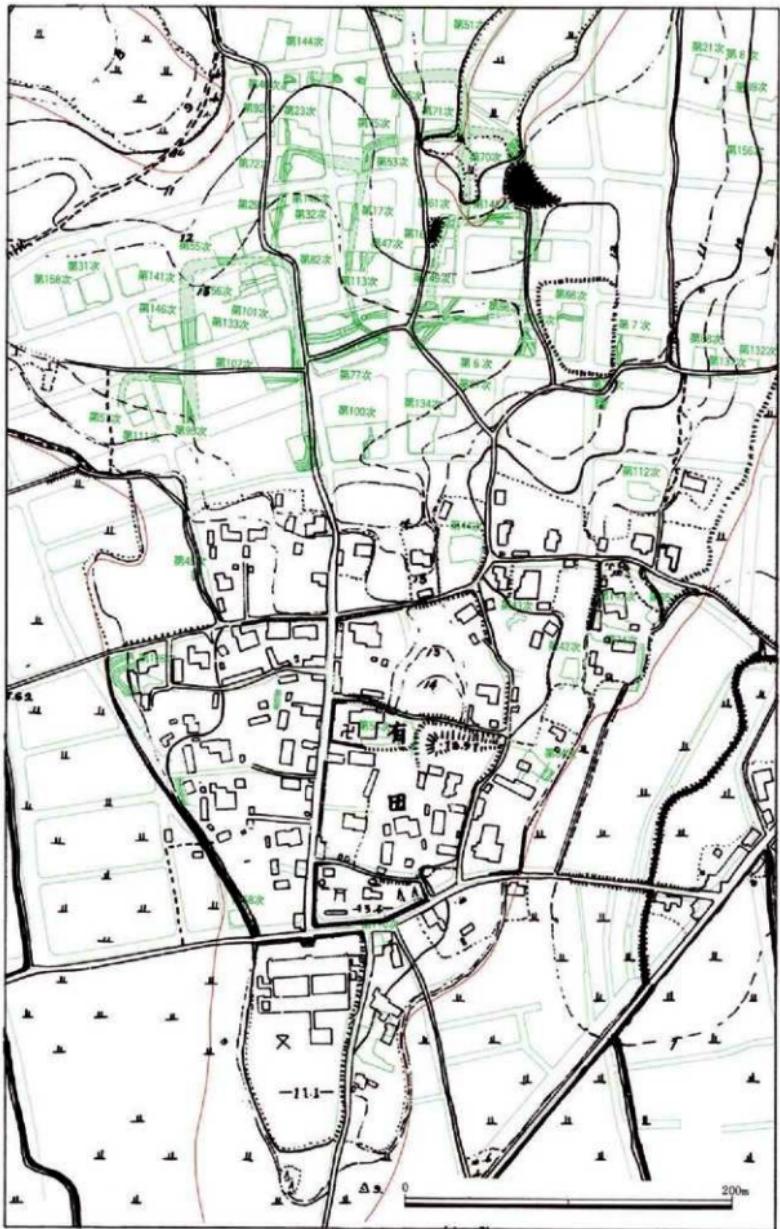


Fig. 31 調査地点及び中世溝配置図 (縮尺1/3,000)

Tab. 6 第68次調査遺物一覧表 (単位: cm)

発掘 場所 番号	出 土 地 点	科 類	器種	口 径	底 径	高 さ	容 量	形態・特徴・質感・文様	質地・色調・基盤等	備 考
30 1	佐賀県	陶器	甕	-	-	(3.4)		口縁部は丁字型口縁(要付)。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。施灰良好。	弥生時代中期
30 2	鹿児島	土器部	高環	-	-	(3.0)		頭部分。内面はり本革皮のコロハケ調査。	胎土は褐色。施灰良好。青茶色。	古墳時代
30 3	長 土	磁器	甕	-	-	-		胎内外面は平行凹凸。口縁部約外周はヨコナカ調査。	胎土に1mm前後の砂を少し含む。施灰良好。褐色。	
30 4	衣 土	磁器	甕	-	-	-		外唇は塔子目焼き、内面は青白釉。	胎土に砂を少し含む。施灰良好。外周は赤褐色。内面は明茶褐色。	赤褐色土器か施灰。
30 5	佐賀県	磁器陶器	碗	-	-	(3.5)		新窯の手形陶白	胎地は薄茶色で細緻。施灰良好。白色釉。	京都小笠江窯?
30 6	鹿 土	白 陶	碗	-	(5.0)	(3.1)		高台部削り出し	裏地は灰白色で粗緻。施灰良好。白色釉。	中世白陶 大宰府白陶
30 7	鹿 土	糸 付	瓶	7.8	(3.2)	4.4		底部は平底化	裏地は白色で粗緻。施灰良好。施灰色。	伊万里窯?
30 10	SD 02	土器部	瓶	7.8	5.6	1.5		手切り口。体部外反。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。施灰良好。褐色。	白
30 11	SD 02	土器部	瓶	-	7.4	(0.9)		承筋張り、体部外反。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。施灰良好。褐色。	中世
30 12	SD 02	白 陶	瓶	-	-	(2.6)		口縁部削り返り。内面に新筋張。	胎地は白灰色で精緻。施灰良好。活潑形。淡緑色。	中国白陶 大宰府白 1種
30 13	SD 02	瓦 土器	湯盆	-	-	-		内外面はヨコハケ調査。	胎土に1~3mmの砂を含む。施灰良好。淡緑色。	

Tab. 7 第68次調査丸瓦計測表 (単位: cm)

発掘 場所 番号	遺物 番号	出 土 地 点	長 さ		幅		高 さ	弧 度	色 調	胎 土	焼成	形態・製作方法	備 考
			玉縁部	開口部	背筋部	後端部							
30 8		佐賀県	-	-	-	-	灰色	1~3mmの 砂を含む。 やや乾				背面は呪文文の厚き表。胎土はやや粗い。 有目表が残る。	
30 15	SD 02	鹿 内	-	-	-	-	-	1~3mmの 砂を含む。	灰			背面は板状のものによるナダ。胎土は有目表。	
30 16	SD 02	-	-	-	-	-	黑灰色	1~3mmの 砂を少しあ る。	良好			背面は板状のものによるタテ方向のナダ。胎 土は細かい有目表と前面内の経筋の痕跡 が残る。全体に施灰が施される。	

Tab. 8 第68次調査平瓦計測表 (単位: cm)

発掘 場所 番号	遺物 番号	出 土 地 点	長 さ		幅		高 さ	弧 度	色 調	胎 土	焼成	形態・製作方法	備 考
			玉縁部	開口部	背筋部	後端部							
30 14	SD 02	鹿 内	(15.9)	(1.0)	-	-	青灰色	1~3mmの 砂を含む。	良好			背面はナダ。谷部は横的2.5cmの板状のもの によるタテ方向のナダ。	

Tab. 9 第68次調査石製品一覧表 (単位: cm)

発掘 場所 番号	出 土 地 点	器 種	高 さ (厘米)	幅 (厘米)	幅 (厘米)	厚 (厘米)	石 材	色 調	備 考
30 9	佐賀県	石鏡	2.4	1.8	0.4	-	麻塙石	黒色	漆光面を欠く。
30 17	SD 02 開門	石鏡	(5.5)	(3.2)	-	-	磨石	緑灰色	高さ4.1cm焼成。
30 18	SD 01	磨ぐ	(4.9)	(0.1)	3.8	-	玄武岩	淡灰褐色	板片。

第5章 第69次調査 (調査番号8210)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は福岡市早良区有田1丁目13-10に所在し、発掘調査面積は202m²である。

有田地区の最高所の平坦地は標高約15mを測る。当該地は平坦地から北東方向に伸びる舌状尾根のほぼ中央に位置している。周辺では第8・21・81次調査が実施されており、弥生時代から中世までの遺構が発見されている。

今回の発掘調査は個人専用住宅建設に伴うもので、敷地内には既設の建物等が存在しているため調査中の残土処理や騒音等が問題となった。

(2) 概要

台地の傾斜面に位置するため遺構面は2回に亘って整地が行われている。約20~40cmの表土を除去した後に検出した黒色粘質土の上面を第1面とした。この黒色粘質土は整地層で、弥生時代から平安時代までの土器を含んでいる。第2面は厚さ15~18cmの黒色粘質土の包含層を除去した後に検出する面で、シルト質の軟弱な地質である。特に雨に弱く、表面が流出する傾向がある。遺構は第1面では溝・井戸・土壙、第2面では掘立柱建物等を検出した。



Fig. 32 第69次調査地点位置図 (縮尺1/300)



第69次調査第1面 全景（東から）



調査区第2面 全景（東から）

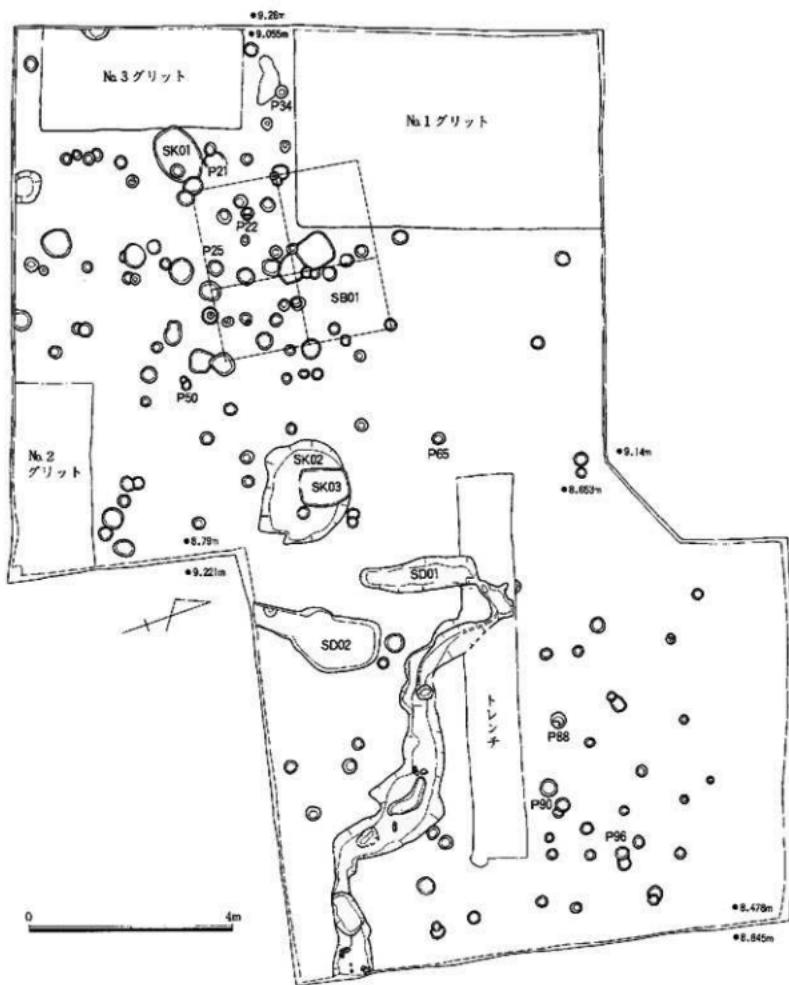


Fig. 33 第69次調査第1面遺構配置図 (縮尺1/100)

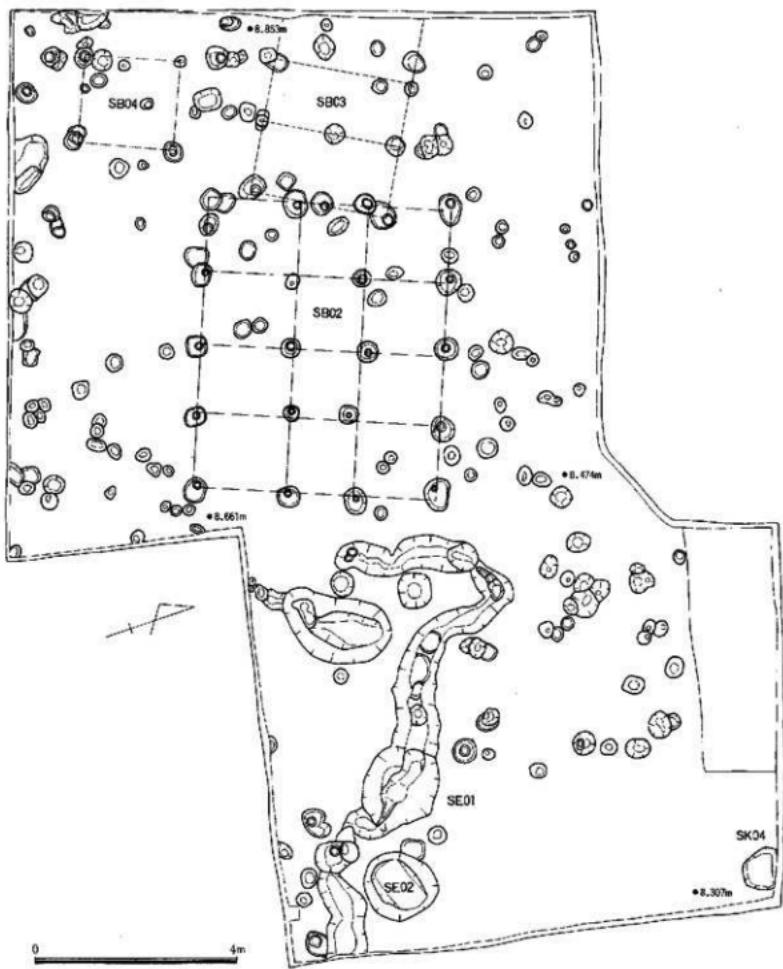


Fig. 34 第69次調査第2面造構配置図 (縮尺1/100)

2. 遺構説明

(1) 土 壤 (SK)

形状が不整形な土壙4基を検出した。SK01～03は第1面の黒色粘質土層の上面から掘り込まれており、SK04は第2面の黄灰色シルト土層に掘り込まれている。

SK 01 (Fig. 35) 第1面で検出した。土壙の上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長さ120cm、底面の長さ105cm、幅85cm、深さ22cmを測る。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器がある。

SK 02 (Fig. 35) 第1面で検出した。上面は削平を受け、土壙 SK 03に切られている。平面形は不整形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長210cm、底面の長さ180cm、幅175cm、深さ13cmを測る。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器がある。

SK 03 (Fig. 35) 第1面で検出した。土壙の上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長さ100cm、底面の長さ95cm、幅75cm、深さ25cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。遺物の出土はない。

SK 04 (Fig. 35) 第2面で検出した。土壙の上面は削平を受けている。平面形は不整円形を呈し、断面形は箱形である。現存長67cm、底面の現存長50cm、幅85cm、深さ91cmを測る。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。井戸とも考えられる。出土遺物はない。

(2) 井 戸 (SE)

第2面において2基検出した。井戸 SE 01は出土遺物の内容が中世遺物を主体にしていることから第1面から掘り込まれていた可能性が強い。

SE 01 (Fig. 35) 調査区の東側に位置している。溝 SD 01と切り合い、形状が著しく変形している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整梢円形を、断面形は逆梯形を呈している。井戸上面での最大径は1.7m、深さは1.06mを測る。井戸底部は浅い階鉢状の掘り込みを有している。井戸の覆土は黒褐色粘質土を主体としており、井戸覆土から土師器、須恵器、中国白磁、陶器等が出土している。

SE 02 (Fig. 35) 調査区の東側の SE 01の東隣りに位置している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整円形を、底部は隅丸長方形で、断面形は袋状を呈している。井戸上面での最大径は1.4m、深さは0.98mを測る。井戸の中程の壁は袋部を作っている。井戸の覆土は黒色粘質土を主体としている。貯藏穴もしくは落し穴の可能性を残している。

(3) 挖立柱建物 (SB)

第1面では、調査区の東側と西側にPitの集中地帯があり、西側においてSB 01を検出した。第2面では全体にPitが多く、SB 02～04の3棟の建物を検出した。第1面は先述したように黒色粘質土の上面を遺構面とするためPitの検出は困難を極めた。挖立柱建物の検出については疎漏が多いものと考えられる。

SB 01 (Fig. 36) 第1面で検出した。No. 1のグリットを設定したため一部の柱穴を削平し、全形は不明である。中央に束柱が存在する所以梁行2間、桁行2間の規模をもった総柱の挖立柱建物である。主軸方位をN82°Wに置き、柱間は梁間5.7尺、桁間5.8尺を測る。掘方径36～54cm、深さ12～38cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。

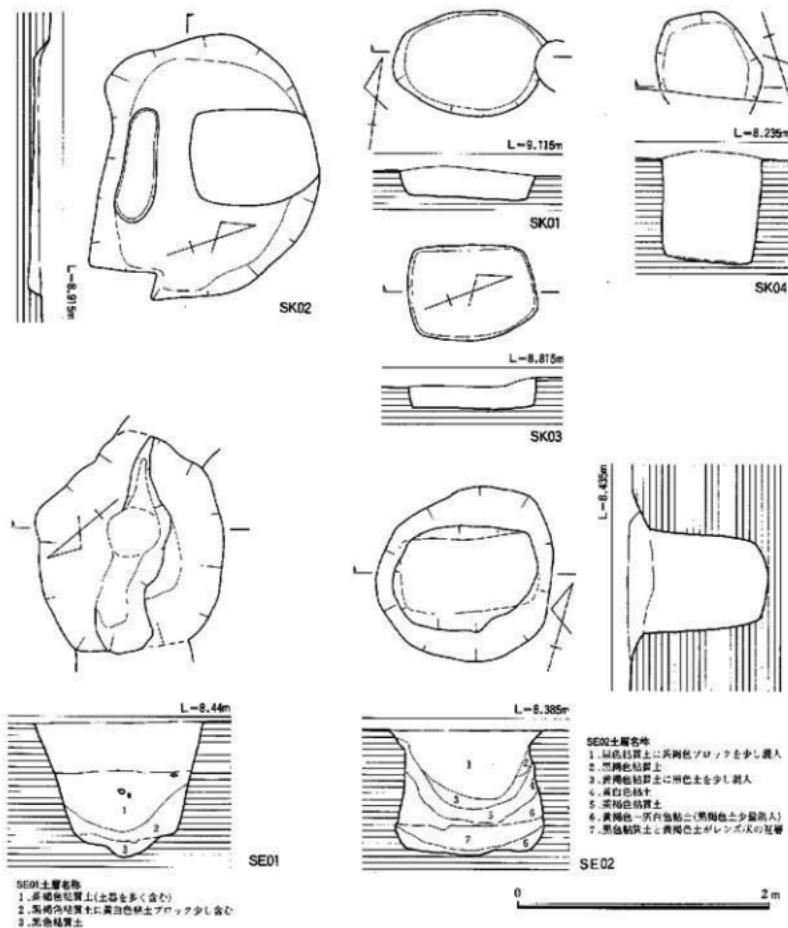


Fig. 35 土壌 SK 01~04、井戸 SE01・02実測図（縮尺1/40）

SB 02 (Fig. 36) SB 03より後出する。梁行3間、桁行4間の規模をもった総柱の掘立柱建物である。主軸方位をN 30° Wに置き、柱間は梁間5.3尺、桁間4.9尺を測る。掘方径30~66cm、深さ28~50cmを測る。

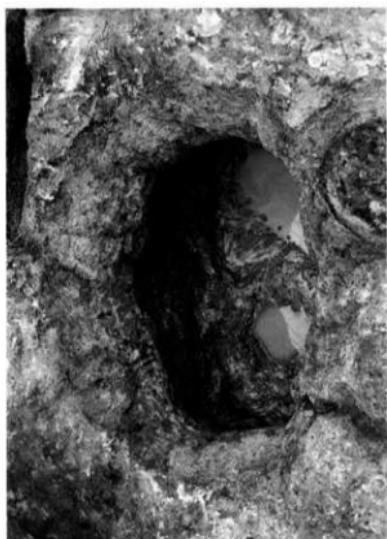
SB 03 (Fig. 36) SB 02から柱穴が切られており、SB 02に先行する。西側境界地に位置するため全体形は不明である。梁行2間、桁行2間以上の規模をもった掘立柱建物が考えられる。主軸方位をN 67° Wに置き、柱間は梁間4.5尺、桁間4.5尺を測る。掘方径40~57cm、深さ13~23cmを測る。



土壁SK04 (北から)



井戸SK01 (東から)



井戸SE02 実験状面 (西から)



井戸SE02 土壁状面 (南から)

Tab. 10 挖立柱建物一覧表

1 尺=30.3cm

規格	横 行 (m)		縦 行 (m)		方 位	矢量積 (cm ²)	柱 穴 状 態				地 上 面 物	備 考
	実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			PW 穴	深さ	反 径	幅 領		
SB 01 2×2	333(11.1)	185(5.6)	345(11.4)	180(5.9)	N82°W	12.36	2	12~38	36~54	35~62	海生土苔類、藻、土苔類高年、葉、瓦束器、サスエイト、灰岩	
SB 02 3×4	395(9.6)	185(5.1)	485(16)	185(5.1)	N47°W	28.85	20	28~59	30~66	30~52	なし	
SB 03 2×2	216(8.9)	146(4.8)	260(9.2)	186(5.1)	N30°E	7.56	8	13~23	40~57	35~48	二輪器	
SB 04 1×1	195(6.4)	195(6.4)	175(5.9)	175(5.9)	N65°W	3.41	4	14~23	38~40	35~37	なし	

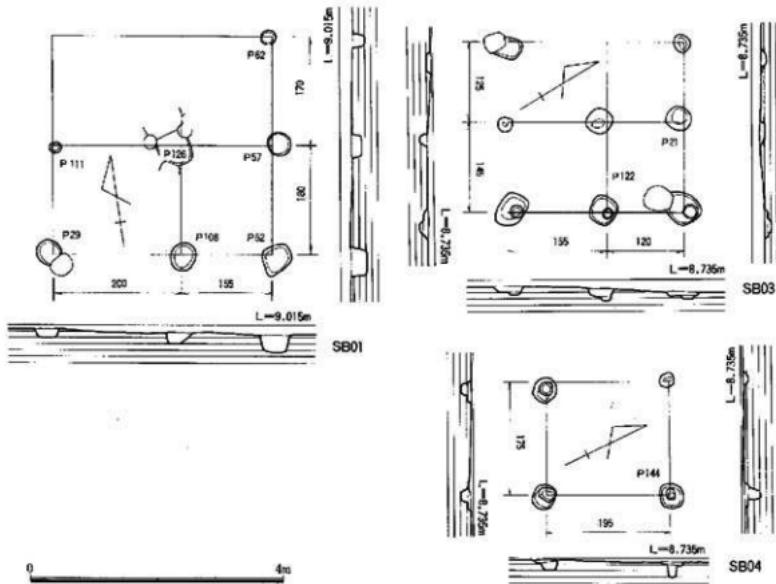


Fig. 36 挖立柱建物 SB 01・03・04 施設図 (縮尺1/80)

SB 04 (Fig. 36) 梁行 1 間、桁行 1 間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位を N65°W に懸き、柱間は梁間 5.8 尺、桁間 6.4 尺を測る。掘方径 38~40cm、深さ 14~23cm を測る。

(4) 溝 (SD)

調査区の第 1 面において南北方向、及び東西方向に蛇行する溝を 2 条検出した。SD 01 は東側の斜面方向に主軸をおいており、自然排水的な役目をもっていたものと考えられる。

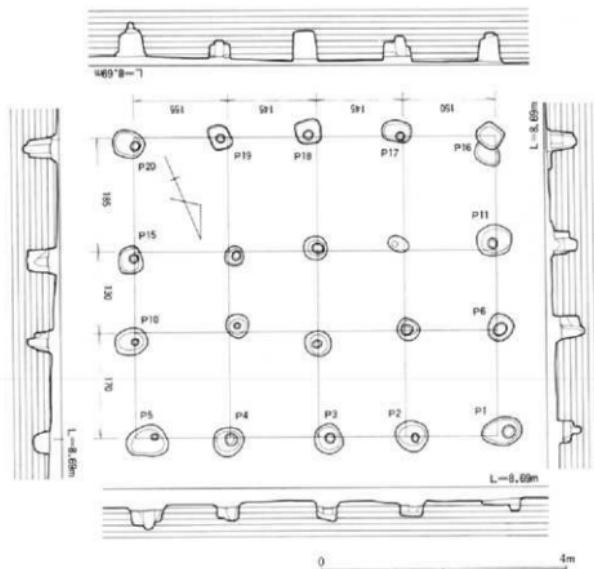
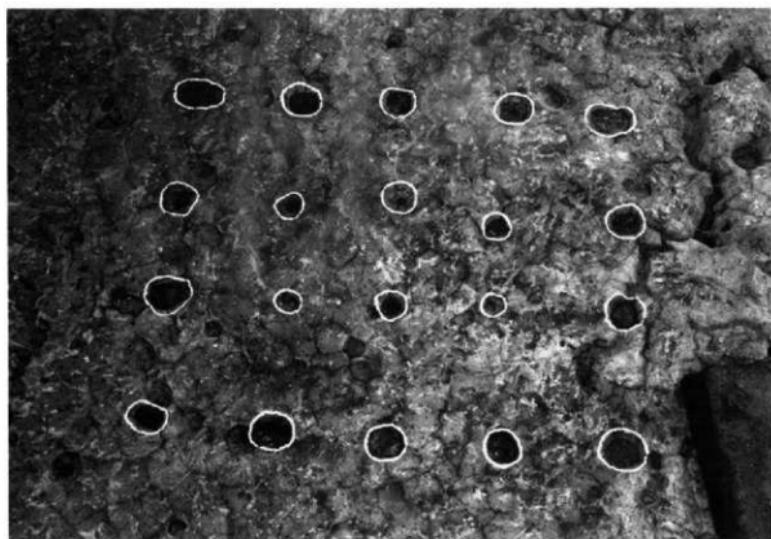
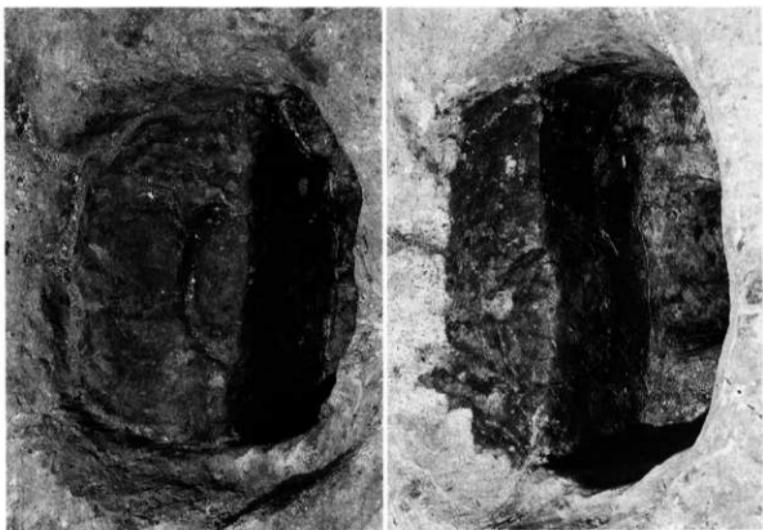


Fig. 37 挖立柱建物 SB 02実測図 (縮尺1/80)

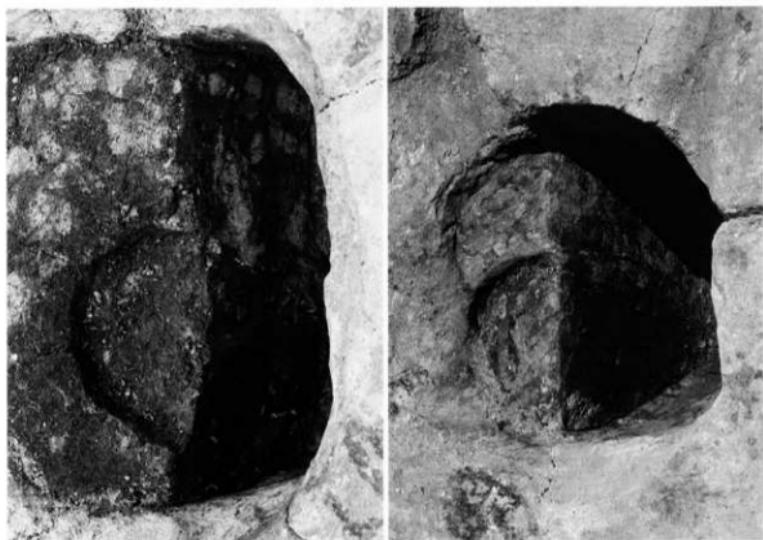


掘立柱建物 SB 02 (南から)



据立柱建物SB02-3の状態（西から）

据立柱建物SB02-2の状態（西から）



据立柱建物SB02-4の状態（北から）

据立柱建物SB02-6の状態（西から）



獨立柱墳物 SB 02-21 の状態（西から）



獨立柱墳物 SB 02-10 の状態（東から）



構SD 01・02（東から）



構SD 02（東から）



捲 S D 0-1 (北から)



捲 S D 0-1 猿洋出土状態 (南から)



捲 S D 0-1 土壌状態 (西から)



捲 S D 0-1 東側の状態 (西から)

SD 01 (Fig. 33) 調査区の東側に位置しており、先端は境界外にある。井戸 SE 01と切り合っている。長さは約12.5mを確認するにとどまった。東側に蛇行しながら流下する溝で、溝の断面形は不整形で一定していない。溝上面の幅は最大で150cm、最狭部で22cm、深さ90cmを測る。覆土は黒色粘質土、又は茶褐色粘質土を主体としている。中世の遺構であるが、遺物には鉄滓及び、製鉄関連の土製品が出土しており、製鉄関係遺構とも考えられる。

SD 02 (Fig. 33) 調査区の南側境界に位置しているため全体形、全長は不明である。現存長3mを測る。大略南北方向の溝で、断面形は逆梯形を呈する。溝上面の最大幅は250cm、深さ90cmを測る。覆土は黒色粘質土、又は茶褐色粘質土を主体としており、中世の遺構と考えられる。

3. 遺物説明

(1) 井戸出土遺物 (Fig. 38)

SE 01出土遺物 (1・2) 1は中国製の玉縁白磁碗Ⅱ類である。2は土師器の二重口縁壺片である。

(2) 挖立柱建物出土遺物 (Fig. 38)

SB 01出土遺物 (3~5) 3・4はP5、5はP1出土である。4・5は古墳時代の土師器で、4は壺、5は高坏の脚部片である。4は内弯する口縁部で、5は5世紀代に比定できる。

(3) 溝出土遺物 (Fig. 38)

SD 01出土遺物 (6~22) 6は弥生時代終末期の壺、7は古墳時代土師器の高坏、8~13は須恵器で、8・9は壺蓋、10・12は皿、11・13は壺である。15は中国製青磁碗、14は中国製の玉縁白磁碗、16は明の染付碗、17は土師質土器の捏鉢、18は糸切り痕をもつ平瓦、19は製鉄関係遺物の土製品、20は自然石を利用した石錘、21・22は砥石である。

SD 02出土遺物 (23~28) 23は古墳時代の土師器壺、24は弥生土器の壺、27は弥生時代終末期の壺である。25・26・28は須恵器で、25は壺蓋、26は壺、28は壺である。

(4) Pit出土遺物 (Fig. 39)

29はSP50、30はSP65、31はSP90、32はSP12、33はSP88、34はSP22、35はSP25、36はSP134、37はSP96出土である。

29は弥生時代の高坏、又は壺口縁部片である。30~33は古墳時代の土師器で、30は二重口縁壺、31は長頸壺、32は器台である。33は高坏である。34・35は須恵器壺片、36は越州窯系青磁碗、37は中国製の白磁皿である。

(5) 包含層出土遺物 (Fig. 40・41)

38~45は弥生土器で、38~41は壺、42は器台、43・44は壺、45は終末期の壺である。46~51は古墳時代の土師器で、46~50は高坏、51は器台である。52~60は須恵器で、52・53は古墳時代の壺身、54は壺蓋、56・57は壺、55・58は高坏で、59・60は壺である。61・62は土師器の瓶の把手であるが、61の内面は細めの青海波状の当て具痕がある。63は移動式カマドの鉄にあたる。64は古代の土師器壺、65は中国製青磁皿、66は中国製白磁碗のIV類である。石器は67が磨石、68が扁平片刃石斧である。

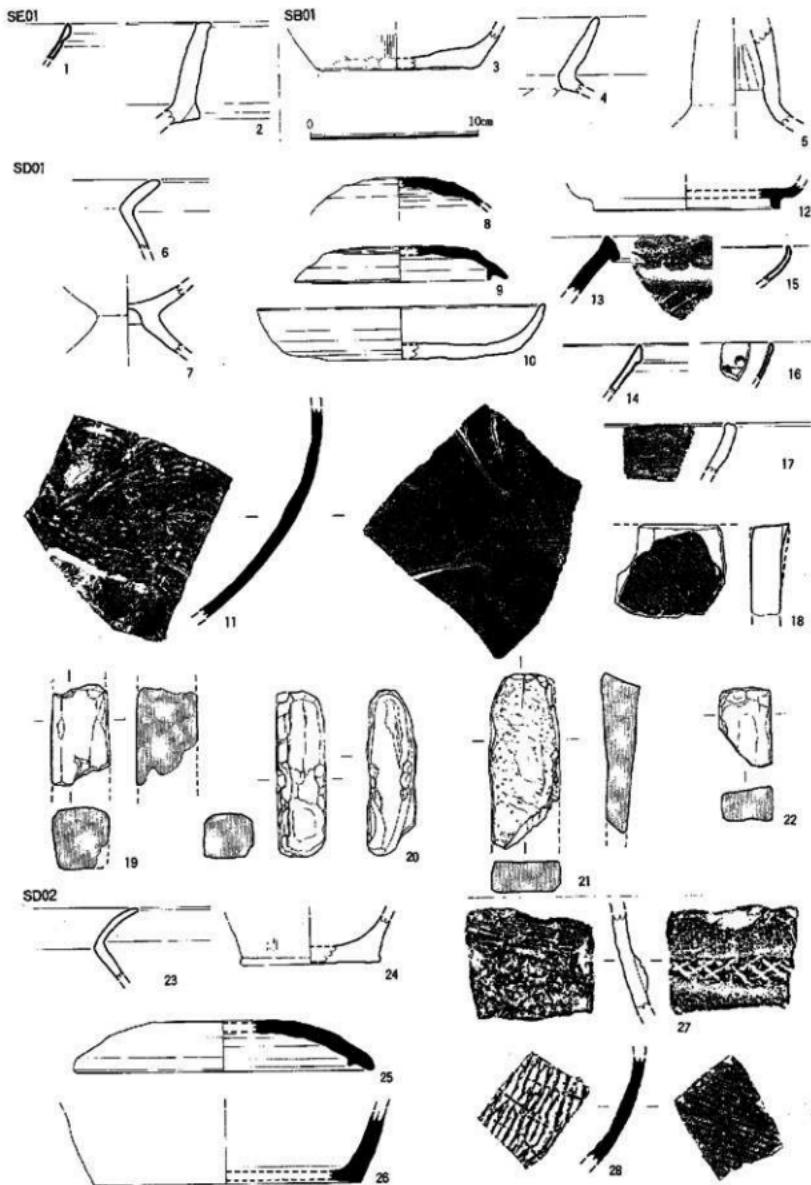


Fig. 38 各遺構出土遺物実測図 (縮尺1/3)

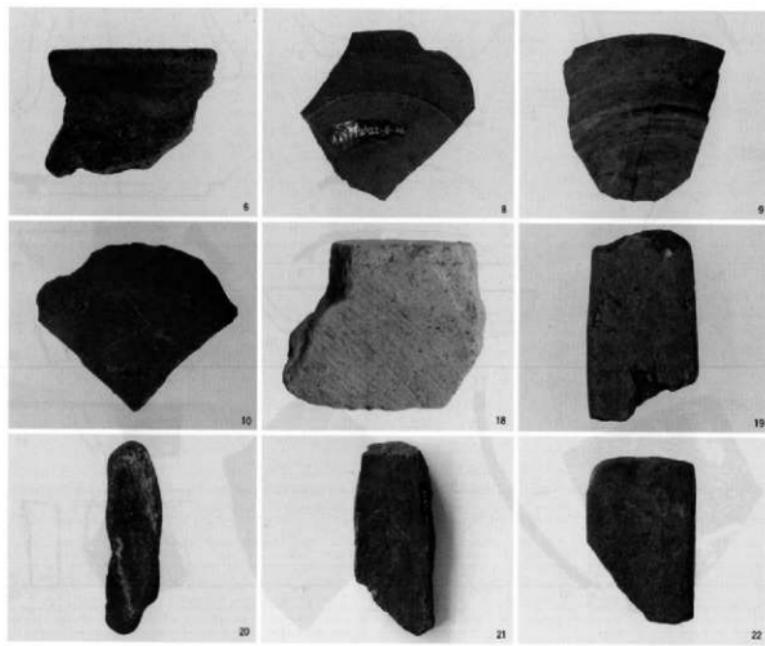


Fig. 39 Pit 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

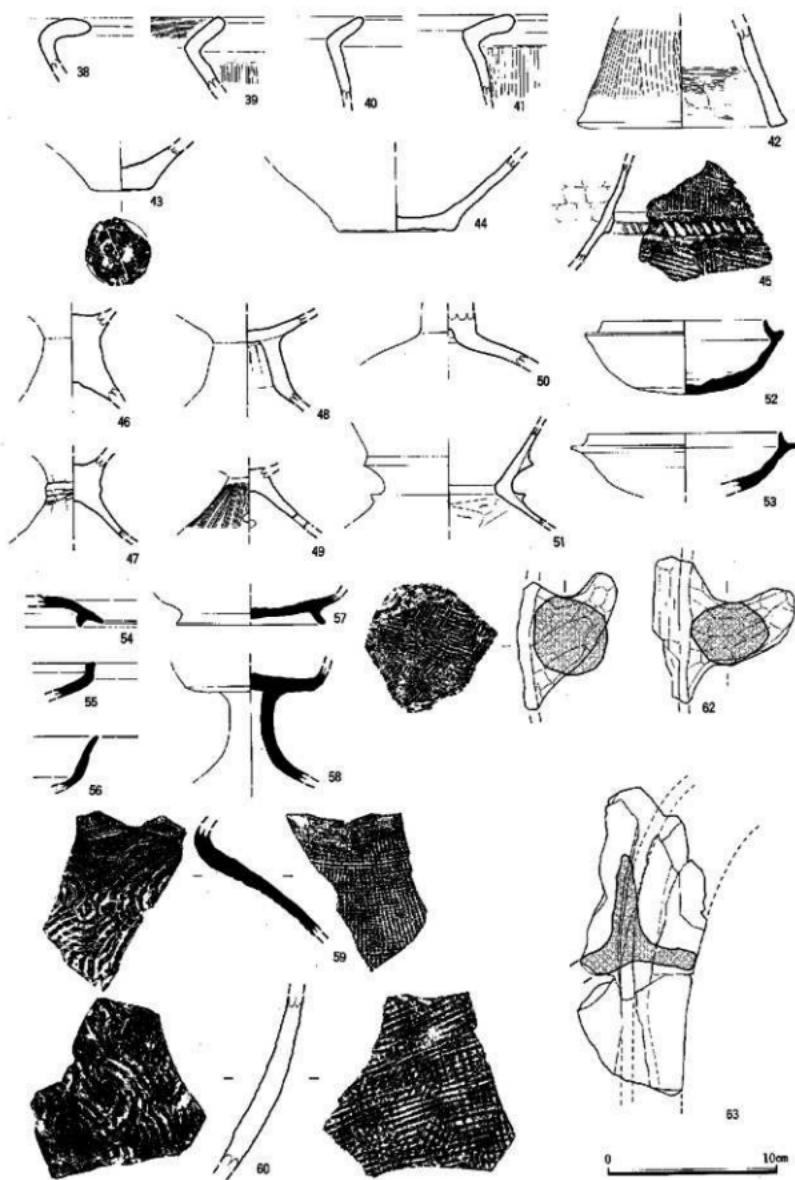


Fig. 40 包含層出土遺物實測圖① (縮尺1/3)

(6) グリット出土遺物 (Fig. 42・43)

黒色粘質土の包含層（整地層）であることから遺構面の確認が困難であったため、土層観察のためにグリットを3ヶ所設定した。これらのグリットから出土した遺物である。

No. 1 グリット出土遺物 (69~97) 黒色粘質土の包含層は1~3層に大略分けられることができるため遺物を黒色土第①~③層に分けて取り揚げた。

黒色土第①層出土遺物には69~72が含まれる。69は8世紀中頃の須恵器壺、70は土師器ヘラ切り底の皿、71は須恵器壺、72は須恵器壺である。

黒色土第②層出土遺物には73~86が含まれる。73は弥生土器の壺、74~84は古墳時代の土師器である。81~82は二重口縁壺で、頸部外面にヘラ掛け、又は貝殻腹縁の羽状文を施している。83~84は壺で、84の胴部外面にはヨコ方向のハケ調整がある。74は小型丸底壺、75は鉢、76は脚付鉢、77~78は鉢、又は碗、79は器台、80は高壺である。80の脚部には、径1.1cmの穿孔が3個あけられる。85は須恵器壺で、脚足は高い。86は玄武岩製石斧の未製品であるが表面は風化している。

黒色土第③層出土遺物には87~97が含まれる。87~94は古墳時代の土師器である。87~88は壺、89は高壺、90~92は壺で、胴部内面はヘラケズリ調整である。93は二重口縁壺、94は脚付の鉢である。95は須恵器の壺蓋で、外面天井部にヘラ記号を付いている。96は弥生時代終りの器台、97は弥生時代中期初めの壺である。

No. 2 グリット出土遺物 (98~100) 調査では黒色土上層出土として遺物を取り揚げたが、これらはグリット No. 1 の黒色土第①層に相当する層から出土したものと考えたい。

遺物は98~100を含み、99は8~9世紀代の須恵器壺、98は土師器脚付碗、100は古墳時代の土師器壺で、直立した口縁部は内弯している。

No. 3 グリット出土遺物 (101) 黒色土第③層から出土した。101は弥生時代中期の壺形土器である。

(7) 遺構面出土遺物 (Fig. 44)

102~104は古墳時代の土師器で、102は器台、103は高壺、104は壺である。105~109・113は須恵器で、105は擬宝珠形のつまみをつけた蓋、106・107は壺身、108・109は壺で、113は壺である。109は赤焼け土器で、高台は底部と体部の境に貼付けている。110は黒色土器の碗、111は土師器の高台付碗、112は壺の把手である。114は背面に斜格子叩きをもった平瓦である。

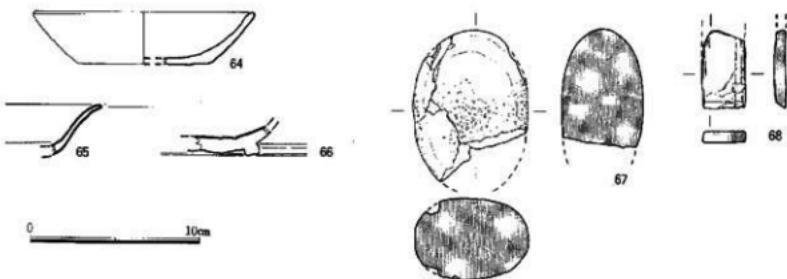
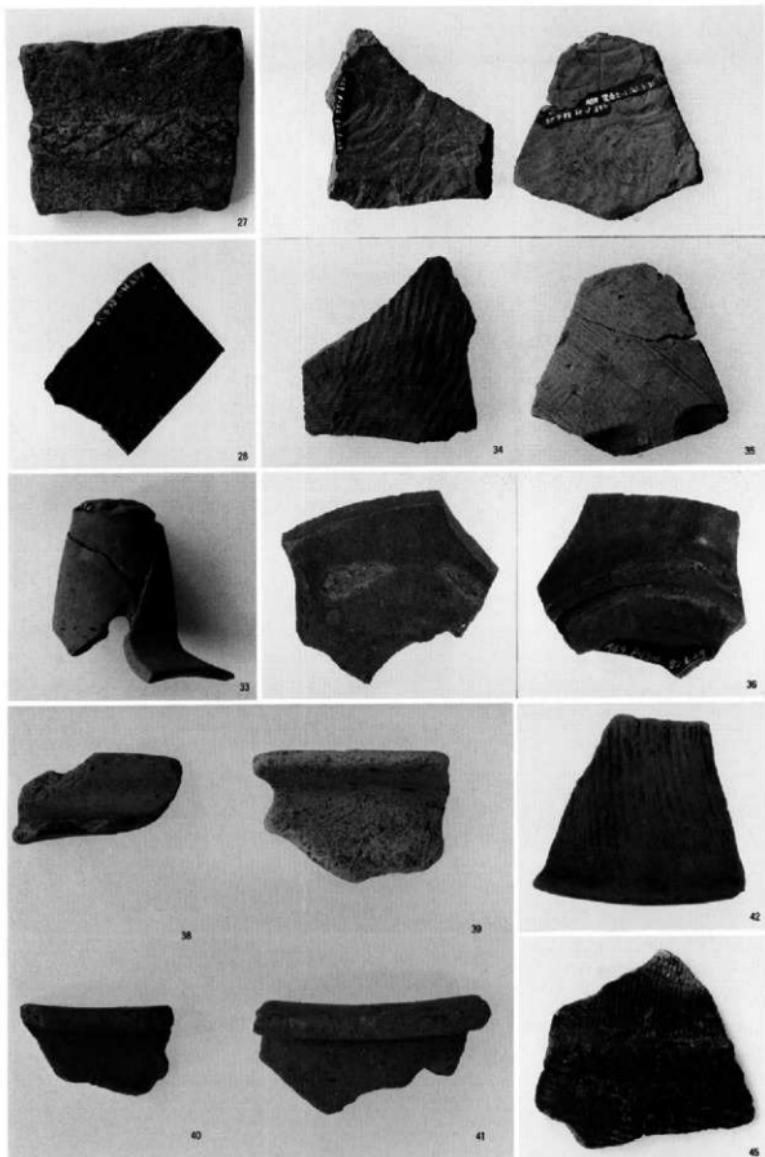
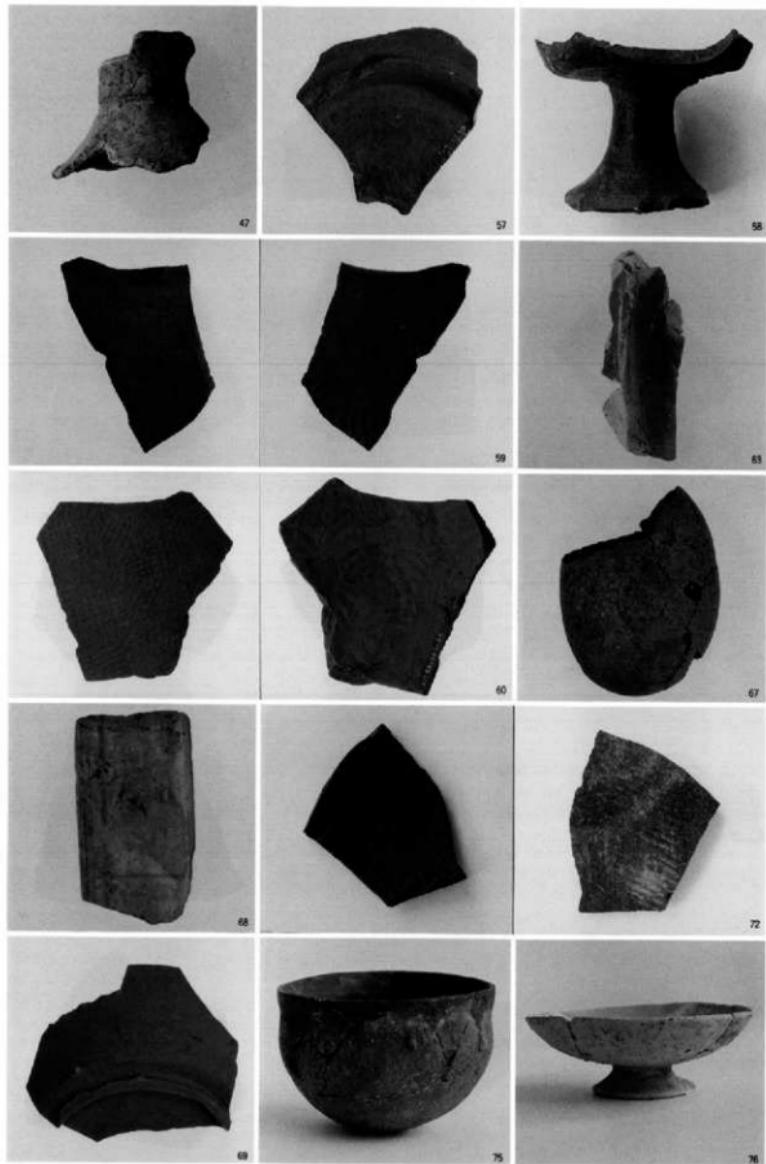


Fig. 41 包含層出土遺物実測図② (縮尺1/3)



溝 SD02、Pit. 包含層出土遺物

番号は実測図の番号に一致する



包含層、NO.1グリット出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

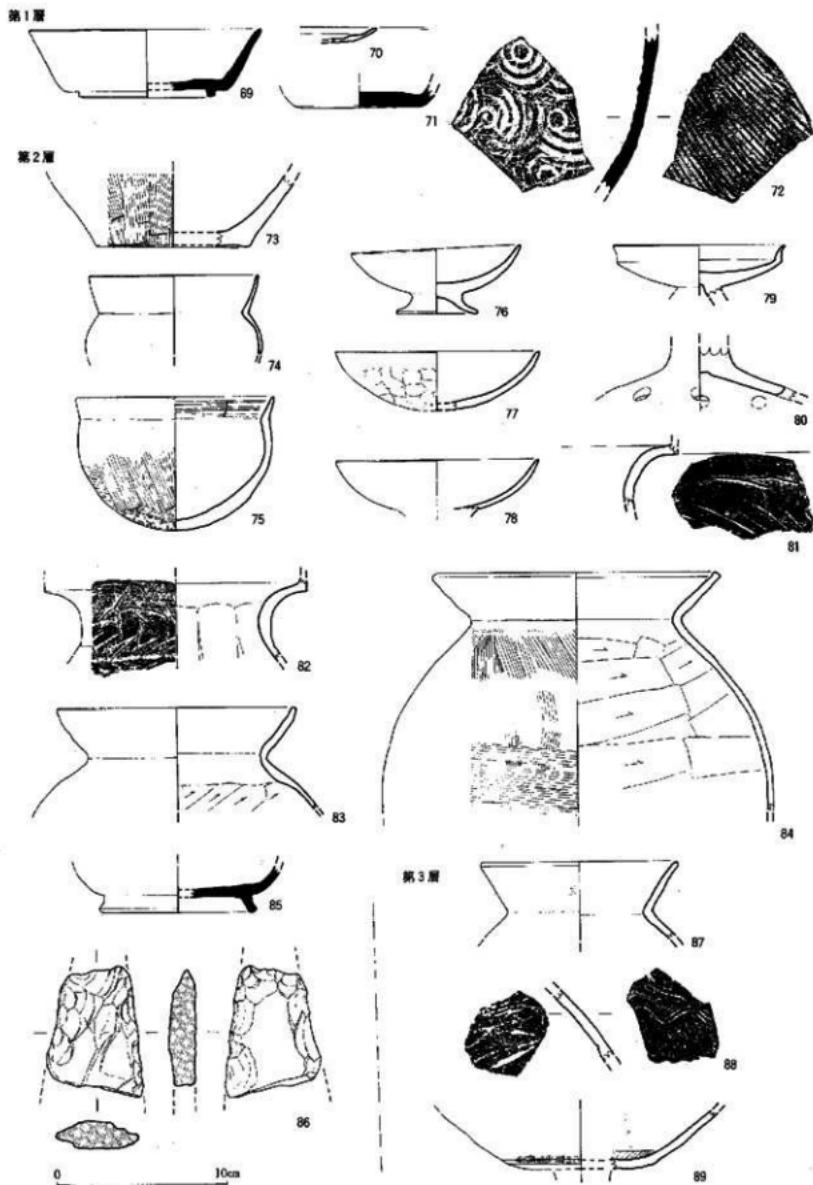
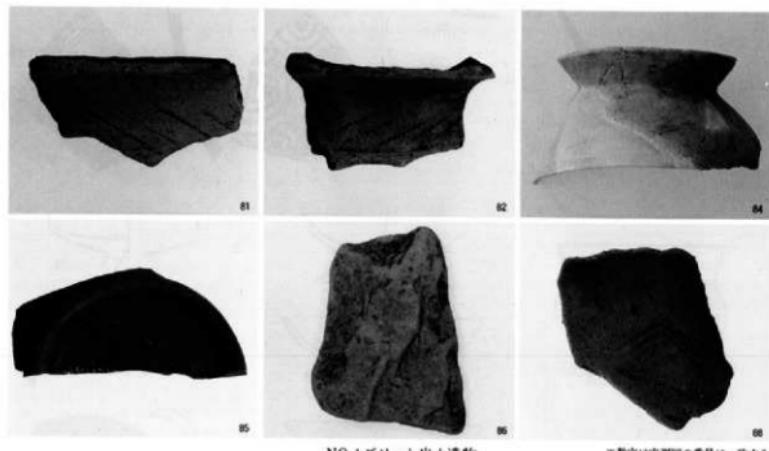


Fig. 42 No. 1グリット出土遺物実測図 (縮尺1/3)



NO.1グリット出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

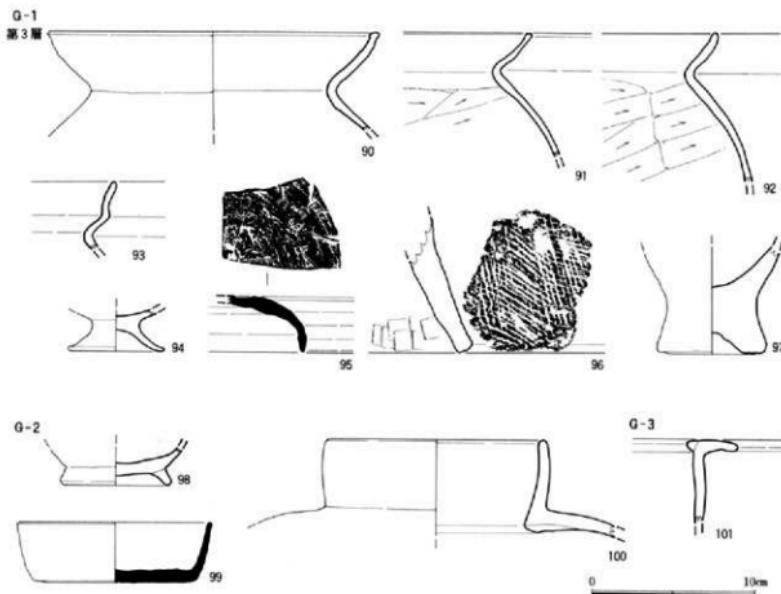


Fig. 43 No. 1 ~ 3グリット出土遺物実測図 (縮尺1/3)

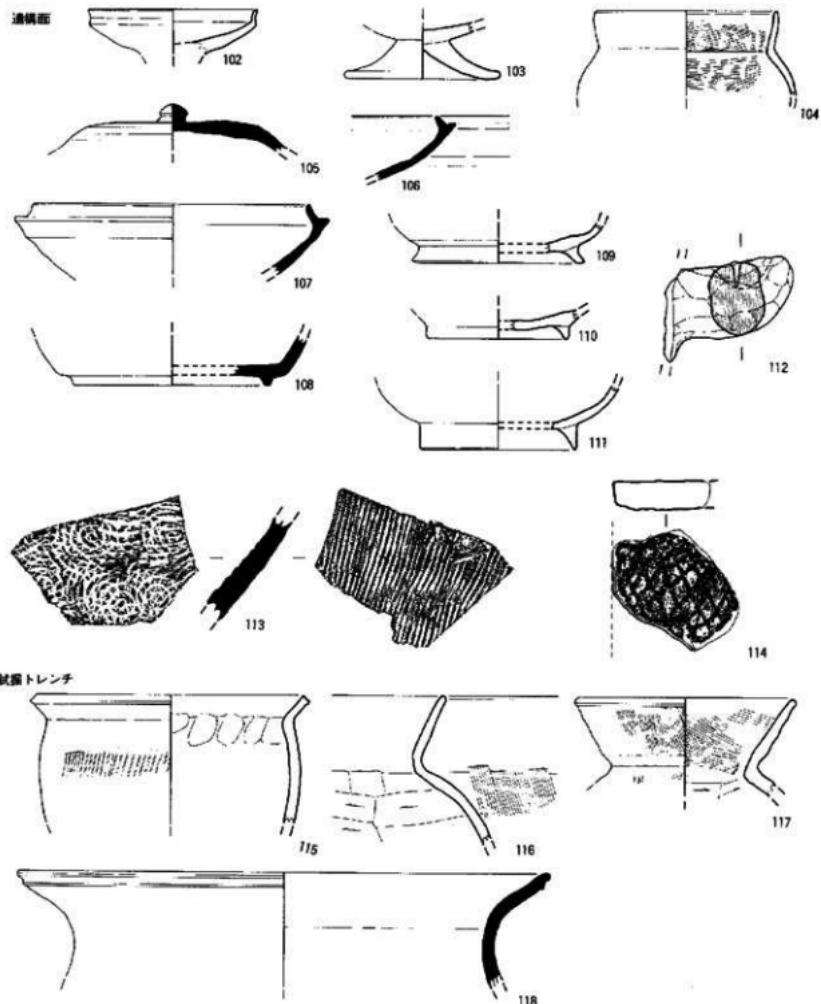
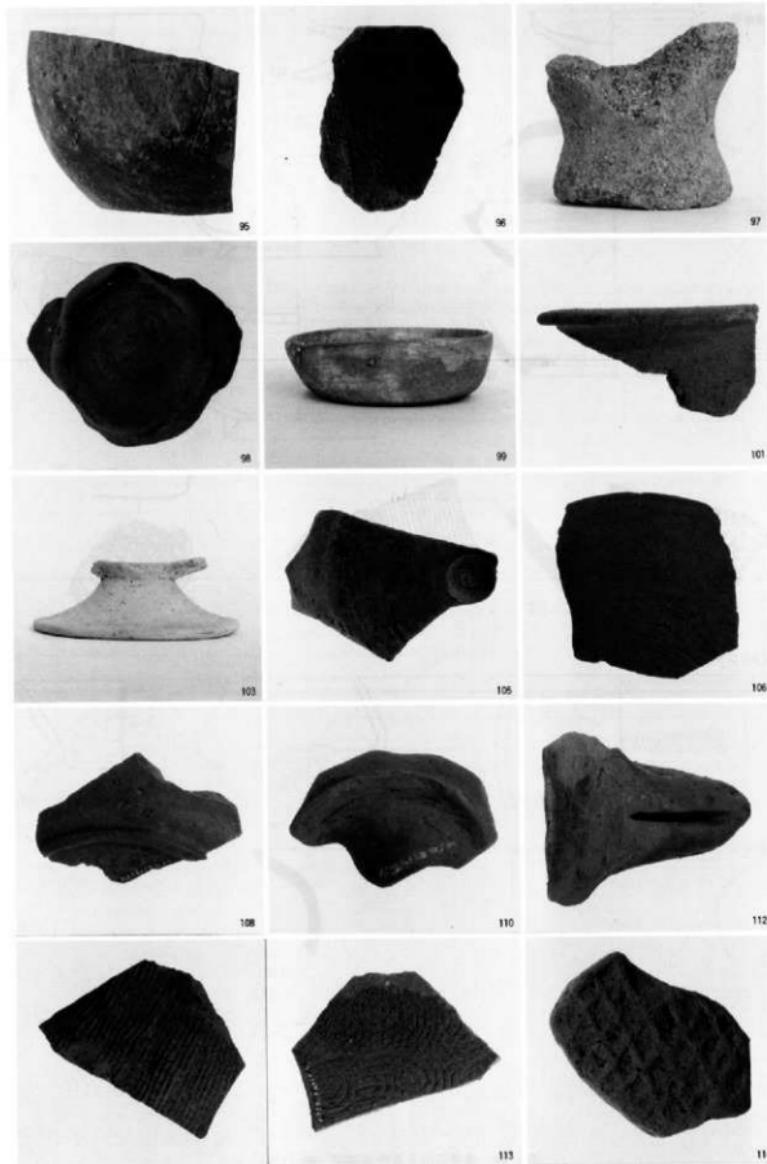


Fig. 44 遺構面出土遺物実測図 (縮尺1/3)



NO.1~3 グリット、造拂面出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

(8) 試掘調査出土遺物 (Fig.44)

115は弥生土器の壺、116・117は古墳時代の土師器の壺と壺、118は須恵器の口縁部で、古式の様相をもっている。

4. まとめ

今回の調査では、遺構面が2回に亘って形成されていることが判明した。又、当該地が台地の緩斜面に相当するため黒色土の整地層がみられた。又、当該地では湧水がみられるため基盤がシルト質の軟弱な地盤であることから、固く締った黒色土をもってして整地を行い、地盤の安定をはかったことが考えられる。第1面の黒色粘質土の上面では遺構を確認することは困難を極めており、上面での遺構の検出数は少ない。よって下層の第2面で検出した遺構群の内には第1面から掘り込まれていた遺構の存在も考えなければならない。第2面検出の井戸SE01がその例である。又、黒色粘質土層内から出土した土器群を時代毎に分けると、弥生時代から平安時代までの土器を含んでおり、特に古墳時代の土師器がその量を占めている。これは台地上に古墳時代の住居跡が集中して存在していることから、これらの地域より土を搬入したためと考えられる。台地中央部の削平の著しさをみても背首ができる。須恵器壺の38・52・62・91、高壺の89が7世紀後半から8世紀後半に比定される資料であることから黒色粘質土層の整地時期を8世紀後半以降と考えることもできる。又、上層から中国製の青磁や白磁が出土しているが、数量的には僅少であることから、これらは柱穴等に伴うものとして整地層形成以降の産物と考えられる。井戸SE01は第2面からの検出ではあるが白磁碗を伴っており、11世紀以降の時期を考えたい。

以上により、第1面の遺構は8世紀後半から12世紀代までの時期範囲が考えられ、第2面の遺構は基盤のシルト層が軟弱であり、整地層の存在なしには掘立柱建物等の建築が不可能であることを考えれば、整地事業終了後間もない時期に作られたものと考えたい。

第1面、第2面を貫いているSD01は、形状や規模からみて湧水、もしくは地下水の流路と考えた方が良いであろう。

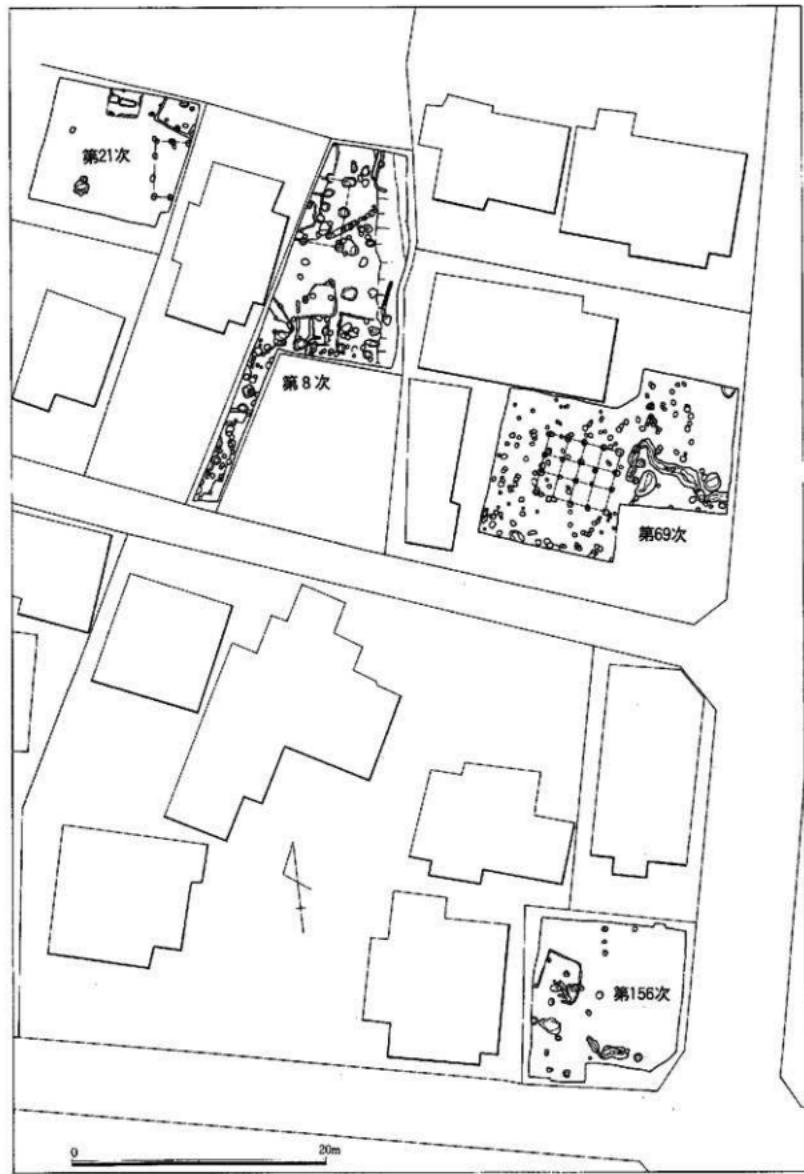


Fig. 45 第8・21・69・156次遺構配置図 (縮尺1/400)

Tab. 11 第69次調査遺構一覧表 (単位: cm)

遺構名	出 現 場 名	遺構 種類	形 態		保存長	系合幅	深	古 土 器 名		時 代	備 考
			平底形	斜面形							
SK01	D 1	土壙	不整円形	逆梯形	120	85	22	先生上器、土師器、須恵器、瓦器、鉄器		中世	
SK02	D 2	土壙	不整円形	逆梯形	210	175	13	先生土器甕、土師器、須恵器			
SK03		土壙	圓方 長方形	逆梯形	100	75	25	なし			
SK04		土壙	不整圓丸 長方形	逆梯形	67	85	91	なし			
SB01	1号井戸	井戸	不整円形	逆梯形	170	150	106	上部甕碗・釜・甕・須恵器环・甕・須恵器小焼け甕、 中間白磁甕・中田陶器・灰存			
SE02	2号井戸	井戸	不整円形	甕状	140	135	98	なし			
SD01	M 1・2 ・4	溝状 遺構		V字形	1150	南北150	■-38	花水十把者、甕、土師器甕、环、古墳時代土師器甕环、 輪、釜、甕、等、土師器、土師器十把者等、土甕、很多環、 高环、环素、环、甕、瓦質土器甕、中間白磁甕、甕、小甕、 中間陶器、加賀有組織、且、圓窓陶器甕体、条付甕、平瓦、 土製品、灰瓦、灰瓦、瓦甕、瓦片、石縫、滑石、黒曜石		中世	当初は落 M 1・M 3・M 4に分けていた。
SD02	M 2	溝状 遺構		逆梯形	250	120	90	先生上器甕、甕、土師器甕・古墳時代土器甕、須 恵器环、高环、环素、釜、甕、瓦器、瓦器、中間白磁甕、灰漆		中世	
SP12		柱穴	不整円形	逆梯形	40	35	3	土師器甕・器台			
SP22		柱穴	円形	逆梯形	23	23	10	土師器、須恵器甕			
SP25		柱穴	椭円形	逆梯形	30	27	15	先生土器、土師器、須恵器甕			
SP50		柱穴	不整円形	逆梯形	22	18	14	先生土器甕环			
SP65		柱穴	椭円形	逆梯形	25	20	12	土師器甕			
SP88		柱穴	不整円形	逆梯形	28	28	16	土師器甕环			
SP90		柱穴	円形	逆梯形	33	33	19	上部器小燒け甕			
SP96		柱穴	椭円形	逆梯形	26	24	26	先生土器、土師器、中間白磁甕			

Tab. 12 第69次調査遺物一覧表

(単位: cm)

番号 季号	遺物 番号	出土遺物	種類	器種	口径	底部 (高台付)	器高 (現存高)	形態の特徴・調査・文様	施釉・色調・表面等	備考
38 1	SE 01	白磁	瓶	直	-	-	(2.2)	薄い玉縁口縁を形成	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、白灰色。	大宰府Ⅲ期
38 2	SE 01	土器唇	壺	直	-	-	(6.1)	二重口縁部。折り返し部分は強く張り出す。内外面ヨコナガ調整。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色~褐色。	
38 3	SB 01-5	係生土器	壺?	-	9.2	(2.2)		平底。体部は圓く。外面にタテハケ後ナガ調整。	胎土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
38 4	SB 01-5	土器唇	壺	直	-	-	(4.5)	口縁部は内寄する。朝部内面はヘラケズリ。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
38 5	SB 01-1	土器唇	高杯	直	-	-	(5.9)	脚部・寄部を仄く。内部はヨコ方向のケズリ、外面はハケ後ナガ調整。	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
38 6	SD 01	係生土器?	壺	直	-	-	(4.2)	外延した口縁部は肥厚。内外面はヨコナガ調整。	胎土に1~4mmの砂を含む。焼成良好。褐色。	係生時代終末
38 7	SD 01	土器唇	高杯	直	-	-	(4.2)	环部・脚部を仄く。脚を大きく開き、環部との接合部に大きな段をもつ。内外面はヨコナガ調整。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
38 8	SD 01	頸唇器	杯	直	-	-	(1.9)	口縁部を仄く。天井部は丸みをもち、左回りのヘラケズリ。	胎土には砂を殆ど含まない。焼成良好。青灰色。	
38 9	SD 01	頸唇器	杯	直	-	-	2.1	天井部は平底で、右回りのヘラケズリ。口縁部内部のえかしは直立する。	胎土には砂を殆ど含まない。焼成やや良。青灰色。	
38 10	SD 01	重唇器(側)	壺	直	17.4	8.6	3.2	外面のヘラケズリは、体部上端まで行く。	胎土に1~4mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
38 11	SD 01	頸唇器	壺	直	-	-	(11.2)	外面は下位がヨコ、上位がナメ方向のカキ。内面は黄褐色波文の当異。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
38 12	SD 01	頸唇器	壺	直	-	(11.2)	(1.6)	高台は高く、内外面はヨコナガ調整。	胎土は標準。焼成良好。青灰色。	
38 13	SD 01	頸唇器	壺	直	-	-	(3.4)	口縁部外側を肥厚させ、平面部を形成する。内部は若干、内寄させる。外面にヘラケズリ文がある。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
38 14	SD 01	白磁	瓶	直	-	-	(3.0)	薄い玉縁口縁。物は厚め。	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、白灰色。	大宰府Ⅲ期
38 15	SD 01	青磁	瓶	直	-	-	(2.1)	口縁部を内寄させる。	素地は灰白色。焼成良好。わずかに緑を帯びた透明釉、淡褐色。	
38 16	SD 01	朱付	瓶	直	-	-	(2.2)	口縁部外側を若干、肥厚させる。内面に外模で墨文を施す。	素地は白灰色。焼成良好。透明釉、中國風白灰色。	
38 17	SD 01	土器質土器	粗鉢	直	-	-	(3.0)	口縁部を削り、内寄させる。内部はヨコハケ後ナガ調整。外面はナガ調整。	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。赤褐色~深褐色。	
38 19	SD 01	上製品	-	-	-	-	3.5cm、高さ3.7cm。	形状は球状。現存長6cm。現存幅	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成やや良。淡褐色。	施釉
38 23	SD 02	上唇器	壺	直	-	-	(1.3)	口縁部は強く外反する。内外面はヨコナガ調整。	胎土に1~3mmの砂を含む。淡茶、内外面青褐色。	
38 24	SD 02	係生土器	壺	直	8.2	(2.8)		平底。外側はタテハケ調整。内面はナガ調整。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。外側は赤褐色、内面は淡褐色。	
38 25	SD 02	頸唇器	杯	直	-	-	(3.0)	天井部は丸みをもち、外側の2/3まで右回りのヘラケズリ調整。口縁部内部のえかしは小さい。	胎土に1~3mmの砂を少し含む。焼成やや不純。外側は淡紅茶色、内面は灰褐色。	半焼け
38 26	SD 02	頸唇器	壺	直	-	16.2	(4.4)	上げ形。内外面はヨコナガ調整。	胎土には砂を殆ど含まない。焼成良好。灰褐色。	
38 27	SD 02	係生土器	壺	直	-	-	(5.3)	腹部の破けで、外側に扁平な肚付突起。穴付ヒンに斜材子目文。内面はヨコハケ後ナガ調整。	胎土に1~2mmの砂を含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	係生時代終末
38 28	SD 02	頸唇器	壺	直	-	-	(5.4)	外側は格子目司文。内面は平行引き。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。暗灰褐色。	
39 29	SP 50	係生土器	高杯 高盤	直	-	-	(2.2)	环部、脚部口縁部。内外面はヨコナガ調整。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
39 30	SP 65	上唇器	壺	直	-	-	(7.0)	二重口縁部。瓶底部に突堤状の張り段。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
39 31	SP 90	土器唇	壺	直	-	-	(5.2)	長脚部。薄手で、外反する口縁部。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成やや良。茶褐色。	

地図 番号	植物 番号	沿土種類	種 草	樹 木	高さ	断面 (高さ)	断面 (厚さ)	形態の特徴・要因・支撑	地勢・色調・適地等	参考
39	32	SP 12	土師器	器台	10.2	-	(4.9)	脚部が太く、口縁部はわずかに外反する。内部には骨目状の調整窓がある。	地勢に1~2mmの砂を少し含む。泥底やや軟。明茶褐色。	
39	33	SP 28	土師器	青坪	-	-	(7.5)	脚部が太く、口縁部はヨコカケ調整窓がある。内部には骨目状の調整窓がある。	地勢に1~2mmの砂を少し含む。泥底やや軟。茶褐色。	
39	34	SP 22	灰毛器	壺	-	-	(6.0)	外面は平らで引き後、ヨコナデ調整窓がある。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。外面は赤灰色、内部は青灰色。	
39	35	SP 25	灰毛器	壺	-	-	(6.5)	外面はヨコ方向のカキ目。内部は青色で叩き裏。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。外面は赤灰色、内部は青灰色。	ホホ土器
39	36	SP 134	青鉢	瓶	-	(7.0)	(2.5)	瓶ノ目高台で、脚は底部下端まで達す。高台・支承外側は露胎である。	底地は灰色で燒成。燒成良好。底地は青色で燒成。燒成良好。底地は透明釉。緑灰色。	葛州窯系 青道
39	37	SP 96	白鉢	壺	-	-	(1.9)	体部は丸太で、底部外側まで施釉なし。底部内面は施釉である。	底地は内灰色で燒成。燒成良好。透明釉。白灰色。	
40	38	黒色土器	朱生土器	壺	-	-	(3.2)	くの字形口縁部で、肩折が強い。難窓が肥厚する。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。明茶色。	
40	39	黒色土器	朱生土器	壺	-	-	(4.3)	くの字形口縁部で、底部はタテハケ削れ。底部内面はヨコカケ調整窓である。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。茶褐色。	
40	40	黒色土器	朱生土器	壺	-	-	(5.1)	くの字形口縁部で、兩部が若干内寄る。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成やや不良。明茶色。	
40	41	黒色土器	朱生土器	壺	-	-	(4.9)	くの字形口縁部で、内面に強い棱を6つ。難窓を肥厚させる。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。明茶褐色。	
40	42	黒色土器	朱生土器	器台	-	-	(5.9)	脚部が外側にヨコカケ調整窓。底部の内外側はヨコハケ削れ。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。明茶褐色。	
40	43	黒色土器	朱生土器	壺	-	3.6	(2.6)	手底で外面に木の要素痕がある。内部はナメ無痕。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。外部は淡茶色。内部は淡茶色。	
40	44	黒色土器	朱生土器	壺	-	7.0	(4.9)	手底、体部の立上がりは外秀する。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成やや不良。明茶褐色。	
40	45	黒色土器	朱生土器	壺	-	-	(5.4)	体部外側にこの手形窓を點付。突起に刻りあり。外側上部は平行線ある。下部は印きのヨコハケ調整窓を施す。	地面上に1~2mmの砂を多く含む。燒成やや不良。外面は黒灰色、内部は淡茶褐色。	先史時代 朱生土器
40	46	黒色土	土師器	高杯	-	-	(5.0)	脚部が太く。	地面上に1~2mmの砂を多く含む。燒成やや不良。茶褐色。	内外共唐 城
40	47	黒色土器	土師器	高杯	-	-	(5.0)	脚部が太く。脚部は斜面で、脚部と内部は斜面にハラスがある。外側はヨコハケ削れ。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。淡茶褐色。	
40	48	黒色土器	土師器	高杯	-	-	(5.4)	脚部が太く。脚部は中空で、脚部との接合部の調整不規則。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成不良。茶褐色。	
40	49	黒色土器	土師器	高杯	-	-	(3.9)	脚部が太く。脚部はラッパ状に削る。外側はタテハケ削れ、内部はナメ無痕。径1.1cmの穿孔が3ヶ所ある。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。茶褐色。	
40	50	黒色土器	土師器	高杯	-	-	(3.2)	脚部が太く。脚部は丸い。底部は大きく開く。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成やや不良。淡茶褐色。	
40	51	黒色土器	土師器	圓形器台	-	-	(5.9)	脚部の内部は複数の窓がある。受部と脚部は斜面に突起を有する。脚部内面はナメ無痕。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。褐色。	
40	52	黒色土器	須恵器	耳杯	9.8	-	(4.4)	受部は丸く、脚部外側の1/3は左縁のへき部をアーチ状に施す。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。黑褐色。	
40	53	黒色土器	須恵器	耳杯	11.6	-	(3.6)	受部を長くつまみ出す。口縁部は立上がりで、内部はナメ無痕。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。青灰色。	
40	54	黒色土器	須恵器	耳杯	-	-	(1.9)	天井部は平面で、口縁部内側の立上がりは直角で立直にする。天井部外側に右縁のへき部をアーチ状に施す。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成やや不良。淡茶褐色。	
40	55	黒色土器	須恵器	耳杯	-	-	(1.7)	天井部が直立気味に立折し、脚部は平坦である。内部にはナメ調整窓。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成やや不良。灰褐色。	
40	56	黒色土器	須恵器	耳杯	-	-	(3.2)	体部は丸みをもつ。口縁部は外秀する。内外壁はナメ調整窓。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成やや軟。外部は灰色、内部は青灰色。	
40	57	黒色土器	須恵器	耳杯	-	(6.8)	(3.8)	体部が太く。脚は細く、外へ強く張る。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。暗青灰色。	
40	58	黒色土器	須恵器	高杯	-	-	(7.1)	環部と脚部を太く。环部の底は平底である。脚部から腰部は大きく外反する。内外壁はナメ無痕。	地面上に1~2mmの砂を含む。燒成良好。黑褐色。	
40	59	黒色土器	須恵器	壺	-	-	(6.6)	外側面は平行町の後ヨコ方向のカキ目。内部は脚部の内側に凹凸がある。	地面上に1~2mmの砂を少し含む。燒成良好。外側は淡茶色、内部は暗青灰色。	

件号 番号	遺物 番号	出土場所	種類	器種	口径	底径 (高さ)	最高 (底厚)	形態の特徴・調査・文様	基軸・色調・产地等	備考
40	60	黒色土器	須恵器	甕	-	-	(10.5)	外腹は格子目印き。内腹は同心円の当具底。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。 焼成良好。茶褐色。	赤焼け上等。 赤焼け中。
40	61	黒色土器	土器器	瓶	-	-	-	把手部分で、断面形は略陽丸方錐形を呈する。瓶内腹に刷毛の青背景の当具がある。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。 焼成やや不良。明茶褐色。	
40	62	黒色土器	土器器	瓶	-	-	-	把手部分で断面形は略陽丸の變形を呈する。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。 焼成良好。褐色。	
40	63	黒色土器	土器器	甕	-	-	-	肩の部分で、約6.4cmを測る。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成やや良。明茶褐色一局色。	
41	64	黒色土器	土器器	壺	13.0	8.0	3.1	強く聞く跡跡は瓦々丸みをもつ。底部は赤切りである。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。 焼成やや良。明茶褐色。	
41	65	黒色土器	土器器	甕	-	-	(3.1)	底部は強く外側する。全体に深めに施す。	粘土は灰茶色。焼成良好。绿色を帯びた透明白。綠灰色。	産地は灰茶色。
41	66	黒色土器	土器器	甕	-	-	(1.8)	内腹見込に北緯を施す。轟は内腹に厚めである。高内は施鏡口の字形。	産地は乳白色で繊維。焼成良好。大宰府瓦小さな気泡がふきられた白の半透明無色灰白色。	
42	69	Kaijyaku 黒色土器	須恵器	甕	14.0	6.4	4.05	断面の字形の高台。底部は直線的に外反する。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。青灰色。	8°C中項 焼成良好。青灰色。
42	70	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	-	-	(0.9)	ハラ切り底。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成不良。白色。	内腹直垂底。
42	71	Kaijyaku 黒色土器	須恵器	甕	-	7.0	(1.4)	ハラケズリの平底。内外面はヨコナゲ調査。	粘土に砂を殆ど含まない。焼成良好。青砂色。	
42	72	Kaijyaku 黒色土器	須恵器	甕	-	-	(9.2)	外腹は平行印き、内腹は同心円の当具底。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。深灰色。	
42	73	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	-	9.4	(4.4)	平底。立上がりは直線的。外腹はタテハラケ調査。内腹はナガハラケ。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。 焼成良好。茶褐色。	
42	74	Kaijyaku 黒色土器	土器器	小甕 丸底	10.2	-	(4.7)	口縁部には内腹する。体部は体体で口縁部との境は内腹に強い棱をもつ。	粘土は粗緻。焼成やや不良。明茶褐色。	内腹直垂底。
42	75	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	12.0	-	8.0	口縁部は直ぐ、小さく外反する。内腹はヨコハラケ調査。体部内腹はナガハラケ調査。外腹はハラケ調査。	粘土に1~3mmの砂を含む。焼成良好。外腹は茶褐色、内腹は黑色。白茶色。	
42	76	Kaijyaku 黒色土器	土器器	裏付甕	10.2	5.0	3.9	体部は球体に近い。大きく聞く脚が付く。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。内腹直垂底。	
42	77	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	12.2	-	(3.5)	丸底で半球体に近い。外腹下位は指根疣とケズリ調整。口縁部外張と内腹はナガハラケ。	粘土は粗緻。焼成良好。茶褐色。	
42	78	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	12.2	-	(2.9)	底部を全く、薄手で、体部は半球体に近い。内腹はナガハラケ調査。	粘土は粗緻。焼成やや不良。茶褐色。	
42	79	Kaijyaku 黒色土器	土器器	脇合	10.3	-	(3.0)	脚部を全く。口縁部は外張する。ヨコナガハラケ調査。	粘土は粗緻。焼成良好。茶褐色。	透底
42	80	Kaijyaku 黒色土器	土器器	高杯	-	-	(3.2)	脚部で、表面を欠く。脚部は短く、空洞ではない。脚部は大きく開き、延長1.1cmの穿孔がある。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。焼成やや良。茶褐色。	
42	81	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	-	-	(3.0)	外寄した口縁部の内腹をわずかに内腹させる。内腹はヨコナゲ調査。油面内腹にハラケによる斜状が見える。二重口縁。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。 焼成良好。深灰色。	
42	82	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	15.8	-	(5.0)	口縁部を大きく。脚部の内腹に強い棱をもち、外腹はハラケ調査。内腹はナガハラケ。	粘土は粗緻。焼成良好。淡褐色。	
42	83	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	16.8	-	(14.3)	口縁部はわざく内腹。脚部を肥厚させる。体部は球形で、内腹はハラケスリ。脚部外張ハラケ、中位はヨコナゲ調査。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。 焼成良好。淡褐色。	
42	84	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	14.0	-	(6.1)	外以した口縁部は強く内凹する。体部は球形で、内腹はハラケスリ。脚部外張ハラケ、中位はヨコナゲ調査。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。 焼成やや不良。深灰色。	
42	85	Kaijyaku 黒色土器	須恵器	甕	-	(9.0)	(2.8)	外に聞く。高い高台が行き、内外面はヨコナゲ調査。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。 焼成良好。深灰色。	
42	87	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	11.8	-	(4.6)	口縁部は直線的に外反する。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色一黑褐色。	
42	88	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	-	-	(3.9)	内腹はハラケズリ調査。外腹にハラケき締め状がある。	粘土に砂を含む。焼成良好。淡褐色。	留置十 器外
42	89	Kaijyaku 黒色土器	土器器	高杯	-	-	(3.6)	環形片である。底部は半球形を呈し、口縁部は強く外反する。内腹にハラケ、外腹にハラケ調査がある。	粘土は粗緻。焼成良好。茶褐色。	
43	90	Kaijyaku 黒色土器	土器器	甕	20.6	-	(6.0)	大きな聞く脚部は内側に設し、油面を形成する。外腹はヨコナゲ調査。脚部内腹はハラケズリ調査。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。 焼成良好。褐色一茶褐色。	

測定番号	造物番号	出土実験	種類	基準	口径	直径(高台径)	基高(基面高)	形狀の特徴・変異・文様	施墨・色調・実績等	備考
43	91	Nd1グリット 黒色土口端	土器部	裏	-	-	(7.8)	開いた口縫部は内側。体部は丸みをもつ。内面はヘラケツリ調査。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや軟。白茶色。	内外表面 燒成
43	92	Nd1グリット 黒色土口端	土器部	裏	-	-	(9.2)	開いた口縫部は内側。体部は丸みをもつ。内面はヘラケツリ調査。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成やや不良。茶褐色。	
43	93	Nd1グリット 黒色土口端	土器部	裏	-	-	(1.2)	口縫部はわずかに外側に、邊部は丸い。底部の粗粒状。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成不良。洪褐色。	
43	94	Nd1グリット 黒色土口端	土器部	右付鉢	-	6.0	(2.0)	鉢部を支撑。裏は外へ大きく開く。外側はナガ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡系。	
43	95	Nd1グリット 黒色土口端	須恵器	坪壠	-	-	(3.4)	尖井形。体部は丸みをもつ。外側のヘラケツリは右端より体部の1/2まで残す。	粘土に砂を含まない。焼成良好。水色。	
43	96	Nd1グリット 黒色土口端	須恵器	右付	-	-	(5.5)	外沿は進んで開口する。内面は下位はケズリ状のナテを残す。	粘土に1~4mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	
43	97	Nd1グリット 黒色土口端	須恵器	裏	-	6.8	(6.6)	上げ底。壁部が厚い。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや不良。茶褐色。	内外表面 燒成
43	98	Nd1グリット 黒色土口端	土器部	前	-	-	(2.4)	平底を仄く。腹は外へ漸く盛る。内面はナガ調査。	粘土に細かい砂を含む。焼成やや不良。小良。外側は茶褐色。内面は黒褐色。	
43	99	Nd1グリット 黒色土口端	須恵器	坪	12.0	10.0	(3.7)	ハラ切りの平底。体部は直線的で、右斜傾。	粘土に1~4mmの砂を少し含む。焼成良好。青灰褐色。	8~9℃
43	100	Nd2グリット 黒色土口端	土器部	裏	13.0	-	(6.0)	直口気味の口縫部は内側する。頭部上面に強い後退部を有している。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。外側は淡茶褐色。内面は淡褐色。	
43	101	Nd2グリット 黒色土口端	須恵器	裏	-	-	(5.2)	達T字形の口縫部で、内面を突起状に盛り立てる。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	
44	102	黒色土口端	土器部	右付	10.0	-	(2.7)	腰部を仄く。口縫部は外気味に直立する。	粘土に細かい砂を少し含む。焼成やや不良。茶褐色。	燒成
44	103	黒色土 (灰土)	土器部	右环	-	9.4	(3.0)	脚は大きく外側する。环部内面はナガ調査。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	燒成
44	104	黒色土 (灰土)	土器部	裏	10.8	-	(6.1)	直立気味の口縫部は若干内側する。体部は鼓形。内面はヨコハケ調査。外側はナガ調査。	粘土は1~3mmの砂を少し含み。焼成良好。淡茶褐色。	
44	105	黒色土口端	須恵器	裏	-	-	(2.8)	大井雁は平底で、左回りのヘラケツリを施す。施柾形のつまみが付く。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成やや不良。淡色~茶色。	
44	106	黒色土口端	須恵器	坪壠	-	-	(3.0)	裏受け部は強く。口縫部の立上がりは短く、内傾する。外側下位は左回りのヘラケツリ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
44	107	黒色土口端	須恵器	坪壠	16.4	-	(4.2)	裏受け部は強く。口縫部は内傾し、運び足やや厚。内外両面はヨコナガ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成やや不良。青灰色。	
44	108	黒色土口端	須恵器	坪	-	-	(11.0)	前前筋が弓の弦の低い高台。体部は直線的に開く。ヨコナガ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成ややや軟。外側は淡茶褐色。内面は白色。	
44	109	黒色土口端	須恵器	坪	-	-	(10.4)	高台部へ廻る。体部は丸みをもつ。ヨコナガ調査。	粘土に細かい砂を少し含む。焼成良好。小豆色。	赤燒成土 器
44	110	黒色土口端	黒色土口端	腹	-	(8.4)	(1.8)	断面形が二角形の高台である。内外面の変更は不明。	粘土に砂を殆ど含まない。焼成やや軟。外側は羽茶褐色。内面は淡褐色。	内外表面 燒成
44	111	黒色土口端	土器部	後	-	-	(9.2)	体部は丸みをもち、断面三角形の高台である。	粘土に細かい砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	
44	112	黒色土口端	土器部	腹	-	-	-	把手部分。断面形は後円形を呈し、左右に抉り込みがある。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	
44	113	黒色土口端	須恵器	裏	-	-	(6.2)	外側は平行叩き。内面はモ心円の凸出部。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。外側は淡茶褐色。内面は淡茶褐色。	
44	115	謹1レシナ	須生土器	裏	16.0	-	(7.7)	L字形部はくの字形を呈し、座部は平坦である。外側はタブレカ調査。内面はナガ調査。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
44	116	謹1レシナ	土器部	裏	-	-	(9.0)	体部は直形を呈し、口縫部は直線的に強く、体部の外側はヨコハケ調査。内面はヨコケツリ調査である。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成やや軟。外側は淡茶褐色。内面は白褐色。体部は黒色。	
44	117	謹1レシナ	土器部	腹	12.8	-	(5.9)	口縫部は直線的に強く、体部との境は内側に強い傾きをもつ。内外両面はヘラケツリ調査。	粘土に1~3mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
44	118	謹1レシナ	須恵器	腹	36.0	-	(6.7)	口縫部で、大きく外側する。薄底は丸みをもち、外側に小さな突起がある。	粘土に1mm程度の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	

Tab. 13 第69次調査平瓦計測表

(単位: cm)

件名 番号	遺地 番号	出 土 場	長 さ (直立高)		厚 さ (直立高)		幅 度	色 調	施 工	形 状	製作技術	備 考
			前端部	後端部	前端部	後端部						
35	18	SD 01	(6.7)	1.8	-	-	-	淡茶色	1~2mmの砂を少しあわす。	やや歓	背面部と側面はナゲ調整、谷部はナゲ調整の後に粘土貼り付け。	田邊標名M 4
46	114	褐色土①層	(7.4)	1.8	-	-	-	灰白色	1~3mmの砂を含む。	不良	谷部は布目焼が施されるが、墨波のため不明瞭。背部は斜格子文の印き痕。	

Tab. 14 第69次調査石製品一覧表

(単位: cm)

件 名 番 号	通 数 番 号	出 土 場	形 種	長(直立高)	幅(直立高)	厚(直立高)	重 量(g)	石 材	色 調	等 級
38	20	SD 01	石錐?	9.0	2.9	3.0	156	片岩か緑泥岩	灰鉄色	長軸の中央に抉りをイタ所入れる。
38	21	SD 01	砥石	10.6	4.3	1.9	-	硬質砂岩	暗灰色	A面・B面の2面を砥面として利用。両面と側面に散打痕がある。
38	22	SD 01	砥石	4.8	3.1	2.1	-	砂岩	黒灰色	A・B面と側面を砥面として利用。
41	67	No.1グリット 黑色土①層	磨石	(9.0)	6.8	5.0	-	花崗岩	暗灰色	一部を欠損している。
41	68	No.1グリット 黑色土①層	扁平片刃 石斧	(4.7)	2.6	0.7	-	頁岩	灰白色	基部を欠損。刃部破損。刃は純角である。
42	66	No.1グリット 黑色土①層	繩平石斧	(7.8)	5.8	1.7	-	玄武岩	淡茶灰色	未製品。表面が滑らしい。刃部を欠損している。

第6章 第73次調査 (調査番号8214)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は福岡市早良区小田部1丁目189に所在し、発掘調査面積は62m²である。有田・小田部の台地は、北方向に開析が進み、台地はハッピ手状を呈しているが、当該地は舌状台地の西側縁辺に位置している。周辺では、遺跡の調査が多く実施されており、ローム層上面において遺構が発見されている。今回の発掘調査は専用住宅建設に伴うものであるが、調査対象地の面積が狭いため、残土は全て外へ運び出した。

(2) 概要

当該地の旧地目は水田である。遺構面のローム層は深さ70~100cmを測る。ローム層上面は南側へ傾斜しており、西南隅では大きな段落ちとなっている。しかし、段落ち部分において井戸 SE 01が存在することは、元来はこのローム層、及び段落ち部の上層に整地面があったものと考えられよう。土層状況は、調査区の東側においては6層が存在している。上層より第1層は耕作土、第2層は茶褐色粘質土、第3層は茶褐色粘質土で砂粒を多く含む、第4層は淡茶褐色粘質土、第5層は暗茶褐色粘質土である。南側の土層でみれば、西側が谷状に大きく段落ちになっており、東側と同じ高さまで盛が行われていることが判る。これは近年に谷水田の埋立てが行われたことを示している。

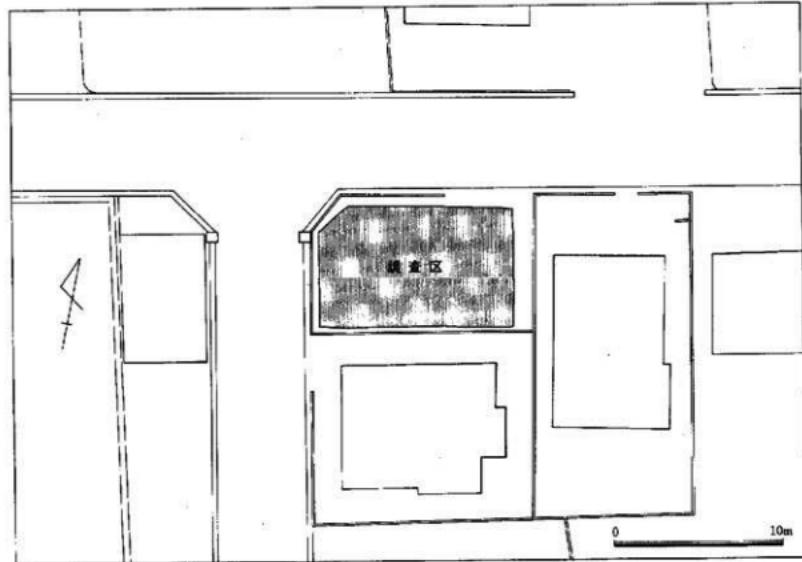
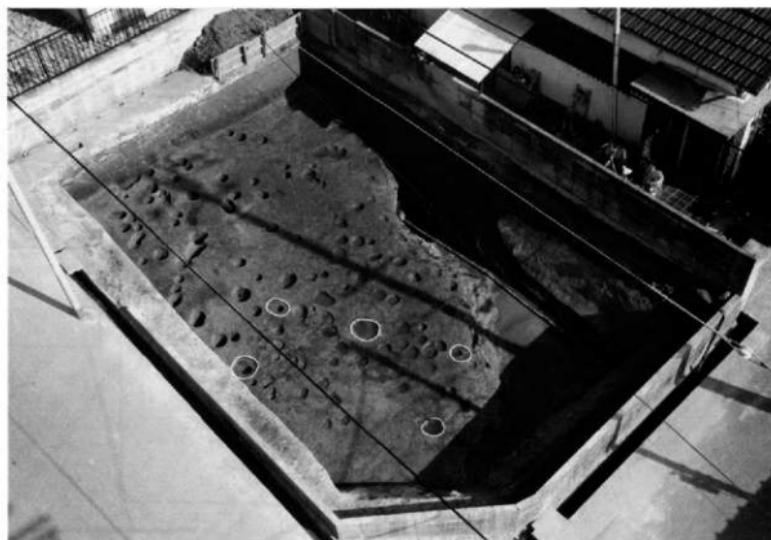


Fig. 46 第73次調査地点位置図 (縮尺1/300)



第73次調査 全景（北から）



調査区全景（北西から）

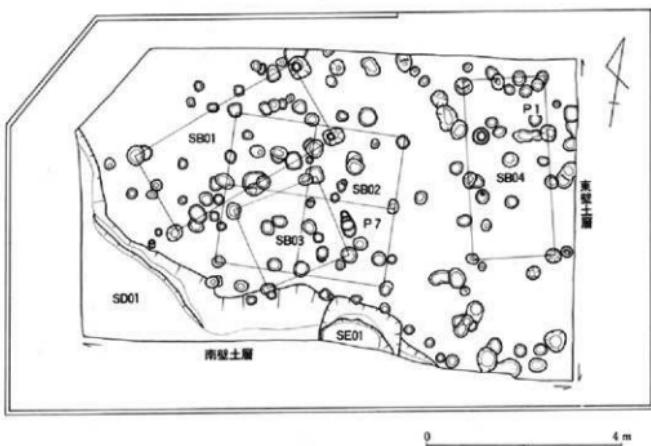
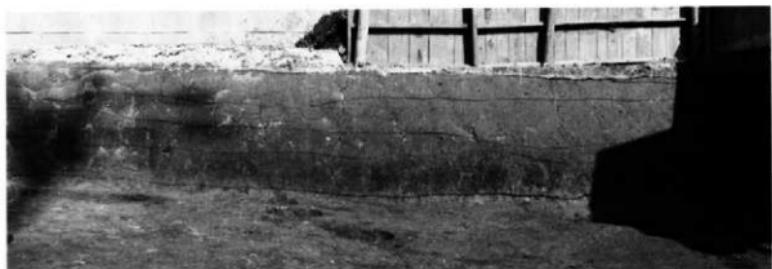


Fig. 47 第73次調査造構配置図（縮尺1/100）



調査区東壁の土層状態（西から）



調査区南壁の土層状態（北西から）

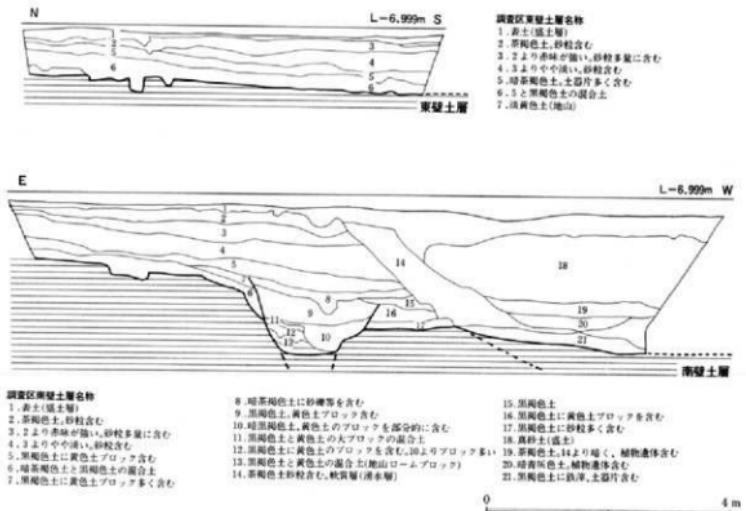


Fig. 48 第73次調査区周壁土層実測図 (縮尺1/80)



井戸SE 01 土層状態 (北から)

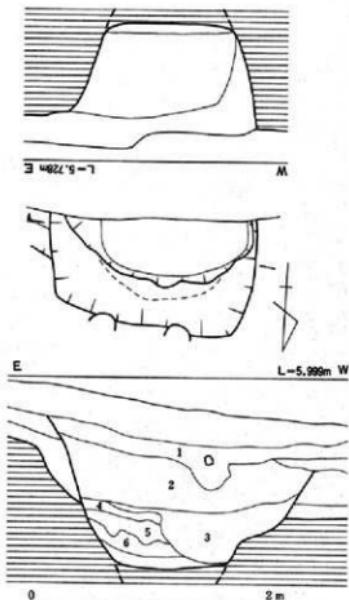
2. 遺構説明

(1) 井戸 (SE)

SE01 (Fig. 49) 南側の台地落ち部分にて1基のみ検出した。当初は土壙とみていたが、深さや湧水の点から井戸と見做す。調査区の南側境界に位置しているため全体形は不明である。又、上部は削平を受けている。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は隅丸長方形を呈している。井戸上面の径は1.7m、深さは99cm以上を測る。井戸底までは未発掘である。井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としており、覆土から弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、糸切り底の土師器壺等が出土しているので、12~13世紀の年代が考えられる。

Tab. 15 第73次調査遺構一覧表 (単位: cm)

遺構名	目次 標名	遺構 概要	形 態				規 模			出 土 遺 物	時 期	備 考
			平面形	側面形	直 径	深 さ						
SE 01	D 1	井戸	不規則四角	逆錐形	170	99**	99	弥生土器、土師器、二重口鉢形、須恵器壺、甕・壺、瓦器、磨石	中世			
SD 01	M 1	塗	-	-	860	114**	59	弥生土器、土師器、高杯、須恵器壺、甕・壺、瓦質土器壺形、鉢形	中世	段落ち部分 に相当		
SP 01		柱穴	円形	逆錐形	25	25	18	弥生土器、土師器、須恵器壺				
SP 07		柱穴	不規則四角	逆錐形	43	26	16	土師器壺				



井戸 SE 01 (南から)

- SE 01 土層名跡
1. 黒褐色土に砂礫を含む
 2. 茶褐色土に綠茶褐色土の混合土(黄色土のブロック含む)
 3. 3より疊する
 4. 茶褐色土に黄色土の大ブロック混合土
 5. 茶褐色土に黄色土のブロック含む
 6. 茶褐色土に黄色土の混合土(地山ロームブロック)

Fig. 49 井戸 SE 01 実測図 (縮尺1/40)

(2) 挖立柱建物 (SB)

調査区内では数多くの柱穴を検出した。これらが掘立柱建物、或いは住居跡等の主柱となることが予想されたため建物の検出に努めた結果、4棟の掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は1間×2間の建物2棟、1間×1間の建物1棟、2間×2間の建物1棟であった。

SB 01 (Fig. 50) 掘立柱建物 SB 02と切合う。梁行1間、桁行2間の規模をもった側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位を N50° E に置き、柱間は梁間5.8尺、桁間6.1尺を測る。掘方径35~50cm、深さ39~60cmを測る。柱穴からは須恵器の坏蓋が出土しており、6世紀後半代の時期が考えられる。

SB 02 (Fig. 50) 掘立柱建物 SB 01と切合う。中央に東柱が存在する。梁行2間、桁行2間の規模をもった総柱の掘立柱建物が考えられる。主軸方位を N88° E に置き、柱間は梁間5.2尺、桁間5.7尺を測る。掘方径32~35cm、深さ14~19cmを測る。遺物の出土はない。

SB 03 (Fig. 50) 掘立柱建物 SB 02と切合う。梁行1間、桁行1間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位を N33° W に置き、柱間は梁間5.6尺、桁間5.9尺を測る。掘方径は32~35cm、深さ11~19cmを測る。遺物の出土はない。

SB 04 (Fig. 50) 梁行1間、桁行4間の規模をもった側柱だけの掘立柱建物と考えられる。主軸方位を N12° E に置き、柱間は梁間5.6尺、桁間6.0尺を測る。掘方径33~36cm、深さ24~37cmを測る。1間×2間の建物とも考えられる。

(3) 溝 (SD)

調査区の南西側の境界地において大略東西方向の溝を1条検出した。当初は谷の落ち込みと考えていたが、覆土からみて中世の塗と見做すことも可能であるため、ここでは溝 SD 01として報告する。

SD 01 (Fig. 47) 調査区の境界に位置しているため、長さは6.6mまでしか確認できなかった。大略東西方向の溝で、断面形は不明である。溝上面の幅は114cm以上で、現状の深さは59cm以上を測る。覆土は茶褐色粘質土を主体としており、覆土から須恵器が出土している。有田・小田部地区の中世遺構の覆土の状況から、時期は中世後半期の遺構と考えられる。

Tab. 16 掘立柱建物一覧表

1尺=30.3cm

概要	柱穴(cm)		梁行(cm)		方位	半径 (m)	柱穴状態					日上 遺物	備考
	高さ(尺)	直径寸法(尺)	高さ(尺)	直径寸法(尺)			Pi 級	II 級	III 級	IV 級	V 級		
SB01 1×2	320(12.3)	175(5.0) 195(6.4)	175(5.8)	175(5.8)	N50° E	6.473	6	39~60	35~50	30~45	20	伴生土解、根茎跡等、炭化 物	
SD02 2×2	350(11.6)	165(5.1) 165(5.4)	310(10.2)	160(5.2) 150(5.6)	N88° E	10.85	9	14~19	37~49	27~39	18	伴生七唇器、土解等	
SB03 1×1	180(5.9)	160(5.0)	170(5.6)	170(5.6)	N33° W	3.06	4	11~14	32~35	28~34		なし	
SB04 1×2	260(12.0)	160(5.0) 205(6.8)	170(5.6)	170(5.6)	N12° W	6.28	6	24~37	33~36	28~36		土解等、発泡等	

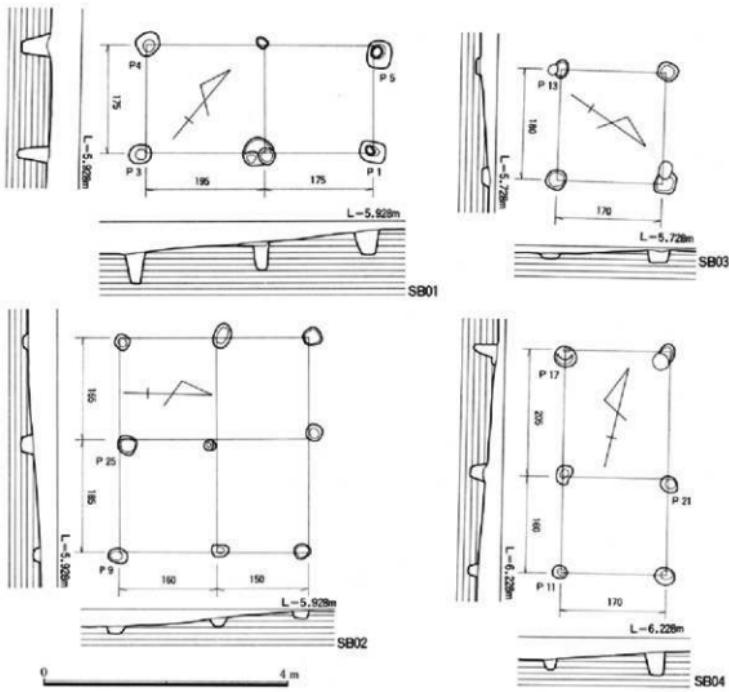


Fig. 50 挖立柱建物 SB 01~04 実測図 (縮尺1/80)



掘立柱建物 SB 01 (北から)

(4) 柱穴 (SP)

柱穴と考えられる。径15~50cmを測るPitを多数検出した。いずれも柱穴と考えられるが、建物として把握することができたのは、4棟にとどまった。SP01・07・25からは遺物が出土している。これらのPitの作られた時期は古墳時代から室町時代までの幅をもっている。

3. 遺物説明

(1) 井戸出土遺物 (Fig. 51)

SE 01出土遺物 (7~9) 7は糸切り底の土師器坏片、8は古墳時代の土師器高坏片である。9は緑泥片岩製の磨石で、下部を欠いている。縁辺は良く使用しており、一部に敲打痕がみられる。

(2) 掘立柱建物出土遺物 (Fig. 51)

SB 01出土遺物 (1) 1は須恵器の坏蓋で、SB 01-P 3の柱穴から出土している。6世紀後半代の時期であろう。

(3) 溝出土遺物 (Fig. 51)

SD01出土遺物 (5・6) 5は須恵器の坏蓋、6は須恵器の壺片である。

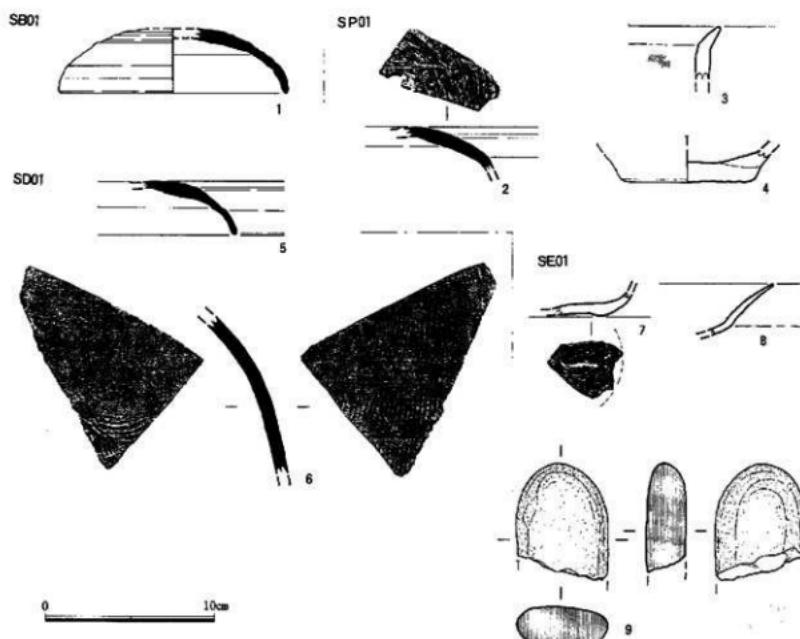
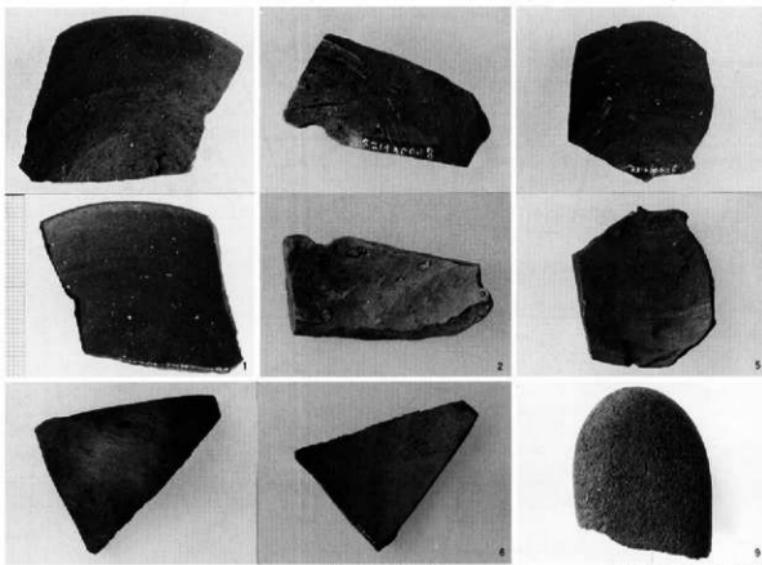


Fig. 51 各遺構出土遺物実測図 (縮尺1/3)



第73次調査出土遺物

三数字は実測図の番号に一致する

Tab. 17 第73次調査遺物一覧表

(単位: cm)

辨別番号	遺物番号	出土地點	種類	器種	口径	底径(高台径)	最高(底存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・変地等	備考
SI	1	SD01-3	須磨器	坪壠	33.5	—	(3.9)	体幅・天井部はやや丸みをもつ。天井部は左側よりへラケツリ。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。施釉良好。外腹は青灰色、内腹は赤茶灰色。	小田洋輔 にゆーさん
SI	2	SP01	須磨器	坪壠	—	—	(2.5)	天井部は左側へのヘラケツリ。	胎土に1~4mmの砂を含む。施釉良好。外腹は淡青灰色、内腹は灰色。	小田洋輔 にゆーさん
SI	3	SP07	土器器	鉢	—	—	(3.2)	口縁部は小さく外反。外腹はヨコナタケツリ、内腹はタタハケ調整。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。施釉良好。古墳時代	
SI	4	SP25	須磨土器	盤	—	7.8	(2.0)	平底。	胎土に1~4mmの砂を多く含む。施釉不良。古墳時代中葉。	
SI	5	SD04	須磨器	坪壠	—	—	(3.2)	天井部は平坦、脊部は丸みをもつ。天井部はハラケツリ。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。施釉良好。	小田洋輔 にゆーさん
SI	6	SD06	須磨器	甌	—	—	—	外腹は子母目叩き、内腹は同心円叩き。内外面上部はヨコハケ調整。	胎土に細かい砂を少し含む。施釉良好。外腹は黒灰色、内腹は青灰色。	古墳時代
SI	7	SB01	土器器	皿	—	—	(1.4)	角張り底。体部は丸みをもつ。	胎土に1~3mmの砂を含む。施釉やや軟。	中世
SI	8	SP04	土器器	高杯	—	—	(3.1)	口縁部と底部の間に段をもつ。	胎土に細かい砂を少し含む。施釉やや軟。	古墳時代

Tab. 18 第73次調査石製品一覧表

(単位: cm)

辨別番号	遺物番号	出土遺構	器種	長(底存長)	幅(底存幅)	厚(底存厚)	重量(g)	石材	色調	特徴
SI	9	SE01第3層	磨石	(6.9)	(5.5)	2.5	—	緑晶片岩	暗緑灰色	塊状剥片を呈し、下部を久く磨削している。一部に亂刃状。

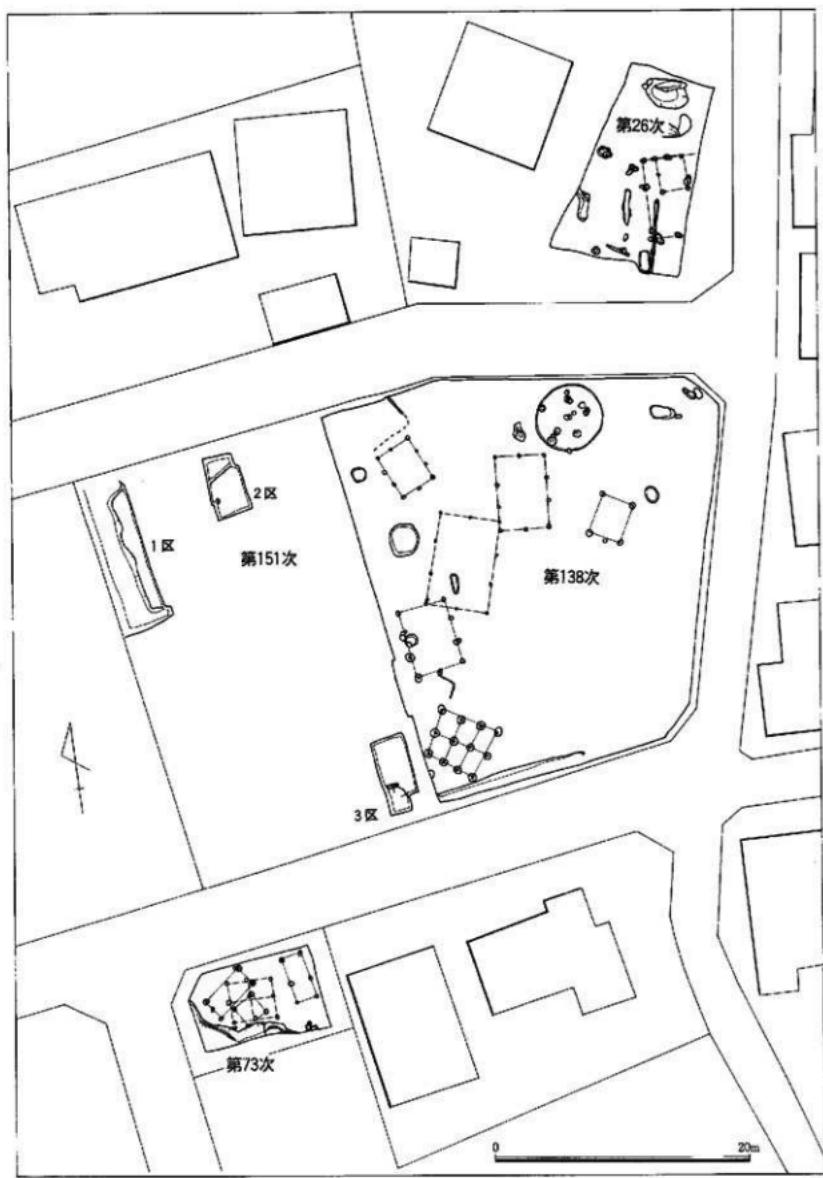


Fig. 52 第26・73・138・151次調査遺構配置図 (縮尺1/400)

(4) Pit 出土遺物 (Fig. 51)

2はSP 01出土。3はSP 07出土。4はSP 25出土である。2は須恵器の壺蓋で、天井部は回転ヘラケズリを施す。3は土師器の小型の鉢で、口縁部を小さく外反させている。4は弥生土器の壺底部である。

4.まとめ

調査対象地が狭小であること、且つ、台地の縁辺部に位置しているため遺構の状況は把握し難いが、出土した弥生時代から中世までの遺物から周辺の状況を伺い知ることができる。

東側に近接している第138次調査では弥生時代から平安時代までの遺構を検出しており、今回の調査で検出した遺構はこれらに連続するものである。

調査においては、地山のローム層上面を便宜的に遺構面としているが、掘立柱建物等の柱穴がいずれも浅いことから、上層に整地層が存在したことを考えなければならない。土層図 Fig. 48において、西南側の段落ち部分に作られた井戸 SE 01の掘り込みの状況をみてみると、北側の井戸肩は第6層の黒褐色粘質土及び、第7層から掘り込んでいる。又、南側の井戸肩はやはり第16層の黒褐色粘質土を掘り込んでいるが、肩のレベルは北側に比べ低い。しかし、この黒褐色粘質土はローム層上面から谷部までほぼ水平に堆積していることから整地層とも考えられる。江戸時代の開田より第15層の西側を削平されている状況をみてとれることから元来は調査区西側の広い範間に整地がなされていたと考えたい。

有田・小田部

第22集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第427集
1995年（平成7年）3月31日

編集・発行	福岡市教育委員会
	福岡市中央区天神1丁目8-1
	電話（092）711-4666
印 刷	ダイヤモンド印刷株式会社
	福岡市東区松田3丁目9番32号
	電話（092）621-8711㈹